
ネギま!! とある外道の少年探偵

過労死志願 (大バサミではなく、阿良々木暦撰・文房具最凶の瞬間接着剤が武器です。)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま!!! とある外道の少年探偵

【Nコード】

N2220S

【作者名】

過労死志願（大バサミではなく、阿良々木暦撰・文房具最凶の瞬間接着剤が武器です。）

【あらすじ】

麻帆良学園。この学園には様々な悪が横行していた。

カツアゲ、イジメに悪質レス。火サスもビックリ湯煙連続殺人事件。

しかし彼はそんなことは一切知らない!!!金がないなら動かない!!!

そんな外道な信念を持つ彼を麻帆良の人々はこう呼び震撼した！！

少年探偵・犬神ゲルと！！

*この物語はクロスオーバーですが原作を知らなくてもしっかり楽しめます。犬神ゲルの活躍に乞うご期待。

この物語の少年探偵は（前書き）

やっちまいました。

アイデアノートに載せるつもりだったのに……………。

反省はしますが後悔はしません。

この話は邪道二次創作ですが、ネギまの二次創作は王道のほうをもう一本書く予定ですので、そちらも楽しみにしてください。

この物語の少年探偵は

うちは夢を見とった。

うちのろくでなしの腐れ親父がニコニコ笑いながらこつちに手をふつとるんや。

「マリーー！！ お父さん仕事に就いたでえー！！」

「ほんま！！ ほんまなんお父ちゃん！！」

なぜか幼くなつとつた私は、父親の言葉に無邪気に喜び、腐れ親父に駆け寄って行きよる。

「ほんまやで！！ お父さんは自分で企業を立ち上げたんや！！
これやつたらお父ちゃんも就職できるやろう！？」

「お父ちゃんすごいー！！」

私は大いに喜びながら父親に抱きついた。その時、父親の最後の言葉が耳に入る。

「実は起業すのに二千万ほどかりてんねんけどな！！」

「やっぱりかいいいい！！ そんなオチやと思うたわボケオヤジ
イイイイイイイ！！」

「うわ！！ なんだ一体！！ どうしたんだマリーー！！」

私の名前は安川マリー。借金まみれの父親に人身売買されたあげく、とある少年の下で働く薄幸の美少女（自称）や。

…
†…†…
…†…†…

安川マリーがいる場所は麻帆良学園女子中等部1 - A。

デス眼鏡ことタカミチ・T・高畑を担任にもつ曲者クラスである。

今現在彼女はクラスに多くいる友人の一人、長谷川千雨の愚痴を

聞いているところだった。

クラスにおいては公然のツッコミ役についているマリーは、麻帆良にいる数少ない常識人の一人だ。他の人間にあまり心を開かない長谷川が彼女には普通に話しかけるのもここが原因だったりする。

「でさ、そのガキが不良をぶん殴ったら、その不良がまるで建築用のハンマーでぶん殴られたみたいに吹っ飛んでいったんだって!! マジでありえねえって!! このドクタースランプだよ」

「はははは……。そら凄いい子があったもんやなあ。クーフェイよりもすごいんとちゃうん」

微妙に引きつった笑みを浮かべながらマリーは何とかそう答えた。

しかし、彼女は内心では冷や汗を滝のように流しているのである。なぜなら、その不良を殴り飛ばしたガキとやらは、マリーが良く知る人物だったからだ。

『い、言われへん。そいつがうちの上司やなんて絶対に言われへん
!?!』

マリーは内心そんなことを考えながら、長谷川が飽きるまで彼女の愚痴に付き合ったのだった。

それから数時間後。マリーはとある会社の前にやってきていた。

犬神アンダーグラウンドサーチ。マリーが父親に人身売買された会社である。

職種は一応探偵事務所。といつてもドラマや漫画に出てくるような冴え渡る推理で事件解決なんてスタイリッシュな探偵事務所ではない。

主な仕事はペット探しや不倫の裏づけといったいわゆるリアルサイドに沿った探偵事務所である。

マリーがそんなことを考え溜息をついていると、突然彼女の後ろに長身で細い影が差した。

「これはこれはマリー様。お帰りなさいませ」

「克蘭レスさん。ただいまー」

サイドでピンと跳ねた特徴的な口ひげを持つ燕尾服を着た細身の老紳士は、この探偵事務所の執事・克蘭レス。年齢、正体、過去その他一切が不明なナイスガイである。

執事脳の腕も、助手としての力量も一級品のため、本来正式な助手であるはずのマリーに回ってくるはずの仕事を根こそぎ搔っ攫っているマルチスキル能力者だ。

「ゲル様がお待ちです。どうぞ中に」

「ありがとう克蘭レスさん」

扉を開けマリーを先に入れてくれる克蘭レスにお礼を言いつつ、マリーは事務所のなかに入った。

人身売買と言ってもマリーの場合はその形態をとった保護といったほうが相応しいのだろう。

借金まみれの父親に付き合い借金取りに終われる日々を送っていた小学生時代のマリー。そんな彼女を不憫の思った……のかは定かではないが、彼女の父親である男はむかし借りを作っていたこの会社を営んでいる人物に、借りを返す代わりにマリーの身元引受人になってくれるようにたのんだのだ。

結果、彼女の父親はマリーに内緒で一人で逃走。強制的に身寄りがなくなったマリーは助手としてこの会社に勤務することになったのだ。

さて、散々引っ張ったこの会社のオーナーについてだが……

「お、お願いです！！俺の娘を助けてください！！このままじゃ、あのマフィア達に娘はひどい目に会わされてしまうんです！！お金はこれだけしかありませんがうちの全財産です。どうか、どうか娘を！！」

今日は珍しいことにお客が二人来ていた。

一人はボロボロの服を着たいかにも貧乏そうな男。その両手には数枚の小銭が握られており、大粒の涙を流しながら土下座をしていた。

「そんなことより、私のメリーちゃんを早く探してほしいぞます！
！ お金ならいくらでも払うぞます！！」

もう一人は、いかにも金持ちそうな太った夫人。その手には分厚い万札の束と、デブ猫の写真が一枚握られていた。

その二人に対面するように座っていたオーナーは、

「御意。すべては私にお任せ下さいマダム。」

メタルフレームの眼鏡に、切りそろえられた黒髪。鋭い目つきをした美少年。

マリーと同一年の少年にしてこの会社のボス！！ 犬神ゲルはそういつて、金持ちそうなマダムの手を取った。

「っっておかしいやろうがああああああああああ！！！」

その顔面にマリーの鋭いツッコミを伴ったハリセンが直撃したのは言っまでもないことだろう。

犬神ゲル

事件が起これば警察が動く。

しかし、奴らは動かない。

すべては、

依頼と

金と

気分次第。

…
†…†…
…
†…†…
…

「いやいや。動こうや、少年探偵」

「安川……世の中にはな、できることとできないことがある」

「ただのやる気の問題やろ!?!」

ここは犬神アンダーグラウンドサーチ。探偵事務所である。

そこで言い合っているのは金髪碧眼に巧みな関西弁を操るアンバランスな少女、安川マリー。そして、完璧な無表情のままメガネをくいつと上げとんでもないことをのたまった、この探偵事務所のボス。少年探偵犬神ゲルである。

この探偵事務所には数々の異常な個所がある。

一つ目。まだ中学生の犬神ゲルが経営者をしていること。

二つ目。そこにいる従業員のほとんどがまだ高校生にもなっていないメンバーで構成されていること。

そして三つめ。何よりも異常な個所は……

「金にもならん依頼をするのは僕の主義に反する。摩訶不思議な難

事件や怪盗との直接対決なんてものは名探偵にでも任せておけ」

「君はそうやないんかいな!!」

「少なくとも自分で名探偵というほどうぬぼれてはいない」

「あやまり!! 全国の名探偵の皆さんに謝りっ!!」

何よりも金を尊び、金にならなければどんな難事件であろうと動かない!! という、ある意味あっぱれな経営理念もっているところだった。

「大体、安川。ここ麻帆良では摩訶不思議な事件なんて腐るほど起きているんだぞ。いまさら僕らが動き出したところですぐにもみ消されてしまうのが落ちだ」

「う……。まあ、そらそうやけど……」

そう。残念なことにここ麻帆良で起きる摩訶不思議な事件のほとんどが魔法使いが絡んでいる。基本的に彼らは存在を隠しているものなので、当然彼らが起こした事件はもみ消され名探偵が活躍する場所なんて存在しなくなってしまうのだ。

この会社に入ってマリーが嫌というほど思い知ったこの学園都市での真理である。

「まあ、ようするに……僕がお金が好きだから金にならん事件などで働きたくないというだけなのだな」

「って、やっぱりかい!!」

さて、そんな少年探偵とその助手にあるまじき存在である犬神とマリーであったが、意外や意外。仕事はちゃんと来るのである。

その主な仕事の一つを今日は紹介させていただこう。

犬神は屋根の上を爆走していた。

場所は生徒や教員たちが住む寮が立ち並ぶ麻帆良学園居住区。

二十メートル近くあいている家々の屋根。それらの上を平然と飛

び移りながら、犬神はターゲットを追跡し続ける。

「安川！！ 目標が西通りの路地を曲がった！！ へまをするな！」

「あいあい、ボス」

やる気のない掛け声とともに、マリーは待ち伏せしていた物陰から飛び出し目標の目の前に立ちふさがる！！

「さあ、おとなしくお縄につきや！！ エリザベスちゃん！！」

悪趣味なりボンを付けたトラ柄の猫は、突如出現したマリーに、『ギニャー』と名前に似合わないどら声の悲鳴を上げながらあわてて反転しようとした。

しかし……

「逃げることは許さん、金づる。おとなしく僕の利益になるがいい！！」

そんなどこかの悪役のような言葉を吐きながら、隣に立っていた七十階建ての高級生徒寮の屋上から犬神が飛び降りてきた！

「つて、犬神君！？ どこから飛び降りとんねん！！ 死んでまうやないかああああ！！」

マリーはあわてて体を気で強化し、犬神を受け止めようとする。だが……

「邪魔だ、安川。どけ」

「へ？」

瞬間。落ちてきた犬神の両足がマリーの顔面に食い込んだ！！

「ギニャアアアアアアアアアアアア！！」

先ほどの猫よりも大きな悲鳴を上げのたうちまわるマリーをしり目に、犬神は宙へと飛びあがり空中三回転ひねりを加えながら、地面に降り立ちポーズをきめる。

「チーン、6.5」

「点数出るんかい……あと、私の犠牲の上になりたつとるくせに点数低いやん……」

「だまれ安川。ミッションコンプリートだ。早く依頼主にこの金づるを届けに行くぞ」

犬神はそんなことを言いつつ、いつの間にか捕獲していたネコを
エリザベス
掲げた。

…
…
…
…
…
…
…

「なあ、犬神君。なんかこう……私らがやってることって……なんか違うへん？」

「何がだ？」

「全部にきまっとるやんか!!」

鼻に詰め物をしながら、ゲージに入った猫を持つ犬神にマリーはそういった。

「私らがやっつてることって……犬探し、猫探し、浮気調査＆猫探し、浮気調査、犬探しばつかしやん。仮にもカッコかわいくておしやれチックな少年探偵なのととるくせに、なんやもう浮気調査するペット探偵になっとるやんか」

「依頼が来て、仕事をして、金をもらう。そしてそこに信用が生まれました次の依頼が来る。美しく循環していて結構なことだと思わんか？」

「いや、そらおもっけど……ちゃうやん！！もつとあるやん！！少年探偵らしい事件！！具体的には、小学生になってもうた某高校生探偵のような密室連続殺人事件とかさあ！！」

「安川……その話を聞いた僕の感想を素直に言わせてもらおうと……」

犬神はそこで言葉を切り、眼鏡をくいっと押し上げた。

「超……どつでもいい」

「超！？」

「第一……依頼されたならともかく、なんで僕がそんな一銭の足しにもならんような事件を解決せねばならんのだ」

「いや、でも犬神君。難事件とか解決したら、評判が評判呼んで今よりさらに儲かんで」

「断固拒否する！！」

「なんで！？」

「そのためのたった一度のタダ働きが僕には我慢ならんだ。儲かっているのはわかるが魂が拒絶する!!」

「いや、しようやそんならい！ 損して得取れ、商売の基本やん！」

「無理だ!!」

どうやら真剣に考えただけでも身の毛がよだつらしい。無表情ではあるが犬神の手がカタカタと震えているのがマリーにはわかった。

「はあ、君も難儀な体しとんなあ……せやったら、もっとドラマチックな事件を……」

そう言ってマリーたちが路地を曲がり暗い裏路地に入ろうとした時だ、

「ん？」

「お!!」

なんとそこでは事件が起きていたのだ。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

裏路地には四人の人物が立っていた。

二人は白い目だし帽をかぶった明らかな不審者。

もうひとりにはサングラスに薄い無精ひげ。片手にはサイレンサー付きの拳銃が握られている。

最後の一人は女子高生。ウルスラ女子高等学校の制服を着ており、

白い目だし帽をかぶった男たちの腕の中でぐったりと気絶している。

「こ、これは……事件……！」

そこまで思考が行き着いたマリーは、顔いっぱいには歓喜の色を浮かべながら、びしっと男たちに指を突き付けた。

「そこまでや変質者ども！！ 私らが通りかかったからには好きにはさせへんで……！」

「なんだこのガキども……！」

目だし帽の男の一人は、マリーたちが警察に行く気はないということに気づき安堵の息をもらしながらそう呟き、

「変質者とは失敬だな……！」

サングラスをかけた男はそう言いながら銃を構えた。

「僕たちは……ゆかい犯だ……！」

「NO！！ 兄貴、ゆうかいはん……！」

「ん？ あれ、そうなの……！」

そんなことを言いながら、拳銃を下げ部下たちにそう尋ねるグラサン。部下たちもいつものことと諦めているのか、力なくそれに返答を返している。どうやらかなりの天然のようだ。

「愉快犯でも誘拐犯でもどっちでもいええわ。私らに会ったんが運

のつきやで!!」

「ばかやるー。ゆかい犯とゆうかい犯じゃイメージが違いすぎるだろうが!! イメージが違いすぎるだろうが!!」

大事なことなので二回言ったようだ。

「そーか。伸ばすのか……」

男たちが何か言ってくるがマリーの耳にはもう入っていない。彼女の頭の中には明日の一面トップを飾るであろう自分たちのヒーローインタビューのことしかなかった。

「さあ、犬神君、出番や……」

そして振り返ったマリーの眼に映るのは、

「ふー。やれやれ……」

めんどくさそうに踵を返し、違う道から帰ろうとしている犬神の姿だった……。

「で……って、なに帰ろうとしとんねん!!」

「安川。僕はさっさと依頼者に猫を引き渡し金をもらいたいのだ」

「のだって……ちゃうがな!! あの女の人助けなあかんやん!!」

犬神は、あわてて引き留めようとしてくるマリーの手を鬱陶しそうに眺めながら、気絶した少女に視線を移す。

「おい。その女……僕は全くどうでもいいんだが、依頼料を払うなら助けてやらんこともないがどうする？」

当然気絶した少女から返事が聞けるはずもない。

「あの……犬神君？」

そして、犬神はしばらく待った後、

「返事がない。ただの屍のようだ」

「気絶しとんに返事ができるか!!」

さわやかな笑顔でサムズアップした彼の頭を、マリーのハリセンが容赦なく一撃した。

「金の話なんて助けた後でも出来るやる……君は少年探偵以前に人として改善せなあかん箇所がそこかしこに……」

その時、

「なにこつち無視して漫才してんだよ、ガキどもが！」

しびれを切らした目だし帽がポケットから拳銃を取り出し犬神を撃った!!

しかし、犬神はそれにいち早く反応しわずかに体をずらすことによって弾丸を回避した。

そして、

「あ……………」

「あ……………」

その弾丸がネコを入れていたゲージを壊し、せつかく捕獲したネコに自由を与えてしまう。

ニヤー。と一声鳴きながらさつさと逃亡を開始する猫を、マリーと犬神は黙って見送ることしかできなかった。

「おれたちは無駄な殺しが好きじゃないが……見られたからには仕方がねえ。おとなしく死んで……」

「ああ………………。話してるところ悪んやけど、お兄ちゃん。ひとこと言わして」

「ああ？ なんだよ」

「そおのお…………ご愁傷さま。殺されんとしてや。違う意味で一面飾ってまいそつやし」

「おまえ、なにいつてんだ!」

しかし、苛立つ強盗をしり目に、マリーは気で両足を強化。犬神の邪魔にならないように近くの家屋の屋根まで飛びあがり回避する。

「な!」

「おお！ なんだあの子。ちょうすげー。」

ここ麻帆良ではこの程度のことはできる人間は多々いる。しかし、それに驚いているということは、彼らは外の人間なのだろう。

だから彼らは知らないのだ……。ここには……。決して喧嘩を売ってはいけない存在がいることを。

「まったく……。何のつもりだ貴様ら」

しばらくの間無言だった犬神は、数秒後眼鏡を押し上げ、

「何が不満だ？ せっかく面倒だからお互い不干渉で済ませてやろうとしているのに……。このバカどもが！！」

瞬間。犬神は男たちのすぐ横に立っており、今まで発言しようとしなかった、身長2メートルはあるであろう巨漢の目だし帽の男を力いっぱいなぐりつけた。

瞬間！！

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

殴り飛ばされた男がまるで砲弾のように吹き飛び、空の彼方に消えてしまう。仲間の男たちは茫然と見つめるしかなかった。

「僕の仕事を邪魔する奴は……。僕に蹴られて死ぬがいい」

一瞬だった。

犬神は隣に立っていたもう一人の目だし帽の側頭に回し蹴りをたたきこみ地面に熱烈なキスをさせた後、倒れる途中の目だし帽の頭を足場に跳躍。あわてて拳銃を捨て降参のポーズをとるグラサンの脳天に、容赦ないかかと落としをたたきこんだ！

「ケペー！！」

ダサい悲鳴を上げ、まるで打ちつけられた杭のように地面に沈むグラサンを見て、白い目だし帽は震える声で屋根から下りてきたマリーに尋ねた。

「お、おい。何なんだよおまえたち！！」

「ああ。まあ、あえて答えるなら、犬神君は少年探偵で……私はその助手なんやけど……」

「しょ、少年探偵！？ 少年探偵っていうもんは頭脳で勝負するもんなんじゃないのかよー！！」

「いや、私としてもそっちが理想なんやけどな……犬神君は……」

そして、そこで言葉を切ったマリーは、女子高生をたたき起し依頼料の請求をしている犬神を見て大きくため息をついた。

「超絶武闘派の……化け物探偵やねん」

犬神ゲル……無敵無双。

麻帆良の裏においては、高畑・T・タカミチを抑え体術最強の称

号を持つ怪物少年探偵である。

犬神ゲル（後書き）

犬神ゲルと安川マリーは気の制御を体得しており原作よりもハイスペックになっております。

子供先生現る!?

「ほんまにも〜。犬神君は少年探偵らしくなすぎるわ。人間ヤード単位で飛ばすんわ、違う世界の学園都市の第一位だけやおもったのに……」

「安川、その発言はいろいろと危ない」

マリーと犬神はそんなことを言い合いながら、玄関で靴を履いていた。

両者とも麻帆帆良学園中等部の制服に身を包んでおり、その手にはカバンが握られている。

「ほな、クランレスさん。行ってきます」

「うむ。行ってくる」

「いってらっしゃいませ」

玄関先では執事服に身を包んだ老紳士が一礼をして二人を送り出す。

「まって、二人とも!!」

そういつて追いついてきたのは今年で小学五年生になったマリーの助手……安川ヒメ。

元暗殺者組織のボスの娘だった彼女は、犬神ゲルにとある事件の

解決を依頼。なんやかんやで身元引受人がいなくなった彼女は一番
なついていたマリーが引き取り面倒を見ているのだ。

「って、なんやかんやってなんやねん!!」

「どうした安川。はやくしろ。遅刻する」

「マリー早く!!」

「ああ、ちょっとまってえや!! 人がせっかく仕事こなしてんの
に置いてかんといてえや!!」

彼らの朝はいつもこんな感じである。

…+…+…+…+…+…+…

満員電車で揺られて数分。駅についてゆっくりと停止する電車の中で、マリーは小さな動きでストレッチをしておく。

「まったく近くでやられるとはた迷惑なことこの上ないな」

「そらわかってるけど、犬神君や姫ちゃんみたいにいつでも全力で動けるわけじゃないし……体ほぐしとかんかったら怪我するやんか」

「マリー。ガンバって。遅刻しないように」

「了解や姫ちゃん。姫ちゃんも学校では暗殺とか言ったらあかんで」

「うん!」

かわいらしい笑顔を浮かべてうなづいてくる妹分にマリーは鼻血を噴出させながら悶絶する。

「どうでもいいが、留年だけはするなよ。学費に響く」

「いや、中学生に留年はないやろ。それにこつ見えても馬鹿レンジヤーに入ってへんねんで！」

「入ってないだけだろう。低空飛行成績が」

「……何のことやらさっぱりでんなあ」

冷汗をダラダラ流しながら苦しい回避を披露するマリーを無言で見つめた後、犬神はすつと出口に目を向ける。

「開くぞ」

「ああ、ほないってきます。犬神君！ 六重君と猫谷君とけんかしたらあかんで」

「当たり前だ。どうしてそんな金にもならないことをしなくてはいけない」

「行ってきます」

そう言って、マリーと姫は電車の出口から飛び出す。

はじめのうちは人の波にもまれていた二人だったが、すぐに列の先頭に立ち改札を飛び越えるように通過（もちろん定期をきちんと通し回収したあとで）。移動購買部から、通り越しざまにパンを数个買って金を置いていき二人は自分の目的地へと駆け出した。

…
十…十…
…
十…十…
…

さて、それから約一分。女子中等部前までやってきたマリィはそこで信じられないものを目にした。

「明日菜……なにしとんねん」

自分のクラスメイトの 神楽坂明日菜が十歳ぐらいの子供の頭をつかみ持ち上げているというかなりショッキングな光景を！！

「って、なんでやねーん」

とりあえず懐から取り出したカードからハリセンを出現させ、明日菜の頭に一撃加えるマリィ。

「きゃあ！ なにすんのよマリィー！！」

「いやいや、それはこっちのセリフやわ明日菜。何がキいじめてんねんー！！」

「だ、だってこいつが私に失恋の相が出てるってふざけたこと言うから……」

「ガキの言うこといちいち気にしとったらちっさい女や思われて、高畑先生に嫌われんで」

「うう……一理あるわね」

マリィの言葉に納得したのか、明日菜はやや不満そうではあったが矛を収める。

「でもぼく、こんなところで何しとるん？ ここは女子中等部やから、ぼくみたいな子供はようはないやろ？」

「そやねー」

そういつてマリーの質問に言葉を重ねてきたのは、マリーの操る大阪弁とはまた違う関西弁　京都弁を操る大和撫子少女。

明日菜のルームメイトである近衛木乃香だ。

「ここは麻帆良学園都市の中で一番奥のほうの女子高エリア。初等部は前の駅だよ」

「そつやな……ホンマ何しに来たんやボク？」

「え、ええつと、ぼくは……」

木乃香とマリーに尋ねられ慌てふためきながら何かを言おうとする少年。そのとき、

「その子は新任の先生だよ。安川さん。近衛さん」

校舎の上のほうから声がかげられ、マリーは嫌そうに、木乃香と明日菜は驚いたように顔を上げた。

「た、高畑先生!!」

「うわー。ということとは裏の話かい……。巻き込まれそうなんて犬神君にばれたらまた怒られてまう……」

微妙に切実なことを言いながら頭を抱えるマリーをしり目に、高畑との挨拶を終えた少年は三人に向かってぺこりと頭を下げてくる。

見た感じ外国人なのに、日本の文化をよく勉強しているなとマリーは少しだけ感心した。

「お初にお目にかかります。今学期からこの学校で英語を教えさせてもらうことになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

「どこの野菜やねん！！」

とりあえず仕事に忠実なマリイは、記念すべき初ツッコミをネギの頭に叩き込むのだった。

初日 A面

「ということが今朝方あったんやけど……」

「ちょっとまって……。いや、マジでおかしなことだらけだろつうが
！！」

「安心してえや千雨。校長室でおかしいところは一通りツッコんど
いたから」

「ありがとうなマリー。でも結局は覆らなかったんだろつう？」

「うん。まあ……学園長妖怪やしなあ……」

「はあ……また頭痛の原因が増えた」

時刻はホームルーム前。場所は2 - Aの教室。

そこでは、頭を抱えるメガネをかけた少女 長谷川千雨と苦笑
を浮かべたマリーが雑談をしていた。

当然そのほかに生徒はいて、今日やってくる新任の先生のうわ
さを姦しく話し合っている。

「ああ！！ チャオー私にも肉まんひとつ！！」

「了解ネ。マリーはいつもよく食べるネ」

「朝はこんくらいくつとかへんと体がもたへんねん。仕事ミスった

ら晩飯抜かれる時もあるし……」

「お前はお前でなかなかドラマチックな人生送っているよな……」

「なんや千雨も味わいたいんかいな？　うちのおやじの養子になつたらいやでも味わえんで」

「全力で遠慮させてもらう」

長谷川がそういつてひきつった笑みを浮かべたとき、マリーの耳にクスクスと笑う声が聞こえた。

「ん？なんや」

「ああ。双子と美空が洗礼の準備をしているみたいネ。相変わらずいたずら好きネ」

「ちゅーか、中学生が作る毘ちやうやるあれ？　どこのピタゴラスイッチや」

まあ、いつも仕掛けられていることなのでさすがにマリーはもうあきらめていた。小さくツツコミをいれるだけ位にとどめて、あとは全力でスルーする。

その時、ようやく教室の扉に人の気配が現れた。

「お、きよつたな？」

「あ。マジかよ。早いな……」

長谷川がそういつて自分の席に戻るのを見届けつつ、マリーは子供先生の反応をうかがった。

仮にも裏^{まは}サイドに所属しているなら魔法なしでもある程度の対処はしてのけるはずだろうけど……子供やしなあ……。大丈夫やろうか？ うちのクラスのトパラップ群。

そして、その時は訪れた！！

…十…十…十…十…十…十…十…

ネギ・スプリングフィールドは緊張していた。

ここでの結果が彼の夢がかなうかどうかを左右する。そう思うと体が石のような固まってしまいそうだ。

「……………」

いや、この表現はいろいろトラウマとかがやばいから今度から使わないでおこう……。

とにかく彼は緊張していた。

いくら大人びた性格と子供離れした頭脳を持っているとはいえ、彼はまだ十歳の子供。緊張するのも仕方ないことといえた。

「うう。こんなにたくさんの方々に教えるのか……なんだかドキドキしてきたぞ……。明日菜さんみたいな人ばかりだったや嫌だなあ」

そして、ネギは自分の教室のドアを開ける。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

ネギが入ってきた瞬間、マリーは驚きのあまりあいた口がふさがらなかつた！！ なぜなら、ネギは魔法障壁を使ったまま教室の中に入ってきたのだ！！

「ちょ、ちょっとエヴァちゃん！？ 魔法って隠匿されとるもんぢやうのー！！」

「ああ。その通りだ。だがあの坊やはそれに関しての知識が薄いらしいな……メルディアナ魔法学校ではいったい何を教えていたのか……」

マリーが隣の席に座っているエヴァンジェリンに話しかけたとき、ネギはようやく生徒がざわついていることに気づき、それが自分が黒板消しを空中にとどめているためだと気付いた。

ネギが魔法障壁を切ったため、黒板消しはようやく通常の物理法則に従って落下した。

巻き上がる白い煙。むせ返るネギ……。

「いや、肩に粉が積もるほどって……どんだけ手入れしてへんねん
！！」

とりあえず、マリーはツツコンでおいた。

「なあ、エヴァちゃん。いまのはアウト？ セーフ？」

「チェンジ。顔を洗って出直して来いと言われても文句は言えない
な」

エヴァの評価を聞きマリーは顔をひきつらせた。

律儀に全部のわなにかかり目を回す子供先生に群がる自分のクラスメイトを見て、マリーは前途多難だなとため息をつくのだった。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

時刻は放課後。

マリーは学園室に呼び出しをくらってしまったため、一人廊下を
のそのそと歩いていた。

「はあ……… いったいなんなんやろ？ とうとう私もバカレンジャー

の仲間入りしてもうたんかな？」

《バカゴールド》としてクラスメイトに囃し立てられている自分を想像してしまいマリーは冷や汗を流す。

そして、学園長室の前にたどり着いたマリーは二、三回ノックをした後、恐る恐る学園長室の中をのぞいた。

「し、失礼します……」

しかし、そこで待っていたのは意外な人物だった。

「遅いぞ安川、時は金なりといつも教えているだろう」

「って、あれ？ 犬神君。こんなところで何しとるん？」

「クライアントの前だ、安川。姿勢を正せ」

そういわれて、マリーはようやく状況を理解した。

学園長室には執事服を着た克蘭レスと、初等部の制服ではなく動きやすい普段着を着たヒメがいる。

「ってことは……学園長から仕事かいな」

「ほほほ……その通りじゃよ。犬神アンダーグラウンドサーチの諸君」

最後に、とうてい同じ人間とは思えない後頭部を持った老人が、老獪な笑みを浮かべてマリーを自分の城へと招き入れた。

初日 B面

「でさあ、犬神君。今回の依頼のことどう思う？」

「どうとは？」

「いや、ネギ君のフォローについてやん」

「愚問だな安川。僕たちはプロフェッショナルだ。金をもらい依頼されたのなら僕たちは無言で働くだけだ」

学園長から依頼を聞いたマリィと犬神はそんなことを話しながら女子校エリアを歩いてきた。マリィの肩には肩車されたヒメが乗っておりその後ろを克蘭レスが無音のままついていく。

依頼の内容は英雄の息子、ネギ・スプリングフィールドの護衛とサポート。

まだ幼いネギを最大限のサポートをするようにとのことだった。

「でも、いつもやったら裏の厄介ごとにはかわらうとせえへんやんか。なんで今回に限って……」

「安川……あまり自慢できないからこそだけの話にするかな……」

犬神はそういうと、メガネを押し上げきらりと光らせる。

「僕は、親の仇であっても金さえもらえれば仕事を受ける人間だ」

「ほんまに自慢できひんで犬神君!！」

顔に縦線が入ってしまったっているマリーのツツコミを華麗にスルーし犬神は歩き続ける。

「でもなあ、犬神君。ネギ君のことなんやけどあれフォローするのほんまに大変や……」

その時、マリーの隣を一人の少女が通り過ぎた。

本を大量に抱え前髪で目元を隠した少女。

本屋ちゃんこと宮崎のどこである。

「あ、安川さん学園長はどうでしたか？」

「ああ、なんや世間話聞かされたわ……」

「世間話ですか？」

「何をしている安川」

立ち止まって会話をしているマリーに十メートルほど先行してようやく気付いた犬神はふりむき、マリーのほうへ歩いてくる。

「いや、犬神君。もうちょい早くに気づいてえや。今までずっと話とつたやん」

「失礼な僕は気づいていたぞ。ただお前ごときのために立ち止まるのが面倒だっただけだ」

「そっちのほうがりより悪質やないか!!」

本来なら絶対に入らないはずのハリセンの一撃を受け犬神のメガネが吹っ飛ぶ。いわゆるギャグ補正というやつだ。

「で、お前の後ろに隠れているその辛気臭そうな娘はいったい何者だ?」

「辛気臭そうって……もうちょい言い方ってもんがあるやん。一応私のクラスメイトなんやで?」

若干顔が引きつってしまふマリーだったが、とりあえず流すことにしたのか、犬神がやってきた瞬間自分の後ろに隠れてしまったのどかを紹介する。

「私のクラスメイトでネギ先生の教え子の宮崎のどかちゃんや。これからいろいろあるかもしれへんのやから覚えておいたほうがええんちゃうん」

「それはいいのだが、なぜこいつは僕を見て隠れたのだ?」

「ああ……この子、男性恐怖症やねん」

「じ、ごめんなさい」

「ああ、いい。別に気にすることはない。僕にとっては心底どうでもいいことだ」

「犬神君……その言いぐさはなおそうや……。本屋ちゃん、この人

は私が働いとるバイト先のBOSSで、犬神ゲル君や」

「ゲルだ。覚えなくてもいいぞ」

「よ、よろしくお願いします」

「ああ、そんな挨拶なんてせんでええって。性格最悪やからあんま近づかほうがええよ」

「まあ、そつだな」

「否定せえへんの!?!」

そんな無駄話をしている時だった。

犬神とマリーの漫才に宮崎は少しだけ笑ってしまっており、足もとへの注意がおろそかになってしまっていた。本を持ちすぎて前を見られなかったことも原因の一つだろう。

とにかく、彼女は階段に差し掛かっていることに気づかなかつたのだ。

「あ!」

気づいた時にはもう遅く、彼女は階段から足を踏み外しそこから落ちてしまった。

「な!」

「ふむ?」

マリーと犬神がそれに気づいた時、二人は素早く目配せをしそして気を循環。二人の相方を連れて行動を開始する。

犬神は素早く宮崎の体を捕まえ一緒に落下。受け身が取れるように位置を調節する。その下では素早く降りた克蘭レスが二人をキヤッチできるような体制で待機している。

マリーは借金取りから逃れるために父親に鍛えられた俊足をいかになく發揮し、杖を構えて何かをしようとしていた赤毛の少年に向かって駆け出す。

その間、0.1秒。俊足どころか神速とあっていい速さ。瞬動術である。その先ではマリーの肩から飛び上がったヒメが、少年が杖を取り出す光景を見てしまったツインテールにオッドアイの少女の前に降り立ち、その首筋に手刀を当て意識を刈り取っている。

「ほんま何しとんねん、じぶん！！　今はありえへんわ！！」

「え、あれ、安川さん！？」

「安川……大丈夫か？」

「ああ、私は大丈夫やけど……」

「違う。その小僧の安否の確認だ。誰にも見られてないよな？」

「しよ、正直微妙やわ……朝からなんか疑つとつたクラスメイトにちよつと見られてもうたかもしれへん。姫ちゃんがすぐに気絶させてくれたから、あいまいな記憶となるくらいまで印象は薄められた

やるつけど……」

「ちつ。とにかくその小僧をよこせ。宮崎は気絶させて図書館に放置するようクランレス命令にしておいた。目が覚めたら勝手に夢だと勘違いしてくれるだろう」

「明日菜は？」

「目撃者のことか？どこにいたのかわからんからな。薬を打ち込んで眠らせた後学園長室に連れて行く。クライアントに相談する必要があるからな」

「あ、あなたたち！！いったい何者なんですか！！明日菜さんたちに何を……」

「少し黙れ」

その言葉と同時に、犬神は掌底をふるう。それはネギが常に張っている魔法障壁をやすやすと貫通してその顎を直撃、脳を揺らし行動不能にする。

「ちよ！！ 犬神君！？ やりすぎやろ！！」

「安川……今僕は仕事が失敗しそうになって非常に機嫌が悪い。意見をするなら……」

そして、抗議の声を上げたマリーに対して、完全に人殺しの目となった瞳を向けてくる。

「命を懸ける覚悟をしろ」

「い、Yes・BOSS……」

冷や汗をたらたらと垂れ流しながらマリーは敬礼する。

犬神はそんなマリーを見て鼻を一つ鳴らすと、ネギをぐるぐる巻きにした拳句猿轡をはめて捕縛。戻ってきた克蘭レスがもってきたキャリアケースにネギを押し込み学園長室まで戻るのがだった。

「これ、完璧にどっかのマフィアの誘拐現場やんな？」

マリーの疑問は完璧に無視して……。

初日C面

学園長室。

そこには無言のまま怒気を垂れ流すメガネの少年。真つ青な顔で助手の少女を抱きしめる金髪の少女。そんなカオスの中でも超然としたまま立っている特徴的なひげを持つ老執事。ぶくぶくと泡を吹いて気絶している赤毛の少年。そして最後に頭を抱えるぬらるひよんがごとき長い頭を持つ老人がいた。

「さっそくネギ君の魔法がばれそうになったのか？」

「ええ。そういうわけです。ゆえに我々犬神アンダーグラウンドサーチはこのままではお客様の要望をかなえることが限りなく不可能だという決論に達しました。ゆえに契約内容の変更を打診させに来てさせていただいた次第です」

「……なあ、犬神君そんなこと話す前にネギ君起こしたったほうがええんちゃう？なんかやばい感じに痙攣してんねんけど」

「黙れ安川……僕は今不機嫌なのだ」

「はい……」

「いやいや、ひかんでくれよ、マリーちゃん。この怒気は老体にはこたえるのじゃぞ!？」

「ちょっとだけ泣きそうになりつつ、近右衛門口を開く。」

「犬神君。ばれそうになったのはいったい誰なのじゃ？」

「……現状は二人。こいつのクラスメイトの宮崎のどかと神楽坂明日菜です。後者は特に危険で魔法を使うところをじかに見られた可能性があります」

「ふむ……そうか」

黙り込む近右衛門にマリーは『何考えとるんやこの爺ちゃん』と首をかしげる。

そして近右衛門が出した結論に、

「のお。犬神君。その件に関してはこのまま放置してくれんかの？」

この学園の深淵を見ることになる。

「それは……どういうことでしょうか？」

「言葉どおりの意味じゃ。神楽坂明日菜の魔法ばれについてはこのまま放置。ネギ君から彼が受け持つクラスへの魔法ばれもできうる限り目をつぶろうと思っておる」

「な、なやそれ……あそこにはなんもしらん生徒や、一般人として成長したる木乃香もおるんやで！！ あんたの孫ちゃんかい！！ それをなんでこんな危ない世界に引きずり込もうとしとんのや！！？」

「少し黙れ安川。クライアントの前だ」

学園長の言に犬神への恐怖も忘れてしまったマリーは思わず怒声を上げるが、犬神はそんなマリーに殺気を飛ばし黙らせる。

「……なるほど……メガロ・メセンプルアMMの上から命じられた命令でしたか。悲しきは宮仕えといったところですか？ あなたのご苦労はよくわかりますよ近右衛門殿」

そして、犬神はまるでそんなこと思っていないといった表情のまま

まそんなことをのたまった。その視線の先に、血がにじみ出るほどこぶしが握りしめられた近右衛門の手があることにマリーは気づいた。

「おおかた、英雄の息子により良い成長をもたらすためといったところでしょうか？ そのためなら、こいつを含む三十二人の女子生徒がどうなるかと知ったこつちやないと……。相変わらずいい感じに壊れていますね。僕と気が合いそうだ」

「あつたらアカンやる!？」

殺気に萎縮してはいてもきっちりツツコミを入れるマリーに感嘆しつつ、近衛門はうなづいた。

「そうじゃ。この学園はMM連合から援助を受けることによって成り立っておる。ナギをMM連合に紹介したのもわしじゃしな。あいつ優勝した格闘大会自体、戦争で直前だった連合に強力な兵士を送るために強者を見つけるとというのが本来の目的じゃ」

「つまりこの学園はMM連合の完全な言いなりだと？」

「……ここに所属している魔法生徒や魔法先生のほとんどがMM連合出身のものやその息がかかった者たちじゃ。そうなるのもしかたあるまい」

「なるほど。了解しました。では神楽坂明日菜はこのまま放置させていただきます。そして、クラスメイトに対しての魔法ばれについての違約金は……」

「犬神君……実はそれが聞きたかっただけやる」

「当然だ。僕が金のこと以外で動くと思っていたのか？」

「思ってたへんけど、もうちょい取り繕えや!!」

メガネをきらりと光らせる犬神にマリーは容赦ないハリセンの一撃を加える。

「発生させるつもりはない。放置してくれて構わん。ただほかの生徒たちに知られるのはまずい」

「それは重々に承知しています。お任せ下さい。帰るぞ安川」

「ちょ、ちょいまってえや！ 犬神君!!」

そしてさっさと踵を返して帰ろうとした犬神の服の裾をつかみ、マリーは犬神を引き留めようとした。

ズルズルズル……。

犬神は特に気にした様子もなくマリーを引きずって扉の前まで歩いたが……。

「いや、とまれや!!」

「安川……僕はさっさと帰りたいのだ。具体的には撮りためている仁のドラマの再放送を見たいのだ」

「犬神君も好きなん!? そっちのほうじゃ意外やわ! って、そんなこと言っとる場合ちゃうやろ!?!」

そして、マリーは近右衛門のほうを振り向き大声を上げてたずねる。

「このままでええんか爺ちゃん！ 政治屋の言いなりになって、生徒犠牲にした挙句、孫まで危険な目にあわせて……ネギ君をこのままMM連合の言いなりにさせて……それでええんか！ 爺ちゃん……！」

「……いわげがないじゃろう……！」

今まで泰然とした表情を崩さなかった近右衛門は大声を上げて立ち上がった。克蘭レスはすつと重心をおとしマリーを守る位置に移動したが、犬神は何を考えているのかわからない表情のまま夕日を反射する眼鏡越しに近右衛門を見つめる。

「わしが好き好んで大切な生徒を巻き込むとおっしゃるのか！？ 平和に過ごしてほしいと思つた孫を犠牲にするとも思つたのか！？ 大切な友人の息子に……アヤツを同じ過ちを犯させたいと思つているわけがないじゃろう！！ しかし、わしの力はあまりに小さい……。立派な魔法使いともてはやされたこともあつたが……所詮わしはMM連合の手のひらからは逃げられん、小さな男なのじゃ」

眉毛に隠れた瞳の奥から涙を流し、老人とは思えないほどの覇気を流す近右衛門にマリーはにやりと笑いかけた。

「せやったら……うちに依頼せえへん？」

「？」

「おい安川。僕たちは託児所の職員じゃないんだぞ？」

「犬神君は黙ってて！！」

マリーの言に若干額に青筋が浮かぶ犬神。マリーは怖いのでそれを必死に見ないようにしている。

なかなか恰好がつかない二人であった。

「うちらは探偵やけど金さえもらえれば何でもやるで！！ さいわい、この中にはMM連合の息がかかった人なんておらへんし、犬神君くらいの実力があつたらMM連合も文句はいわへんやる？ どういう教育するかはあつちからのオーダーはきてへんのやる？ せやつたら私らがここでのネギ君の保護者になる！！」

「し、しかし……君たちを巻き込むわけにはいか……」

「クライアント」

そこで、犬神はようやく会話に介入してきた。メガネをきらりと輝かせながら、マリーを後ろに下がらせ、黒い笑みを浮かべる。

「僕たちは金さえもらえれば何でもやります。むろんそれ相応の報酬をもらいますが……いったん報酬をもらった以裏切るようなマネはしません。万難を排して依頼を完遂させてみせます」

だから金をよこせよ。言外にそう言っているのはこの二年で犬神の思考回路を熟知した、マリーにはわかったが近衛門にはわからなかったようだ。

まあ、わかるうとわからなかるうと……彼が出す結論は、マリーと近右衛門双方が望むところだった。

「犬神アンダーグラウンドサーチに依頼の追加じゃ」^{オーダー}

そして、近衛門は速筆で一枚の契約者を書き上げ犬神に渡した。

「クラスへの魔法ばれの極力阻止。ネギ・スプリングフィールドへの滞在先提供。および、ネギ君があらゆることに対して自分で考え、意見を言えるように、経験と知識を与えてやってくれ」

「御意。お任せくださいクライアント」

ネギの運命が大きく動いた瞬間だった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

3 - A 教室。そこにはすべてのクラスメイトや、高畑、しずな先生が集合しネギの歓迎会を開こうとしていた。

そんな時に、明日菜がバタバタと教室に駆け込んできた。

「どないしたん？ 明日菜」

「こ、木乃香！！ ネギは……あのガキンチョは来ている！？」

「来てるって……明日菜が買い出しのついでに呼びに行ったんやんか？」

「ああ……そうだったわね」

「だったらさっきのは夢？」

実は先ほどまで明日菜は下駄箱で倒れていしまっていたのだ。状況からみてどうやら靴を履きかえようとしたところで突然気絶したらしいのだが……。

明日菜は先ほどまで自分が見ていたあまりにリアルな夢を思い出す。

長い棒にまきついていた包帯のような布が飛び散り姿を現した杖。そして何か呪文のようなものとなえようとしてマリーに飛びつかれ阻止されていたネギ。そして自分に向かってくる長い前髪に片目が隠された小学生ぐらいの少女。

「あれは……夢？」

その時、教室のドアが開き、みんなが一斉にクラッカーを鳴らす。

「ようこそ！！ ネギ先生！！」

「ふお！？ な、何の騒ぎじゃ！！」

「あれ、おじいちゃん！！」

教室に入ってきたのはネギではなく、長い頭の自分の祖父だと分かり木乃香は慌てて駆け寄った。

「うわあ、そうやん。わかるうや自分……このクラスが歓迎会せえへん訳ないやん……」

「ふむ。これはすべてタダなのか？」

「割り勘にきまつとるやろ！！ っていうかなんでついてきトンねん！！ ここは女子中学やで！！」

「依頼のために決まっているだろう。このガキは目を離すと危ないということは今十分知ったところだ」

「あわわわわ！！ す、すいません」

そして後から入ってきたネギとマリーの隣を歩く見慣れない人々に、クラスメイトたちは警戒心をあらわにした。

「あなたたちだけですか？　ここは男子禁制の女子中ですよ？」

「ああ。いいのじゃよ雪広君。彼らは今日からネギ君の家主になる人たちじゃ。これからいろいろあるじゃろうから挨拶してもらおうと思つての」

みんなを代表してそう質問しに行く雪広に学園長は慌ててフォロイを入れた。

「ごめんなあやか。このひと私のバイト先の社長と社員やねん。今日だけは堪忍してくれへん？」

「まあ、マリーさんがそういうのなら……」

申し訳なさそうに手を合わせるマリーに雪広はしぶしぶとひきさがった。クラスのストッパーとして活躍するマリーには雪広も一目置いているのだ。

そして始まるパーティ。人の波はネギ先生に群がるチームと犬神に群がるチームに分かれる。

ネギのほうには昼間質問したりなかった姦しい一般生徒たちが。犬神のほうには普段めつたに裏にかかわってこない犬神の参戦をいぶかしんだ裏の関係者が集まる。むろんその中にはタカミチもいた。

そしてマリーのほうにも……

「ねえマリー。あんた私になんか隠していない？」

「ぶふあー!」

明日菜が突然そう尋ねてきて、マリーはあからさまな狼狽を示す。

「え、え？ な、何の話？」

「た、たとえば……あんたには笑われるかもしれないけど……ネギが超能力者とか!」

杖見たのに何でその思考に行きつくんや! とツツコミを入れてやりたかったがマリーは必死に我慢する。ここでそんなこといつてしまえばすべてが台無しになってしまう。

だが、

「知りたいか神楽坂明日菜？」

マリーの努力は……

「だったら明日の放課後。僕の会社に来るといい」

そういつて、明日菜に名刺を渡した犬神の手によって木端微塵に打ち砕かれた。

後日談というか、学園長と木乃香の会話。

「あれ、おじいちゃん。ネギ君私たちのところに泊まるんちゃうん？」

「ふむ。事情が変わってな。あつちのほうは部屋数もおいしスペースもあるということじゃから泊めてもらえることになったのじゃ」

「そうなんや。ちょっとざんねんやなあ。ネギ君おったらいろいろ楽しくなる予感がしたんやけど……。具体的には魔法使用的な事件に巻き込まれるような……」

自分の孫の勘の良さに、近衛門は戦慄を覚えたのだった……。

番外・ネギの初仕事

「で……ここは一体何の会社なんですか？」

「え……」

ネギがこの会社に来てしばらくたってのことだった。

ネギの質問にマリーは思わず氷結する。

「えーっと……」

マリーは正直に答えるかどうか、かなり迷った。

『自称少年探偵事務所。ただし、やっていることは不倫調査をする
ペット探偵で、金がある人のためしか働かへん外道会社やで？』

なんて、正直に答えることはできない……。

「え……えつとな、ネギ君……。うちの会社はな、裕福な層をターゲットにした困った人を助ける仕事なんよ」

ものは言いようである。

「それはすごい仕事ですね……！」

ああ、尊敬の念を込められたキラキラとした視線が痛い……！！

マリーがそんなことを思いながら、いつものように掃事務所の除を始めようとしたときだった。

「野菜。仕事だついでこい……どうした安川そんなに僕を睨むな」

「犬神君がちゃんとした少年探偵やったら私がこんな苦勞することなかったのに……」

ちよつとだけこの外道の探偵のもとで働いていることを後悔するマリーだった。

…†…†……………†…†…

「今回の依頼はとある人物の搜索だ」

「搜索？ だれかどこかへ行ってしまったんですか」

「ああ。依頼人が言うには自分探しの旅に行ってしまったらしい」

「じ、自分探しですか……」

犬神一行はそんな会話をしつつ、狭いく、薄暗い裏路地を一行になって行進していく。犬神いわく、近道だそうだ。

今回のメンバーは犬神とネギの二人。

本当はマリーもついてきたが、対象の名前を聞くと遠い目をして、『掃除してるわ』と行ってさっさと部屋の掃除に戻ってしまった。ネギは出かけるさいに『気をしっかり持つんやで』といわれた。

「この人は自分探しの旅の常習犯だな。今までで計七十二回もの自分探しの旅に出ている」

「七十二回！？ まだ見つからないんですか自分!？」

その回数に驚愕しながらネギは屋根の上を跳び移った。場所は民家の屋根の上。ここも近道だそうだ。

「奥さんはそうとうお怒りでな。全身の骨をたたき折ってでも連れ帰れとのことだ」

「え、えつと……。その人の名前はなんていうんですか？」

先ほどのセリフは聞かなかったことにして、ネギは話を無理やりに進めようとする。なかなか賢明な判断だった。

「ターゲットの名前は村雨アンドリュー」

「へえ……。ハーフの方なんですな」

「三十八歳妻子持ち……。奥方からの依頼だ」

「……………」

もう黙り込むことしかできないネギであった。

「ふむ……。なんだ。お前は何も言わないんだな」

「え……。？ な、何か言ったほうがよかったですでしょうか？」

はあく。

犬神はため息をつくつと、ネギのほうへふりむき両手を両肩に置く。

「いいか野菜。僕の探偵事務所の助手には必須のスキルがある。これからも必要になってくるだろうから、必ず体得するんだ！！いいいなー！！」

「は、はい!!」

いつになく真剣な犬神のセリフに、ネギは固まる。

「いいか？ 僕の探偵事務所の助手に必要な必須スキルは……」

ゴゴゴゴゴゴ!! と犬神から立ち上がる気迫にネギはごくりと
つばを飲み込んだ。

「ツツコミの瞬発力だ!!」

「……………」

その時のネギの顔は、将来的にジャック・ラカンのもとで修行するときに無理やりさせられた嫌な顔たちよりも、さらに嫌そうな顔であったという……。

…
十…
十…
十…
十…
十…

「ところで犬神さん……さっきからへんな道ばかり通っていますけど、もしかしてその人がいる場所に心当たりがあるんですか!？」

猫しか通らないような近道を必死になってついていきながら、ネギはそう聞いた。

「心当たりというか、いる場所なら知っている」

「え、本当ですか!？ でもどうやって……」

それを知ったのか？ ネギの質問が締めくくられる前に、犬神はきらりと眼鏡を光らせ、不敵にほほ笑んだ。

「フツ……愚問だな。僕の天才的な推理にできまっているだろう」

「しょ、少年探偵みたいです!!」

少年探偵です。

「過去……僕は七十二回村雨氏を捕まえたことがあるが、その七十二回中、七十二回……」

犬神がそんなことを言いながら到達した場所は、開けた高いビル
の屋上。そこには給水塔を持ち上げている箱状の壁があり、その壁
には無数の落書きと、じぶんとは〜じぶんとは〜と書かれている。
そしてその前には、黒いポロシャツを着た男が一人ブツブツ何かを
呟きながら立っていた。

「すべてここで発見したのだ!! そして今日も!!」

「だあああああ!!」

犬神の話を聞き終えたネギはそのまま見事なスライディングを
披露し、ずっこけた。

「お、今のはなかなか良かったぞ」

「そ、そういう問題では……あと、それは推理とは違うと思います」

鼻を抑えながら立ち上がってくるネギに、犬神は感心の声を上げ
た。

「大体なんでこのひと、捕まると分かっているところに来ているん

ですか？」

「野菜。三十八歳にもなって自分探しをしているような人間に論理的思考を期待するな」

「……………」

もう言葉もないネギである。

そんな時だ、

「ひどい言われようだな」

初めて男が発言した。そしてやたらと大物な雰囲気流しながら、ふりむいた男は不敵な笑みを浮かべながら犬神たちのほうを振り向いた。

「ま、根拠はないけど、ここに来たら答えが見えそうな気がするの
でね……。まあ、なんにしても久しぶりだね、犬神君」

そういいながら、村雨アンドリュー（38・妻子持ち）は、彼の自分探しの旅の妨害に来た外敵たちと相對するのだった。

…
十
十
……
十
十
…

「な、根拠なし」

「はい……そうですね」

そんな雰囲気は一切気にせず、犬神とネギは話を進めた。

「……まあいい。聞いてくれるかい犬神君」

「断る！」

「即答!？」

微妙に適応しつつあるネギが思わずツッコミを入れるのを満足気に見てから、犬神はアンドリユーに向かって歩いていく。

「要件は一つで、選択肢は二つだ。このままおとなしく帰るか、それとも僕に無理やり帰らされるかだ。十秒やる。好きなほうを選べ」

最後に、凶悪な鋭い瞳で眼を飛ばしながら、犬神は回答を迫る。しかし、アンドリユーはそんなことには一切ひるまず、はあくとしため息をつきながら、首を振った。

「自分を探しに来ること七十二回。何度か答えらしきものは見えたが、それをつかむ前に七十二回連続で君に連れ戻された……。それに少しでも抵抗できるように体を鍛えてみたりもしたが……」

そこで、なぜか空中に映像が投影されるのを見て、ネギはスワツと驚く!

「惨敗」

犬神君に殴り飛ばされて鼻血を噴出させながら吹き飛ばすアンドリユーさん。

「惨敗!」

犬神君のアップパーカットを食らい、鼻血を炎のように噴出させながらスペースシャトルのように飛んでいくアンドリユーさん。

「また惨敗!!!」

もはや犬神君に何をされたのかもわからず、弾丸のように錐もみ

状に回転しながら吹き飛びアンドリユーさん。

「ちよつとはこりましようよ……」

最後には両手両足が決して曲がらない方向に曲がってしまったアンドリユーさん（死に体）を引きずり夕日に消える犬神君を見て、ネギは顔に縦線を入れながらそう言った。

「頼む犬神君！ あと一日でいいんだ！！ 僕に時間をくれないか！！」

「え、そんな短い時間でいいなら……へぶ！！」

「残念ながら、あなたの奥様からはソツコーで連れ戻せと言われてます」

何か余計なことを言いかけた野菜にスペシャルチップを喰らわせながら、犬神はずんずんとアンドリユーに向かって進んでいった。しかし、

「ただとは言わない……」

アンドリユーのその言葉に、犬神の歩みが止まった。

「君たちが妻からどれほどの金額をもらっているのかは知らないが……僕を見逃してくれたら、その三倍を出そう！！」

「！！！！」

ネギはその言葉を聞き、もう決まったなと思った。自分を預かつ

てくれて、面倒を見てくれていた犬神のことは尊敬しているが、彼の唯一（笑）の弱点が金である。

こんなおいしい話犬神さんが蹴るはず……

「断る！」

けるはず……………けた！？

「い、犬神さんどうしたんですか！？ 普段ならこんなおいしい話ほらっておかないのに！？」

「ふー安川にもいったがな野菜……………」

犬神はそんなことを言いながら、きらりと眼鏡を光らせ、まじめな声でこう言った。

「いったん金をもらって、金で転ぶような美学の欠けるようなことをしては、次の仕事につながっていかんからな……………どんな仕事でも信用を無くしたら終わりだぞ？ 覚えておけよ野菜」

犬神のその言葉に、ネギは再び瞳をキラキラと輝かせる。

か、かつこいいい！！

「や、やっぱり犬神さんは最高の少年……………」

「と、いつとくと表向ききれいに聞こえるな」

ネギが贅辞の言葉を送ろうとした直後、犬神が言ったセリフにネギは固まってしまった。

「え？ 表むき……」

「そうだ。僕の調査では村雨家の財布のひもは完全に奥方が握っていてな。彼がどうこうでできる金なんてものはスズメの涙だ」

「え、じゃあ三倍っていうのは？」

「その場しのぎの嘘だな……」

「ひ、ひどいです！！ アンドリューさん！！」

ネギの涙ながらの抗議の声に、さすがに罪悪感が芽生えたのかアンドリューはすつと視線を落とす。

「まあ、実際金を持っていたとしてももらな……」

「そ、そうなんですか？」

犬神の言葉を少し意外に思いつつネギは首をかしげる。

「当たり前だろ？ もし彼の言うとおり自分探しが終わってみろ、収入はそこで打ち止めだぞ」

「いや……まあ、そうですねけど」

「だったら、どう考えてもこれから先、十回でも二十回でも家出してもらったほうがお得ではないか！！ クククククククククククククククククククククク……フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

ネギがそう答えながら杖を展開するのをしり目に、犬神は気での強化なんてされていけない普通の右手で……

「ふん!!」

ネギが開けられないと言いつつ扉を無理やり引きはがした!!

「ええええええええええええええええええええええ!!」

無理やりあけられたためか、空中で分解バラバラになる扉に愕然としながら、ネギはそう叫んだ。

……

「またほとぼりが冷めたらやってくるか……」

まったく懲りていないセリフを吐きながら、アンドリューは出口から姿を現した。そんな彼の前に、すっと降り立つネギ・スプリングフィールド。

「と、止まってください！！ 家出なんていけませんよ！！」

認識障害を切って、姿を現したネギにアンドリューは少し驚きながら、しかし、それ以上の驚愕は感じないまま、言葉を紡ぐ。

「くっ！！ どうやって先回りしたのかは知らないが、そこをどいてくれないか！？ 僕は子供には手を上げたくないんだ！！」

意外と普通のことを言ってくるアンドリューに拍子抜けしながら、ネギは納得した。

今まで犬神さんの依頼関連でいろいろ巻き込まれてしまったネギだが、彼は別に今までの敵のようにアウトローの人間ではないのだ。

少しだけ短絡的思考をしてしまった自分に反省しながら、ネギはとりあえず、何が彼をそこまで駆り立てるのか聞いてみるとした。

ネギ自身、いろいろと繊細な生徒たちを受け持つ中学生教師である。アンドリユーのケースは特別ではあったが、自分探しの旅については、正直他人ごとではない。

「あの……アンドリユーさん。どうして自分探しの旅なんてしようと思ったんですか？」

「！……き、聞いてくれるのかい！？」

「え、ええ。まあ。他人ごとではないので……」

少し異常なほど喜ぶアンドリユーにのけぞりながらネギは頷く。

「そ、そうかい！！ それはよかった！！」

そして、アンドリユーはさめざめと泣きながら、

「犬神君はただの一度も聞いてくれなかったからね……。マリーという女の子は聞いてくれたんだけど……途中で犬神君に邪魔されちゃって」

それ……。若干乾いた笑み浮かべながらネギは首を振った。マリーが苦勞する理由がなんとなくわかるといったところだ。

「では……こほん。僕はある日思ってしまったんだ……なぜ僕はここに存在するのかってね」

最終的に見事なボケと突っ込みの応酬を繰り広げてしまうネギなのであった。

後日談というか、事務所での会話。

帰ってきた犬神とネギが、いろいろ曲がってしまった不思議生物を連れ帰ってくるのを見て、マリーは特に何を言うこともなく手を振った。

「お帰りー犬神君。奥さんが医療スタッフといっしょに待ったはるから、そこで報酬もらってや」

「わかった。野菜はこっちにおいていくぞ。余計なことをいわれてはかなわんからな」

犬神はそういって、さっさと事務所の中に入ってしまふ。

「姫ちゃん……」

「何、ネギ？」

そして疲れきた表情で、ネギはマリーの手伝いで事務所の前の掃除をしていたヒメに話しかけて一言こういった。

「僕……犬神さんみたいには絶対にならない」

「それはとてもいいことだと思う」

麻帆良は今日も平和だっ……た？

明日菜来訪

神楽坂明日菜は迷っていた。

現在彼女がいる場所は、白い箱のような印象を受ける『犬神アンダーグラウンドサーチ』。一癖どころか、癖しかない少年探偵が経営する探偵事務所の前である。

そんなところに彼女が来たのは昨日言われた犬神の言葉が気になっ
てしまったからなのだが……

「うーん。なんかここに来るまでに聞いた噂聞いてると入りたくな
くなってくるのよね……」

犬神アンダーグラウンドサーチは意外と入り組んだところに立っ
ており、ご近所の人には有名だが初めての人が訪れるのは多少難易
度が高いだろうという何とも複雑な立地だった。

そんなわけで明日菜は道に迷うたびに近所の人たちに道を聞いて
いたのだが、彼らが道を教えるついでに言ってきたセリフたちがこ
れである。

「え、あそこに行くのかい？ 御嬢さん……悪いことは言わないか
らまずは警察に頼りなさい。彼らに頼るのはそのあとでも遅くはな
いだろう？」

「まあ……アンダーグラウンドサーチにねえ……。助手のマリーち
ゃんはいい子なんだけど、社長さんがねえ。あんたも若いのに大変
だねえ……」

『うは！ マジで！？ マジであんなところに行く勇氣ある女の子がいたんだ！！ ちょ、写メとっていい？』

もう、がりがりやる気が削られていく言葉たちに明日菜は深いため息をついた。

「…………ええい！！ なに迷ってんのよ神楽坂明日菜！！ 昨日起こったこと、きちんと説明してもらわないといけないんだから！！ こんなところでビビるな！！」

パンパンッ！ とほほをたたきながら、明日菜は犬神アンダーグラウンドサーチの門をたたき中へと入っていった。

「んで…………二、三年ほど前に残ったオトンにここに売り飛ばされまして…………」

そんなマリーの声が聞こえてきたのですぐに帰りたくなったのだが…………。

…す…す…す…す…す…す…

「あ、明日菜！… なんや意外と速いこときたなあ」

そんな重苦しい会話によって生成された、黒い空気を払拭するかのようになりはにこやかな笑みを浮かべながら明日菜に歩み寄った。

「いや…私ちよつと外で待ってるから、お話終わったら呼んでくれない？」

「いや、来て早々にゆーとんの……。お茶でも出すさかいちよつと待つといて」

「必要ないな……。客でもない人間のために無駄な茶葉を使うな」

明らかに及び腰になっている明日菜を無理やり座らせ台所に行こうとしたマリーを、犬神の言葉が制止させた。

「犬神君……もうちょい言い方があるやろ。あと明日菜を呼んだん犬神君やん」

「とはいえ金を落とさない奴のために金を使えば明らかにマイナスだろうが」

「君はホンマ人としてくさっとなあ……」

若干顔に縦線を入れるマリーは無言でお茶を注いできた。犬神自身この程度の出費をいちいち気にする男ではない。先ほどのセリフは気分によっていわれるか言われなにかぐらいのどうでもいいことなのだ。

「だが、安川。僕たちはまだクライアントをもてなしているところだ。あまり私生活を見せて遠慮をされては困るからな。通すならお前の部屋に通せ」

「ああ……それはごめん」

普通に正論を言われてしまい頭を下げるマリー。そこで明日菜はようやく自分と向かい合っているように設置されたソファアームに座っている女性に気が付いた。

「あ、すいません。お客さんがいたんですね」

「いえ、いいわよ。気にしないで。依頼が終わって報酬の清算のために来ているだけだから」

若干気の強そうな、髪を金色に染めた大学生ぐらいの女性は、胸元に抱えた犬を見せながら若干ひきつった笑みを見せている。どうやら先ほどのマリーの話は彼女に聞かせるために話されていたようだ。

「そうなんですか……依頼って、そういえばマリー、今日休んでいたわね」

「いろいろあってん……。ああ、そうや犬神君」

「ん？ なんだ安川」

「マリーに呼ばれた犬神は近づいてきたが……」

「ふん……！」

マリーが手品のように出現させハリセンノ持ち手の部分（ガムテープ・ビニールテープで補強されているため、紙製のハリセンとはいえ当たると結構痛い）で殴りつけられた。

「フッ」

安川はそういうと華麗にハリセンを回しながら納刀。一仕事を終えた侍の顔で決めポーズをとる。

「おい安川。ハリセンの柄のほうで顔面をつくという行為は、ツッコミというよりも、もはや限りなくただ暴力に近い」

「ほーん……。せやったらよけたらええやんか。大体そんないうやったら、さっきの依頼で可愛い助手を高さ200メートル近いビルからけり落とすという行為はいつたいなんやっちゅーねん」

そんなことされたの!? 驚愕する明日菜を完璧に無視して、犬神はきらりと眼鏡を光らせる。

「獅子は……子を鍛えるためにあえて千尋の谷に……」

ゴスツ（マリーがハリセンの柄で犬神を殴りつける音）

「そう……あえて言うならば愛ゆえに……」

ゴスツ、ゴスツ！（マリーがハリセンの柄で犬神の顔を二連打する音）

「痛いな冗談だ。あとそれはさっきからいつているように暴力」

ゴスツゴスツゴスツ！！！！（もう無言で、マリーがハリセンの柄で犬神を殴り続ける音）

「……あ、痛っ」

「はあ？」

もういくつも青筋を浮かべながらマリーはひたすら犬神を殴り続けた。しかし犬神は一向に懲りた様子もなく反論を続ける。

「結果的に下で待っていたクランレスにお前を届けるためにはあの

選択肢しかなかったのだ。割り切れ」

「ああ……それで私生きとったんや。って、ほかにもチヨイスあつたやる!? 両手もあいとつたし、なんも持ってへんかったやん! ！ なんでファーストチヨイスが足!?!」

マリーの猛烈なツッコミに、犬神は遠くを見つめるような瞳をした一言。

「すべては……お前のためだ」

「こつち見ていえや……」

あからさまにマリーのほうを見ようとしない犬神ののど元にハリセンを突きつけるマリー。そのハリセンには若干気がとおされている。

「そもそも結果的にって何やねん!」

「冗談?」

「なんで疑問形!?!」

そんな風にいつもの漫才を繰り広げるマリーや犬神たちにあきれるやら、驚くやら……もういろいろと達観してしまった明日菜や依頼者の女性に、克蘭レスが、マリーが入れかけていた紅茶を出した。

「めつちや怖かったんやで、も」

「心外だな。僕の冗談が笑いよりもまず恐怖を呼ぶとでも?」

「おもつくそよんどるやろつが!! あくもうつうつうつうつ!!」

最終的にブチギレたマリーがハリセンの一撃で犬神のメガネを吹き飛ばすことで終幕する。それを見て依頼者の女性は苦笑を浮かべながらマリーに話しかける。

「まあ、お互いダメな親もって苦勞するわねえ。私の父親もこの子助けるために車にはねられて死んじゃったし」

犬を抱えながらそういう依頼者に、明日菜はさらに驚く。明るそうに見えてそんな過去抱えていたの!? といった感じだ。

「はっはは!! 少しでもありませんよ」

「なんで君が答えてんの!? しかも笑いなから!!」

しかし、依頼者の言葉に答えたのは犬神だった。あからさまな愛想を笑いを浮かべながらそう答える犬神にマリーは怒鳴り声を上げる。

「何を言っている安川。お前はここに来てからまともな生活を送れているし、借金取りに追われることもなくなっただじやないか。さらに健康的な生活を送っているため肌艶もよくなっただし報酬も入る。収支的に見れば明らかかなプラスだろう」

「う……まあ、それはそうやけど……」

そこで犬神はきらりと眼鏡を輝かせて決め台詞をはなつ。

「お前が失ったものなんて……せいぜい、親子の絆ぐらいのものだ

ろっ！！」

「デカツ！！ 結構でかないそれ！？」

いまさらながら愕然とするマリーと、もうちょっと言い方つても
のがあるだろうと依頼者と明日菜が愕然とする。

「そうか？」

本気で不思議そうな顔をする犬神に絶句することによって、この
話題は終息した。

「それじゃ私は帰るわね。マリーちゃん。私麻帆良でスクールカウ
ンセラーやってるから何かあったら相談にきなさい。お茶を出して
お話聞いてあげるから」

「うっ。ほんまおおきにな」

「ご利用ありがとうございます」

そして、依頼者が腰を上げ帰ろうと出口に行くのを見送ってから、
犬神は鋭い瞳を明日菜に向けた。

「さて……あの野菜の話だったな」

「ええ。私はそれを聞きにきたの」

そして、ようやく流れ始めた真剣な空気マリーがつばを飲み込ん
だ時。

「ゲル様」

「あ、クランレスさん。今日はどうもありがとうございます」

「いえ、クライアント様。その言葉をおっしゃるのはいささか早すぎるかもしれませんぞ」

「？」

いつの間にか外の掃除をしていたクランレスと依頼者が玄関で鉢合わせし、そんな会話を交わしたかと思うと、

「！！」

依頼者は驚いた顔をしてマリーたちの近くに戻ってきた。

「どないしたんですか？」

マリーがそんな疑問の声を上げたとき、

「よう。今朝方はどうも」

「あゝ！！ あんた今朝のデンジヤラスヤクザ！！」

犬神が今の依頼者の依頼を達成するために敵対してしまい銃撃戦になったヤクザの一人が、姿を現したのだった！！

…
十…
十…
……………
十…
十…
…

「で、デンジャラスヤクザって……… いったいあの何者なの!？」

マリーの言葉を聞き、真っ先にケンカの体制に入りかけた明日菜を克蘭レスが押しとどめてソファアの下にかくす。依頼者も同じようにした。

そんな状態なので何もできない明日菜は、とりあえず近くにいるハリセンを構えたマリーにそう訪ねてみた。

「いや……なんやわからへんねんけど、その依頼者さんが犬の散歩しとつたらな、突然ヤクザの人たちに囲まれて、札束渡されて、犬拉致られたから取り返してほしい奇怪な依頼受け取ったんやけど……」

「あははは、奇怪でごめんね。私もちょっと意味わかんなかったから警察に頼れなかったのよ……」

隣で伏せている依頼者も若干顔をひきつらせている。

「ほんでその時犬を取り返すために敵対したんがあの人なんやけど……銃をガンガン撃ってくるから明日菜はそこにおってや」

「銃!？」

「銃だけにガンガン」

「犬神君下らんこと言うてる場合ちゃうやろ!? つーか克蘭レスさんも何フツーに通しとんの!？」

「失礼マリー様。ゲル様が仕事は終わったとおっしゃってましたので。テへ?」

「テへ!？」

老紳士の口から洩れる信じられない一言にマリーたちは思わず固

まった。

「そんじゃまあ……御嬢さん。その犬、返してもらおうか？」

「ふ、ふざけないで！！ 大体この子はもともとうちの子で……」

依頼者がそういつて、男に向かって反論の声を上げようとした時だった！

「わるいごはいね〜がああああああああ！！」

やたらと野太い、なまはげのような怒声とともに、部屋にあった通りに面しているはずの壁が粉碎！！ もうもうとした土煙を上げながら一人にの人物が殴り込みをかけてきた！！

「な、なんや！？」

「なまはげ？」

犬神とマリーがそういつて戦闘態勢を取り、その人物を見つめる。

ぴつちりと体に密着している深いスリットの入ったドレス。そこから覗く網タイツにガーター。靴はおしゃれなハイヒール。

「さあて、私の可愛いわんちゃんをそろそろ返してもらおうかしら？」

そんなことを言いながら土煙から出てきたのはピンクのルージューを口に塗った……。

筋骨隆々とした男だった。

『『変態きたあああああああああああああああ
！！』』』』

マリー・明日菜・依頼者の三人がそう思ったのは言うまでもない
だろう……。

BATTLEゲル!!

突如事務所の壁を突き破って殴りこんできたごついオカマに愕然とし、固まるマリィたち（犬神を除く）。そのオカマの後ろから入ってきたチンピラが、あわてて怒鳴ってきたのは、それからしばらく経ってからだった。

「て、てめえら今、『変態きたあああああ！』とか思ったろ！？ なめんじゃねえぞ！！ アニキ……いや組長は変態じゃなくてガチンコでオカマあああああああああああああ！！」

そして、オカマの言葉を聞いた途端、オカマ組長がふった豪腕によって吹き飛ぶチンピラ！！ そして、チンピラは壁に激突し意識を失った。

「ば、バカ野郎！！ 何年姐さんの下でやってんだ！！ アニキはNGワードだろうが！！」

「え、NGそこなん！！ オカマやないの！？ ってか、組長！？」

突如として明かされるオカマの身分にマリィは愕然とした。

「こ、こんなんが組長とか、この人たちの組大丈夫なんかいな！！
（いろんな意味で）」

マリィがそんな風にあきれている時だった。

「え、えっとマリィ。そろそろ外に出ていい？」

「ああ、うん。かまへんよ」

いい加減、床の寝心地が悪くなってきたのか？ そういつてきた明日菜にマリーはため息交じりに答えて明日菜をたたせる。

「ねえ、あんたいつつもこんな人たち相手にしてんの？」

そして、若干半眼になりながら尋ねてくる明日菜に、マリーは涙を流しながら頷いた。

「今回は特殊ケースやけど、ヤクザやったら週一のペースで来て犬神君に返り討ちにされてんで」

「それはさすがに多すぎない!？」

そんな無駄話を一切無視して、明日菜と同じように立ち上がった依頼者は組長(?)に食って掛かった。

「あ、あんたが親玉!? そいつらにこの子を拉致るように命令した張本人!？」

「ええ。そうよ……。おや……。いうならば母みたいな存在なんだけどね？」

「母!？」

気持ち悪さに鳥肌を立てた明日菜がツッコミを入れるが華麗にスルーし、組長(決)話を続ける。

「それにしても拉致とは失敬ね、ちゃんとお金は払ったじゃない」

「無理やりじゃないの！！ 大体なんでヤクザの親分さんがこんな犬ほしがるのよ！！！」

依頼者の言葉に、組長（怪）は少しだけうつむき暗い顔をする。

「……………だからよ」

「え？」

「そんな可愛いわんちゃんをこんな犬呼ばわりなんて、そんな……そんな人にその子を預けておくなんてできるわけないじゃない！！！」

「……は？」

号泣しながらそう言い切る組長（泣）にマリーたちは思わず氷結した。

え、マジでそんな理由なの？ みたいな白けた空気が事務所の中を漂う。

「ふん……………あきらめな」

そして、その空気を払拭しようとしているのか（できないだろうが）先ほど克蘭レスに連れられて入ってきた男がかっこをつけない組長（照）の前に立ち、

「姐さんはなあ……………可愛いものが大好きなんだよ！！ そう、三千世界あまねくすべての可愛いものが私のものっていうぐらいにな！！！」

くわつと気迫を込めながら、かつこ悪いことをいう男に、もうマリイたちは顔に縦線を入れっぱなしだった。

「ほら……こんなこと言うの恥ずかしいんだけど……『あたしのものはあたしのも、あなたのもあなたのも』みたいな！ テ
へ」

『『剛田さんちの息子さん並み！？』』

マリイたちの脳裏そんな言葉が浮かぶのも仕方ないと思えるほどの横暴っぷりだった。おまけに照れながら言っている……。

「えつと……そんな理由でこの犬追いかけてったん？ 取引の物を飲み込んでしもつたり……」

「何か重要な秘密を握っていたりは……」

マリイと明日菜が最後の希望とばかりに尋ねた質問に男はしつかりと首を振り、

「ねえ！……」

もうすがすがしいほどきっぱりと言いつてくれた。

「通りで一目ぼれしちゃってえ！！ てへ？」

ものつすごい悪寒とムカつきを覚える組長（変）にマリイはプルプルと震えながら一言……。。

「そ、それが大金はたいたり、銃ぶつ放したり、人んちの壁ぶち破
つて登場したりするほどの理由かあほおおおおおおおおおお
おおお！！」

「やあね。あたり前田のクラッカーじゃない」

「姐さん。その返しはとても古いです。多分この小説を読んでいる
人は誰もわからないと思います」

マリーの魂のツッコミに返される時代錯誤な言葉に、明日菜はも
う言葉もなく呆然と自体に流されることしかできなかった……。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

そんなやりとりはともかくとして、ピンチである。

そりゃあもうこの上ないくらいのピンチだ。

何せ民家の壁を拳でぶち破って入ってくる怪物（真）が今回の敵なのだ。

犬神が負けるビジョンは全く浮かばないが、それでも万が一ということがある。何より今回狙われているのは依頼者だ。犬神を抜かれて彼女に接近されただけでも依頼は失敗ということになる。

「それじゃ姐さん。さっさと犬取り返して帰りますよ」

「わかってるわよ。私だってさっさとあのわんちゃん取り返して愛でてあげたいもの。というわけで、カワイ娘ちゃんたちとクールな坊や。そこをどいてくれないかしら。子供を殴るのは趣味じゃないの」

オカマの中に秘めたヤクザの風格を漂わせながら、組長は傲然と言いつつ。その言葉に嘘はないのか今のところ明確な敵対行動は

とっていないマリィたちに向かってこぶしは握られていない。

とはいっても、マリィも一応プロの探偵助手だ。一度受けた依頼を怖いからといって反故にすることはできない。

「犬神君。私があいつらの気いひいとくからノーラ（依頼者の名前）さんを安全な場所に……」

そしてマリィが段取りをつけようと犬神のほうを振り向いた時、

『ズズズズズッズッ』

犬神はそんな音を立てながら明日菜が飲んでいた紅茶をすすって、ソファアでリラックスをしていた。

「って、何しとんのか犬神君！！ あと人の飲みさしのまんとして！！」

「ん？ 何を言っているのだ安川。ノーラさんの依頼は犬を取り返し此処に連れてきたことで満了している。なぜ僕がそんなことをしなければならんのだ」

「！！！」

そうだ、犬神はこういうやつだったとちょっとだけ泣きながら思ひ出すマリィ。もう神楽坂も半眼を超えてどこか遠いところを見つめてしまっている。

「で、でも怒ってへんの犬神君！！ 家の壁ぶち壊されたんやで！！」

そこで方向性を変えてみるマリーだったが、

「あ、そこは気にしないでいいわよボウヤ。さすがに壁の修理代く
らいならだすわあ。今回はちょっと大人げなかったかなあと反省し
ているんだから」

組長からの言質はとれた犬神は、フムと頷きながらマリーにひと
こと。

「そついうことだ」

「って、おおおおおおい!!」

もう縦線入れっぱなしのマリーのツッコ!!!。

そんな様子を見て、今まで無言だった明日菜はツカツカと犬神に
歩み寄り、

「あんた何言ってるのよ!!」

手を思いつきり振り上げた!!

「ん?」

犬神はその態度を心底不思議に思いながら、明日菜の平手打ちを
片手でとめ即座に関節を決め地面に転ばせる。

「きゃ!!!!」

そして無理やりうつぶせに寝かされた明日菜の背中にドシンと座りながら、噛みつかれないように頭を足で踏みつけながら抑える。

「何のつもりだ神楽坂明日菜」

「ちよ、犬神君やりすぎやで!!」

クラスメイトに訪れた突然の暴力に、さすがのマリーもあわてて犬神をどけにかかる。

「さっきまで依頼を受けていた人が困ってんのよ!! なんて何にもしてあげないのよ!! それでもあんた探偵なの!!」

マリーに助け起こされた途端ギャンギャン噛みついてくる明日菜に、若干不機嫌になりながら犬神は眼鏡を輝かせる。

「確かに僕は探偵ではあるが、それ以上にプロフェッショナルだ。金もないのにただ働きができるか」

「な!!」

「神楽坂明日菜。この業界の素晴らしい格言を教えてやろう」

そして、若干の殺気をはらんだ瞳で明日菜を睨みつけ犬神はこういった。

「正義感で腹は膨れないのだ」

「つく!!」

生まれて初めてさらされる殺気に明日は話冷や汗をかきながら数歩下がってしまう。それほど犬神の殺気は強烈だったのだ。しかし、それでも明日菜はひかなかった。正義感は一倍な明日菜がこのまま引くわけがなかった。

そして、明日菜が再び口をひらこうとしたとき！

「せやったらこれで文句ないやろ犬神君！！」

今まで何かをこそそそとしていたマリーが、一枚の紙を持ってきて犬神につきつけた！

「ん？」

犬神がその紙面に目を通すと、そこには犬神アンダーグラウンドサーチの依頼承認書と、ノーラのサインがかかれています……。

「ふん。仕方ない」

犬神は特に何の感慨もなくそれを受け取ると、傍らに控えていた克蘭レスにそれを保管するように言い渡し、ノーラを守る立ち位置までやってくる。

「というわけだ。貴様らはさっさと帰って、犬にも彼女にも近づくな。OK？」

犬神はそういいながら体中に気を巡らし始める。戦闘開始の合図だ。

「あのなあ……明日菜。犬神君は確かに外道で、金の亡者やけど……」

…ホンマにプロフェッショナルやねん。犬神君動かしたいんやったら説得やのうて、契約書を書かせるんが一番なんやで」

マリーの言葉に、明日菜は納得していないという表情で見つめながら、一言。

「私……あいつ好きになれそうもないわ」

「あはははは。く、癖がある人やからなあ。まあしゃーないわ」

明日菜のセリフに若干の苦笑いを浮かべながら、マリーはノーラと明日菜を引っ張り事務所の奥へと連れて行く。

「でも、犬神君が依頼を受けた以上、失敗はあらへんよ」

マリーの信頼あふれるセリフに明日菜は若干驚きながら犬神を見つめた。

そんなにすごい奴には見えないけど……。

しかし、その数秒後。明日菜は麻帆良内体術最強の男の実力を目の当たりにするのだった。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

「ふ。かわいい子に手を上げるのは本意じゃないけど、何事にも優先順位ってものはあるからねえ」

組長はそついいながら腕に力を込める。するとその腕は見る見る

うちに盛り上がり、リンゴどころかスイカでも握りつぶせそうなほどの極太の筋肉を顕現させた。

「あやまんなら今のうちだぞ」

それを見た組長と一緒に事務所に入ってきたチンピラの一人が冷や汗をかきながら不敵に笑う。

「て、めえも結構な運動神経をしているみたいだが……うちの姐さんはマジモンの化け物だ！」

瞬間。振り抜かれた組長の腕がそのチンピラの頭をとらえ吹き飛ばした！！

そして、壁に刺さって沈黙してしまうチンピラに最初に入ってきた男は半眼になりながら、

「バカヤロー。化物もNGワードだろうが……」

とつぶやき、

「さ、ささあああああああ！！」

明日菜とノーラは愕然とした表情で固まった。明らかに人間の出せる筋力ではなかった。

そして、目を爛々と輝かせ、某八門遁甲の陣を七門まで開けた先生みたいに顔中に血管を浮かせた組長が怒声を上げた。

「誰が化物じゃあああああああ!!」

「アナタDEATH!!」

「あなた^{デス}DEATHとも!!壁に人刺さっているもの!!」

もう何でもアリな光景に慣れてしまったマリーはともかく、明日菜とノーラさん思わずそうツッコんだ。

そして犬神は、

「お前のことに決まっているだろうが」

「おおん!?!」

「うわぁ……度胸あるなお前」

怒り狂った組長がふりむき、最初に入ってきた男がそうつぶやく。そこにはポケットに両手を入れダラツと応接用の机の上に立っていた犬神が、平然とした表情で毒を吐いていた。

「いい加減自覚しろ。この珍獣が」

ブチチチチチ!!

もういろいろとキレまくる音が組長から響き渡るの聞き、男は即座に組長から離れた。

「だれが……希少動物だゴラアアアアアアア!!」

そんな怒声とともに、犬神が立っていた机が殴り碎かれる！！
犬神は跳ね上がる机の反動を利用し大きく跳躍、次は執務用の机の上に着地した。

「いいや。人類の亜種かもしれないな」

「かわいかったら何言っても許されると思ってんじゃないわよ！！
キィ
！！」

怒り狂う組長をソファアの影から見ていたマリーは、さつと顔を引っ込め自分と同じようにソファアに隠れていたノーラと明日菜に話しかける。

「とりあえず、ここは犬神君に任せて、さつさと逃げ……」

しかし、マリーの言葉はかちゃっという金属音とともにさえぎられた。

「ぶうぶうぶうぶうぶうぶうぶうぶうぶ！！ ホールドアップだこの野郎」

今まで特に目立たなかった、初めに入ってきた男が拳銃をマリーの頭に突き付けていた。

「おう、シットやで」

「マリー……」

「ちよっつと、やめなさいよ……」

明日菜やノーラさんはひどく慌てた様子で男にかみつぐが、マリー自身はひどく落ち着いた様子だった。

「銃なんて無粋なもん持ち出すんとちゃうよ。あの組長さんかて拳で戦つとるやんか」

「あいにくこちら無粋な男でな。さつさと犬わたせ。いい加減こんな茶番うんざりなんだよ」

さすがに情けないとは自覚しているのか、男はちよつとだけ口をとがらせてマリーの揶揄にそう返し銃の安全装置を外す。

しかし、マリーとてだてにこんな外道な探偵会社にいたわけではない。この程度の事態なら日常茶飯事だ。マリーはひどく落ち着いた様子で男に隙を作ろうと口を高速回転させる。

「それにしても情けないやんか。お兄ちゃんかてこんなことしとうてヤクザになったわけちゃうんやろ。アンナ女か男かもわからへん様な唇で命令されて、犬一匹をあほみたいな理由で追っかけて右往左往……。あげく、こんかわいらしい女の子の頭に銃突きつけて脅迫って……。これが極道のやることかいな？」

マリーのセリフに、男はちよつとたじろぐ。組長の言葉の端々からも読み取れるが、彼が所属する組は今時では珍しい任侠ヤクザだった。本来ならこんなことは固く禁じられている。

しかし、

「し、仕方ねえだろうがよお!! お、おれだって本当はもつとVシネみてえなヤクザが……。だ、大体昔はああじゃなかつたんだよ、

うちの組長は！！」

そういつて男が取り出した写真。そこには明日菜好みの渋くダン
ディなおっさんが写っていて……

「昔はこんななんだよ！ たんだよ！！ ザ・若頭ってかんじで、俺らの
憧れだったんだよ！！」

「「「うそん！？」「」」

せつかくできたスキを逃してもマリーを含む三人は思わずツツ
コミを入れてしまった。

「それが……何があったのかわかんねえけど、先代が亡くなって跡
目継いだとたんあんな感じに……」

そこまで言つて、男は目元を抑えてサメザメと泣き始めた。

「や、ヤクザだって色々とあるんだよおおおおおおおおおお
おおおお！！」

「泣いた！？」

「どこからツツコんだものかしら……」

明日菜とノーラがそんな風に愕然としている中、

「アデアツッ出でよー！！」

マリーは即座にカードからハリセンを顕現。紙でできているそれ

で……男がもっていた銃をたたき折った！！

「って、はあああああああああ！？」

さすがにそんな事態になつては泣いている余裕はなくなつたのか、男は慌ててもう一丁隠している銃を取り出そうと懐に手を突っ込むが、

「遅いで……！」

マリーが振りぬいた気を通したハリセンで一撃され、きれいに吹き飛んだ！！ そのさい、紙のハリセンからは到底聞こえないような硬質な音が響き渡るのを明日菜は聞いた。

《豪気功》

アメリカ軍所属の傭兵だつたマリーの父親が戦場で戦闘をしているさいに編み出した特殊な気の運用法である。この気は流し込んだ物質や、使用者の体の硬度を自由自在に変える気功であり、紙のハリセンに流し込んで、岩をも砕く硬度に変化させることが可能なのである。

マリーが父親に売られる際に唯一教えてもらった武技で、この会社の依頼で死なないように必死で鍛え上げたものである。

「だてに武闘派探偵の助手やつとるわけちゃうんやで！！ 犬神アンドン・グラウンドサーチの助手をなめんな！！」

マリーはそういって、何とかうまくいったため息をつくのだった。

⋮
†
⋮
†
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
†
⋮
†
⋮

マリーの不満を泰然とした表情で受け流す克蘭レスをみて、マリーはため息をついた。そして、

「なあ、克蘭レスさん。さっきからおもったんやけど、なんで犬神君はさっきから反撃しいひんの？」

とりあえず目下のところ一番の疑問となっていることを聞いてみた。

あれだけ信頼しているという風なセリフをマリーが言ったのに、犬神は一向に組長を攻撃しようとしていなかったのだ。常にどこかの家具に乗って組長の攻撃が来たらよけるばかりで……。周囲には粉碎された家具が無数に散乱している。

「そういうえば先日、事務所の家具を新調しようかなとおっしゃられていましたね」

「え……それってまさか」

「「？」」

何やら話を通じたマリーと克蘭レスの様子に、ノーラと明日菜は首をかしげた。

そして再び視点は犬神たちに戻り、

「犬神ゲルとか言ったわよねえ。凄いじゃない。私と喧嘩して一分間以上たっていたのはピクニックで出会ったくまちゃんだけよ。二分後に私がおしくいたたいちゃったんだけど」

「いやなに……ようやく予定分が壊れたからな」

そして犬神は、軽くその場で跳ね始めた。

「これで終わりだ」

瞬動。

ゲルは瞬時に組長の目の前に出現した。

「ふん!!」

組長は即座に反応してコブシの二連撃をゲルに向かってはなつが、さきほどの出現はフェイント!! 即座にを反転させたゲルは拳を放ったことで技後硬直に陥っている組長の死角に回り込む。

『早い……!?!? なるほど。今までは手加減していたということね! でもそんな細腕じゃ!!』

ゲルの腕を見て、組長は到底自分の厚い筋肉の鎧を抜けないだろうと予想。腹筋に力を籠め犬神のこぶしを迎撃しようとした!!

しかし、ゲルのこぶしには高密度の気が練りこまれている。そしてゲルはAAAのタカミチすら押さえての体術最強だった。その拳の一撃は防弾ガラスどころか核シェルターの壁すらぶち抜く。

結果!!

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ン!!

到底人のコブシが着弾しただけとは思えない轟音と共に、組長の体が宙を舞い激痛のあまり受け身も取れないまま床に落下した。

「があ……………パンチ……………重!？」

鼻血を流しながらそう通訳組長に向かって、ゲルは再び跳躍。

その額に向かって容赦ない膝蹴りが落下してくる!!

「き、きゃああああああああああああああああ!!」

さすがに死を覚悟し、悲鳴を上げる組長の隣に、ゲルはスタツト着地した。

「あ、あれ? いきている?」

血の気が引いた顔で呆然とそうつぶやく組長にゲルは人殺しの瞳を向けながらこうささやいた。

「警告しておく。今後……………彼女とその犬には手を出すな。断るなら……………」

そして、犬神はその瞳のまま組長の額をトントンとたたいた。

「次は外さん」

「ぎよ、御意」

「ああ、あと壊したものは全額弁償な」

「わ、わかりました」

『やっぱりか!?!』

最後にマリーと克蘭レスの予想通りの言葉を吐いた犬神にマリーはあきれ果てた。どんな状況でもあざとい奴である……。

…
ナ…
ナ…
……………
ナ…
ナ…

事件解決後。ノールさんから報酬をもらい部屋に散乱する瓦礫を片付けが、何とかひと心地ついたところでようやく明日菜に話を聞かせることになったのだが。

「さて……あの野菜が何者なのか、だったよな？」

「その前に犬神君。一ついいかしら？」

「なんだ？」

犬神が話をさえぎられ首をかしげるのをみながら、明日菜は額に血管を浮かべながらこう言い放った。

「ネギはうちで預かります!!」

まあ、今日の光景を見たら誰だってそう言うよなあ……。マリイはそんなことを考えつつ、犬神と明日菜の仲裁に入るのだった。

ちなみに、結局その日はネギが何者なのかを明日菜に話すことは
できなかったという……。

あれ……これいいの？

「それにしても、なんで明日菜に魔法のこと教えようとしたんや？別に内緒で押し切れへんかった？」

「それについてはお前のほうがよくわかるべきだとは思うがな安川」

犬神と明日菜が大喧嘩（明日菜が一方的に突っかかる形で）が起こった翌日。学校生活を終えた犬神とマリーは『ネギをきちんと連れ帰る』兼『魔法を不用意に使ったりしないように、監視をしながら事務所に連れていく』ために図書室内で本を読みながらネギの仕事が終わるまで時間をつぶしていた。

「ああいった手合いは、一度気になることを見つけるとそのことが解決するまで付け回してくる可能性が高い」

「ああ……確かに明日菜やったらやりそうやなあ……」

「それにあいつは記憶を失った裏の関係者のようではないか。遅かれ早かれこういった事態には巻き込まれていた。だったら英雄のネームバリューがある野菜に任せるのが適任だ。それに僕は女子校にはあまり入り込めないが、野菜は一日の大半をこの校舎で過ごすことになる。お前だけでは手が回らないことも多いだろう。そのため協力者が必要だとは考えていたのだ。だったら一回ばれかけてしまった神楽坂にその任を手伝ってもらうのが一番手っ取り早い」

「そ、そこまで考えてたんや!!」

め、珍しく犬神君がかしこく見えんで!!

明日は槍でも降るんじゃないかとマリーが戦々恐々としていた時、

「それに……昨日の様子だと僕がしなければならぬ野菜のフォロ
ーを無料でやってくれそうだからな。こちらは寝ているだけで仕事
が終わってくれる、という夢のシステムが出来上がるというものだ
……」

「って、やっぱりかいいいいいいいいいい！！ そんな
ことやと思っただわ！！」

マリーの見事なツッコミハリセンが犬神に決まる。

二人がそんないつものやり取りをしている時だった。

「あ……ありがとうございます」

「いえ……鍵をかけたのでしばらくは大丈夫かと……」

突如図書室の入り口あたりから聞こえてきた会話に、メガネを拾
っていた犬神と、ハリセンをカードに戻したマリーは首をかしげる。

「この時間此処に来るやつはいるのか？」

「まあ、おらんことはないやろうけど……さっき施錠される音がき
こえとったなあ。せやったら私らのことに気づかんと図書委員の誰
かが施錠してもうたんやろうか？」

「ふん。女子校のやつはずいぶんと無能なんだな？」

「犬神君……。そのセリフはうちの女子全員を敵に回してしまうさかい、外では言わんほうがええで」

さらっと毒を吐く犬神に縦線を落としながらマリーは一応忠告しておく。

「ふむ。まあ、閉められたところで問題ないか。たいていのドアは蹴り飛ばせば開くしな」

「いきなりうちの校舎の設備壊すような考え方はやめてんか!？」

マリーと犬神はそんなことを言いながら、のんびりと図書室の入り口へと向かっていく。まだ中に人がいるということを伝えようとしているのだ。しめられてからそれほど時間はたっていないから、まだ近くに人がいるだろうと踏んでの行動だ。

そしてマリーと犬神は目撃することになる。ちょっと信じられない光景を……

「何をやっているあの野菜は……」

「あ、あはははははは」

確かに人はいた……。しかし外にはない。中にだ。

犬神とマリーが見たものは……

「み、宮崎さん、だめですよ!! 生徒と先生がこんなことしちゃいけないって、お姉ちゃんが!!」

「は、はい……そうですね。ごめんなさいです……」

そんなことを言いながら無数の本をまわりに侍らせた、ネギと宮崎のどかがキスをしようとしているシーンだった。

「う、うわぁ……じゃ、邪魔してもうたかな？」

気を使ったマリーが顔を真っ赤にしながら遠くの本棚へ移ろうとしている。

「ふむ……」

しかし、犬神は無言でマリーの肩をつかみその行動を止めた。

「ん？ なんや犬神君。あ、まさか依頼のために邪魔しようとかいうんちゃうやろな！？ せやったら今回はかりは拒否させてもらうで！……」

「いいや違つ。いろいろ危なそうだからお前は寝ている」

「へ！？」

瞬間、マリーの鳩尾に容赦ない拳が突き刺さりその意識を刈り取った！！

「ぶふう！？」

口からなんかいろいろと噴出させながら気を失うマリーを放置し、犬神は肩を回しながら今にもキスしてしまいそうな二人へと近づくのだった。

『あわわわわわ！！ ど、どとうしよう！！ 僕が惚れ薬なんか作っち

…
+…
+…
…
+…
+…
…

「やうからこんなことに!?!」

今朝いつもより早起きし犬神アンダーグラウンドサーチを出たネギは、昨日とは違いやたらと世話を焼いてくれる明日菜に驚きながら、何とか授業をこなしていった。しかし、その授業中に明日菜の頭が平均値より多少めぐりが悪いことに気づいてしまったネギは、思わずそのことを笑ってしまったのだ。

むろん明日菜はブチギレタ。そりゃあもう烈火のごとく怒った。当然朝のような優しい態度はとってもらえなくなってしまう、ネギは凄まじくへこんだのだ。

「こ、このままじゃいけない!! 何とか許してもらわないと!!」

ネギはそう思いながらテンパった頭で何か許してもらえる方法はないかと模索してしまう。そして、今朝明日菜が言っていた「惚れ薬があつたら高畑先生に告白できるんだけどなあ……」という言葉がネギの検索に引っかかってしまった。

明日菜に許してもらうことで頭がいっぱいだったネギは、魔法隠匿の重要性なんてものは彼方へと追いやり惚れ薬を作ってしまう、明日菜に手渡してしまったのだ!!

当然、ネギが本物の魔法使いと知らない明日菜はそんな胡散臭い薬をネギにつき返した。しかし、しつこく食い下がり薬を渡してこようとするネギに業を煮やした彼女は、だったら自分で証明して見せろと言いその惚れ薬を無理やり飲ませてしまった。

ここからが大変だった。この惚れ薬……相手に飲ませて相手をメロメロにしてしまうものではなく、作った本人が飲んで周囲の異性

を魅了してしまうという無差別型の惚れ薬だったのだ!!

そのせいでクラス中から追い回されることになったネギを、たまま通りかかった本屋ちゃんこと宮崎のどかが助けてくれたのだが……どうやらその宮崎も惚れ薬の影響を受けてしまったようで現在に至ると……。

「あわわわわわ!! だ、誰か助けてええええええええええ!!?」

ネギがそんな悲鳴を上げた時だった。

「世話を焼かせるな野菜」

そんな声とともに、何かが荒まじい勢いで宮崎の首に叩き込まれその意識を刈り取る!!

「あ、あれ?」

突如クタクタとなつて自分に倒れこんでくる宮崎を支えながらネギは声を出した人物を見た。

「い、犬神さん!?!」

「何をしている……」

そこには真つ黒な殺気を放ちメガネをきらりと輝かせながら仁王立ちする犬神がいたのだった。

そして、もう一人話をややこしくする人間が、

「ねぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

そんな大声を上げながら、施錠された図書室の巨大な壁をけり破ってきたのは、ベルのついた髪飾りで長い髪をツインテールにした神楽坂明日菜。そのさいパンツが思いつきり見えてしまったが、そんなことよりも金が大事な犬神や、まだ十歳のネギにはいまいちどうでもいいことだたりする。

「あ、あんた！？ 本物の惚れ薬をつくったってことは……魔法使いだっただの！？」

そんなことよりも、今重要なのは、ネギがオコジヨへの階段を一つ上ったということと、立っていた犬神の殺気が5割増し強力になったということだ……。

「さて……野菜。僕がどうして怒っているかわかるか？」

「え、えっと……魔法がばれたから」

「正解だ野菜。おまけに惚れ薬だと？ 秀才といわれたお前ならそれが禁止されている品だということも知っていたはずだな？ どうしてそれを作った？」

「あ、明日菜さんに許してもらえんと思って……」

「あ、あの……げ、ゲル？ こ、今回は私も悪かったというかは、反省もしてしているみたいだしこのくらいに……」

「あ？あ？？」

「じゅめんなさい……」

「いや、私が起きる前に何されとってん!？」

「ふむ。ちょっとした拷問だ。気にするな」

「いやいや気にするよ犬神君!？ 警察に聞かれたら一発逮捕やで!？」

そんな風にいつものやり取りをした後、

「神楽坂が自分でその思考に行きついてくれたのはありがたいが、このままでは依頼の完遂は難しそうだな」

「そうやなく犬神君。今回はちょっとしゃれにならへん事件になつてもうたし……。ネギ君には私からきつく言っとくわ」

そう。本当に今回の事件はシャレにならなかった。1クラス内で起こったとはいえ今回の事件は魔法使いが起こしてしまった事故としては十分に大きな部類である。それこそ、魔法の存在が一般人に気取られてしまうほどの……。

「さすがにその場にいた全員がいきなり一人の男の子に惚れよつたら、怪しむ奴はぎょーさん出てくるやろうし……。ホンマやったらバレへんでも自首しなあかんランクやで？」

「あつう」

「そ、そんなにやばかったの今回の件？」

マリーの真剣みをおびたセリフに、ネギはもう泣き崩れてしまい

明日菜は顔を青ざめさせた。

「禁止されている薬品まで使ったんだ。大人の魔法使いだったらオコジヨの刑でもまだ軽いほうだろう」

「まあ、ネギ君はまだ10歳ヤシ（英雄の息子やし）、多少の事件は大目に見てもらえるとは思っけど……」

マリーの言葉に、ネギと明日菜はほつと安堵の息をつく。しかし、犬神だけは黒い殺気を垂れ流したまま不穏な言葉を紡いでいく。

「ふむ……このままでは誰であつても庇いきれなくなるだろうな。仕方がない……少し自分が置かれている立場について自覚してもらおう」

「え？ 犬神君……なにを？」

そして犬神は黒い笑みを浮かべながら、ネギを指差し一言。

「お前、実はメガロメセンブリア元老院にいいように踊らされているのだぞ？（笑）」

い、一番暴露したらアカン事実を暴露しよったこといつういつういつういつういつういつう！？

その言葉を聞きキョトンとするネギと明日菜を見て、マリーは大きくのけぞるのだった。

あれ……うわ……うわ……いいの？（後書き）

とうとうわけで……。好き勝手やらせてみました。

葛藤と外道少年探偵

「え……………な、何を言っているんですか？犬神さん……………」

犬神の爆弾発言を受けて、真つ先に動き出したのはネギだった。気丈ともいえるほどの復活の速さだったが、それはかれが犬神が言った言葉の意味を理解できなかったから…………いや、理解しようとしなかつたからだ。

「ここまで答えを言ってやっているのに目を背けるか？天才少年野菜。ならばつきり言ってやろう。お前がこの学園に送られてきたのは、メガロメセンブリアの元老院が《英雄の息子》であるお前にそれ相応の力をつけてもらって有効活用しようとしているのさ」

「ちょー！！ 犬神君!?!」

マリーが慌てて止めに入るが、犬神は一向に気にした様子も見せず、言葉を紡いでいく。

「第一おかしいと思わなかったのか？いくら優秀とはいえ十歳のガキに中学校の教師が務まるわけがないだろう。ましてやお前はくしゃみで魔力を暴発させてしまうような未熟者だ。普通の魔法生徒だったらあと二年は卒業を見送られるはずだ。魔法使用に対する禁止事項についても疎いし、魔法がどれほどの重要度をもって隠匿されているのかということも知らなさすぎる。そんなガキが魔法が優秀だからという理由で卒業できるわけがないだろう？お前が卒業した裏にはなんならかの力が働いていたと考えるのが妥当だ」

犬神によって次々と指摘される不審な点たち。幼いながらも優秀

なネギの頭脳はそれを次々とつなげていき一つの線に造り替えていく。

それによってより明確になってきた大きな意志の介入に、ネギは底知れない恐怖を感じた。

すべて自分が自身が目指して、作り上げてきたと思っていた道が実は誰かの手によって敷かれたレールの上だったとしたら……。自分ではどうすることもできないような大きな意志の存在に、まだ幼いネギの顔は恐怖でひきつっていく。

「お前が受け持っているあの2-Aにも秘密が隠れている。裏や荒事関連では忍者に傭兵、中国拳法の名門の令嬢や関西最高の魔力を持つもの、さらには神鳴流剣士までいるしな。表のほうでもかなりの人員がそろっているな。大財閥の令嬢や中学生でありながら大学の研究室に呼ばれるような超天才。まさに次代の英雄の従者にはピッタリな豪華な顔ぶれではないか？」

さらに師匠役にはあの吸血姫がいるしな。まあ、これはメガロメセンブリアではなくクライアントの考えだろうが……。

最後の重要な情報だけは伏せて（バラすとおそらくあの金髪幼女と戦わないといけなくなるだろうから、それがかなり面倒くさくて……）、犬神はクラスの秘密をすべて暴露した。

「従者候補!？」

暗に自分が受け持つ生徒は、彼に巻き込まれて魔法のことを知ること前提に集められたと告げられネギの顔色はいよいよ紙のように白くなった。それはつまり、自分が他人の人生を滅茶苦茶にしてし

まう可能性があり、自分のいく末を決めたルールを引いた人物がそのことを何とも思っていないということを目指す。とてもネギが信じていた正義の魔法使いのやることではなかった。

「ちよつとなによそれ！？ 聞いてないわよ！！」

さすがにこの言葉は聞き捨てならなかったのか、怒声を上げて犬神に食って掛かる明日菜。犬神はそれに眉をしかめながら、指をふるい近くに控えていた克蘭レスに指示をだした。

「うるさい。黙らせる」

「御意」

克蘭レスはそういうと同時に、消失。そして明日菜の後ろに出現した。

「な！！」

「神楽坂様。申し訳ありませんが、今は主が話しておられますのでしばらく黙っていてください」

克蘭レスはそういうと、明日菜を羽交い絞めにして再び消失。どこかへ消えてしまった。

「あ、明日菜さん！？」

「こつちを向け野菜。まだ話の途中だ」

慌てて明日菜を探そうとするネギの肩に手をかけ、犬神は眼鏡を

きらりと光らせ、ネギの行動を止める。

「お前はまだまだ知らないけれども、逃げるのはすべてを聞いてからにしろ」

そして、本来ネギが歩むべきだった運命はこの時、壊れた。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

「ネギ…!」

それからしばらくして、事務所に戻ってきた明日菜を待っていたのは、カップを洗うマリーとその背中にぶら下がった姫だった。

「マリー！！ ネギは！！！」

「ネギ君やったらしばらく前に出て行ったで。明日菜より先に帰ってきたクラレスさんがこっそりついていったから問題はない……はず」

「くっ！！！」

明日菜はその言葉を聞き、唇をかみしめながら事務所を飛び出していた。そんな明日菜を見送った後、マリーは冷蔵庫からゼリーを取ってきた犬神を見て、ため息をつく。

「ホンマにあんなこと言ってよかったん？ ネギ君くれたらどないすんのよ？」

マリーの若干怒りをはらんだその言葉に、ゼリーをモツシャモツシャと咀嚼していた犬神は、口の中にあっただそれを飲み込み、真剣な表情になった。

「安川」

「なに？」

「僕らが請け負った依頼は《ネギが一人でものを考えられるようにすること》と《クラスの中で極力魔法ばれを控える》ということだ。このままではあいつは、いつまでたってもメガロメセンブリ

アの連中に踊らされたままだし、クラスの連中にも多数の魔法ばれを起こす危険性があった。このまま行ってしまうばいつかあいつは致命的な失敗を犯す。そうならないためにも、ここであいつに自分の立場を自覚させる必要があった。あいつの本当の敵はひどく強大で狡猾だ。だったらできるだけ早いうちにそれを自覚させて、奴の中に潜んでいる子供ゆえの甘さを消す必要があったんだ」

「犬神君……」

苦悩するように肘をつき腕を組む犬神に、マリーは少し言い過ぎたかと反省する。そうやんなあ。いくら犬神君でも、十歳の子供に理由もなしにあんなひどいことするわけないやん。

マリーがそう思い、犬神に頭を下げようとした時だった。

「そうしなければ、僕は依頼を完遂したことにはならず、報酬はいつまでたってももらえなくなってしまう！！ そんなことだけは絶対に避けなければならぬんだ！！」

「って、やっぱりかいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！
！ そんなことやと思っただわこの外道探偵！！」

事務所の中から軽快なハリセンの音が響き渡ったのは言うまでもないだろう。

…十…十…十…十…十…

「ネギ……………」

「来ないでください……………」

明日菜はネギをさがして学園都市中を走り回った。

女子中等部。喫茶店。職員室。学園長室…………… e t c。

しかし、そのどこにもネギはいなかった。とうとう探す場所がなくなり、途方に暮れていた明日菜を救ったのはたまたま部活動をしていた明日菜のクラスメイト《散歩部》の長瀬楓と鳴滝姉妹だった。

『どうしたでござるか明日菜？ そんなに慌てて』

『あ、楓！！ごめん、ちょっとネギを見なかった？』

『ネギ坊主でござるか？』

『ネギ先生だったらさっき世界樹のところに行ったよ！！』

『ほんとー！？』

『ほんとでござるよ。何か思いつめたような顔しておったから事情を聴こうとしたのでござるが、僕に近づかないで下さいとかいって木の上に登って行ってしまっ……今から先生を呼びに行くところだござる』

『ありがとうー！！』

そんなやり取りをした後、明日菜は一目散に世界樹へと走っていき、その上へとあがった。

そして、そこでようやく、一本の巨大な枝の上につずくまっただま動こうとしないネギを発見したのだった。

「近づくなつて……なんで？」

「僕が……明日菜さんを巻き込んでしまったから……」

「ネギ……私は、気にしていないわよ」

「それでも！！僕が巻き込んでしまったのは違いありません！！」

明日菜はネギに近づいて慰めてやろうとした明日菜は、ネギの口から出た大きな叫びに思わず足を止めた。よく見たらネギの足元に水滴が垂れたような跡がある。おそらく、泣いているのだろう。

「僕は……僕はバカでした。父さんを探すことしか考えていなくて、マジステル・マジキ《立派な魔法使い》になることをしか考えていなくて……周りが見えていなかった。ちょっと考えれば犬神さんに言われるまでもなく気付けてはずなのに……。結局気づいた時には手遅れで明日菜さんを巻き込んでしまって、もう最低です……！」

ネギがそういいながら、目元をこすり立ち上がる。そして、何かを決意したかのような表情で、明日菜のほうを振り向いた。

「僕……ここを出ます。ウェールズに帰ります」

「ちょ、ネギ!? どうして……！」

明日菜は慌ててネギに駆け寄り、その体を抱きとめた。

「なんであなたがそんなことしなくちゃいけないのよ……! 悪いのは全部、そのメガロ……! 何とかの人たちじゃない……!」

「でも……! 僕がみんなを巻き込んでしまうから……! 僕が何も知らないせいで、いつかあのクラスの誰かを危険な目にあわせてしまう可能性があるから……。そ、それに……。」

そこで、明日菜は気づいてしまった。ネギの体が小刻みに震えているのを。それは、悲しみや怒りなどの震えではなく……純粹な恐怖ゆえの体の震えだった。

「僕……怖いんです。もしも、この決断すらも誰かのレールの上だったら……僕の夢や目標はすべてまやかして、誰かに植え付けられたものだったら……。そう考えるともう何も信じることができないんです。メガロメセンブリアも、学園長も、タカミチも、クラスの人みんなも、そして……自分自身でさえも！」

小刻みに震えて泣きじゃくるネギに、明日菜は困った。それはそうだ。彼の悩みはあまりの巨大で複雑すぎた。元関係者の明日菜とはいえ、今は記憶を失った普通の中学生だ。彼の悩みに答えてやれるほど人生経験を積んだわけでもないし、彼の悩みを解決してやれるほど大きな力を持っているわけでもない。

だが、そんな彼女でも。いや、彼女だからこそいえることがあった。

だから彼女は大きく手を振りかぶり

ネギの頭に拳骨をたたき落とす!!

「ばかああああああああああああああああああ!!」

ゴイン!! という、決して人の頭が出してはいけない音を立てながら、ネギの頭に荒まじい衝撃が走り、ネギの頭がアニメのように横に膨れる。むろん口の中からは何かいろいと出てしまっていた。

「あ、あすなさん!？」

「なんでそんなことが言えるのよ!! なんでそんなにすぐ諦められるのよ!!」

明日菜はそういつて、再びネギを抱きしめる。今度は先ほどとは思いの込め方が違う。強く、強く、だれにも負けないほど強く……ネギを慰め、いさめるために明日菜は強くネギの体を抱きしめた。

「あなたの思いが偽物ですって!？ そんなはずないじゃない!! こうして後悔しているあなたも、ゲルのところでもシヨックを受けたあなたも、私たちの歓迎会で笑っていたあなたも、本屋ちゃんを助けようと魔法を使ったあなたも!! 全部本物に決まっているでしょ!!」

「あ、あすなさん……」

ネギはその時気が付いた。明日菜の目に大粒の涙が浮かんでおり、

今にも零れ落ちそうになっていることだ。

「わ、私にあんたの悩みを解決してやることはできないけど、私があんたの代わりになってあげるとはできないけど、でも……手伝ってあげるから。あんたの悩みが解決できるように手伝ってあげるから……いなくなるなんて言わないで。まだ出会ってからちょっとしかたっていないけど、あんたみたいな子供が苦しんでいるのに、巻き込まれるのが怖いからはいさよならなんて……できるわけないでしょうー!!」

「あ、あずなさん!!」

最後にはネギももらい泣きしてしまい、二人な世界樹の上で泣き続けた。そんな二人をやさしく見守るように暖かい夕日は、二人が泣き止むまで、のんびりと待っていてくれた……。

この物語には不釣り合いなイベントが終わった後、何かいろいろと吹っ切れたネギと、明日菜は楓たちが呼んできた広域指導員のきつい説教を喰らってから家路についた。危ないことはするなと鬼の新田にこっぴどく叱られてしまったのだ。

「あつう……色々台無しね」

「ふふ。でも、明日菜さんと話せてよかったです。僕もいろいろと考えが変わりました」

「そつ……」

ネギの言葉を聞き若干恥ずかしそうに頬を染める明日菜に、ネギは再び笑う。そして、

「クランレスさん」

「……」

明日菜から聞いて、つけてきているはずといわれたクランレスを呼んでみた。するとこの老人はまるで闇からにじみ出るように姿を現してきて……もうそれだけでかなりの使い手だということがわかってしまい、ネギは苦笑を浮かべる。

ほんと、自分の周りには異常ともいえる充実した環境があるのに、なんで気づけなかったんだろうと。

そして、それも今日までだと決意を新たにクランレスに話しかけた。

「僕……強くなります。そして本当の意味でかしくなります。誰よりも何よりも強く、賢く、もう二度と誰の手にも躍らせないほどにです！！ですから……力を貸してください。僕をきたえてください」

ネギの言葉を聞きクランレスはしばらくの間無言だった。そして……。

「お見事でございます。ネギ様。明日菜様」

クランレスはそのままネギたちに向かって跪いた！

「え！？」

「ど、どうしたんですかクランレスさん！！」

「ゲル様はあなたのその言葉をおまちでした」

「!?!」

明日菜とネギその言葉に純粹に驚いた。つまり、犬神はすべてを予想してネギにあのことを教えたことになる。

「ゲル様はあなたに自分の現状を正しく認識してもらうことを望んでおられました。ですが、まさかあの状況から新たな決意をするとは予想してはおられなかったでしょう。いやはや、見事の一言でございます」

「どうして、犬神さんはそんなことを……」

ネギはその言葉を聞いて、不信感をあらわにする。いまさっきまで彼が信じていたものが音を立てて壊れたところだ。そう簡単に他人を信じることはできない。

「さあ、なぜでございましょうか……あの方の深謀遠慮な理由に行きつくには、私は少し凡才すぎますゆえできませんが……。ただ……」

克蘭レスはそこで言葉を切り、意味深にほほ笑んだ。

「私はあなたにかかわることを再三やめるようにゲル様に進言いたしました。あなたは何かと黒いうわさや陰謀が絶えないものです……ですがそれを突っぱねて、あなたを《犬神アンダーグラウンドサーチ》で預かると決めたのはゲル様です」

「!?!」

「きつと、あなたに………何かを見いだされたのでしょうか。そしてあなたに協力したいと思われたのでしょうか」

克蘭レスの言葉を聞いて、ネギは泣きながら犬神アンダーグラウンドサーチに走っていった。

そして、

「犬神さん!!」

「なんだ、野菜。早かったな」

ネギは玄関の扉を勢いよく開き、事務所の中に飛び込む。そこには、今はいない克蘭レスと明日菜と自分の分の夕食が置かれていて……マリーと犬神と姫も自分たちの夕食には手を付けず、待っていてくれた。

それにネギは再び泣きそうになる。自分の帰りを待っていてくれる家族のような存在に、泣きそうになる。

でも今は泣くところじゃない。そんなことを犬神さんは望んでいないはずだ。そう思ったネギは目にぐつと力を込めて、頭を下げた。

「いろいろ話してくれてありがとうございます!! おかげで目が覚めました!! そのうえでこんなことを頼むのは図々しいかもしれませんが……僕を、強くしてください!!」

ゲルはしばらく無言でその姿を見ていたが……

そういって、ハリセンを送還した後、明日菜を抱えて戻ってくる
であるう克蘭レスを迎えに出るため玄関へと足を向けるのだった。

後日談。

「あまり話を作るなよ克蘭レス」

「はっ。申し訳ございません。魔がさすとはまさにこのこと……」

「って、あれ嘘だったんですか!!」

「ねぎく〜ん。あんま克蘭レスさん信用せんほうがええで。隙見
せたらからかわれるさかいに」

「どんな老執事!？」

帰ってきたネギたちを交えた夕食でそんな会話が交わされたかど
うかは、ご想像にお任せします。

葛藤と外道少年探偵（後書き）

次回……………あの怪盗を出します!!

そのため、ドッジボール編と図書館編を大幅カットしたのでありますが、『やってくれ!!』という方はご意見をください。

「いや、殺しちゃダメですって！！スパルタン？は僕たち魔法先生や魔法生徒の質を上げるためにわざわざ泥棒を働いて……………」

「わかりやすい説明おおきにレイジー！！」

明らかに殺傷能力が尋常ではなさそうな通常の拳銃に三倍の大きさはある拳銃を軽々と振り回し、スパルタン？に焦点を当てるジヨニーに慌ててレイジーは飛びついた。

ちなみにジヨニーは自分に逆らう生徒は皆殺しにしようとするという悪癖を持っているため相方のレイジーはかなりの苦勞を強いられていた。

「おい。れいじ。きいつけや」

「へ？」

そんな風に二人がもめていた時だった。突然かけられたスパルタン？からの注意にレイジーはジヨニーから目を離してそちらを振り返った。

するとそこにはスパルタン？の靴が見えて……………。

「へぶつ！？」

その足に顔面を踏み抜かれたレイジーとジヨニーはそんな悲鳴を上げて地面にたたき伏せられる。対するスパルタン？は二人の顔面を踏み台に大きく跳躍。気で強化された脚力を利用し、近くに立っていた時計塔の頂上へ一足飛びに跳躍した！！

「ははは！！今回も俺の勝ちやかな魔法生徒先生の諸君！！ほな、このお宝は成功報酬としてきっちりもらっていくさかいに、うらまん
といてや〜」

そういつて、彼は煙をまき散らし姿を消す。その様子に肩で息をしていた刀子は地団太を踏みながら悔しがり、神多羅木は苦笑交じりにたばこをふかす。

そして、

「てめえのせいで逃げられちまったじゃねえか！！」

「あんたがそんな物騒な拳銃振り回すからでしょうが！！」

凸凹コンビの二人はスパルタン？を取り逃がした責任を擦り付け合って醜い喧嘩を展開するのだった。

学園長室にてその様子を見ていた近右衛門と高畑は苦笑交じりに遠視の魔法を切った。

「さて今回も逃げられてしもうたのお」

「六重君は身体能力だけなら僕に匹敵する子ですからね。ラカンさん推薦の天才児というのはだてではないようで………」

「ふおふおふお。あのジャックラカンに育てられた戦災孤児か。しかしいつまでも中学生に負け続けるというのはのお。いい加減うちの損害もシヤレならんしのお。何とかならんものか？」

怪盗スパルタン？こと六重トウジは魔法使いではなく、気の運用のプロフェッショナルだ。つまりバリバリの前衛型格闘家である。

中東の紛争地帯で活躍していた軍人の両親のもとで生まれた彼は、幼いころに両親を亡くし、米軍の育児施設で育てられた。その頃からメキメキと才覚を発揮し十歳のころには前線に出てあまたの敵を屠ってきたらしい。

だが、そんな彼もその当時はまだ常識の枠内にはまっっている強さしか持つておらず、彼が所属していた部隊がゲリラたちの奇襲を受けてしまい全滅。たった一人で死にかけながら紛争地帯をさまよっていたところを、たまたま観光に来ていたジャックラカンに拾われたのだ。

ラカンは彼を育てているうちに彼の中に眠る膨大な《気》に気づきある程度稽古をつけないと逆に危ないと判断。彼の技術のいくつかをトウジに授けた。もともと才能があつた彼はメキメキと実力を上げてき、本国ことメガロメセンブリアでの格付けは堂々のAA+。タカミチと同格と認定されている猛者となつたのだ。

実際その実力は異常の一言に尽き、優秀な魔法使いたちがそろっているこの麻帆良での戦績はたった一回の戦いを除き無敗。まさに天才の名の体現者といつても過言ではないだろう。

「それを見込んで、麻帆良にある秘宝級の魔法具を条件付きの報酬として魔法先生や生徒の訓練に付き合ってもらつておるのじゃが……」

その条件とは『魔法先生や魔法生徒によつて嚴重に守られた魔法具を見ごと盗みだすことができればその秘法の所有権を譲る』というもの。麻帆良にいるあの外道探偵のことを思い出した近衛門が『変わった少年探偵があるのじゃから、変わった怪盗がいてもいいんじゃないね?』と面白半分で提示した条件だつたのだが、六重はそれなのんだ。

そして今に至り……。彼が盗み出した麻帆良の秘宝は49個。そのすべての防衛線において魔法先生や生徒たちは彼に一撃を入れることもできていないのだ。むろん演習という側面があるた

め同格のタカミチが出陣していないための結果だが……………。

「そういえばラカンさん、六重君がルパンやら怪人二十面相が大好きだって言っていましたからね……………スタイルは全く違います……………」

「ふむ。とにかくこのままでは麻帆良にある秘宝はすべてなくなってしまうわい。仕方ない、あの子に助力を頼むかのう」

近右衛門はそういうと机の上に置いてあった電話の受話器を取りあるところに電話をかけるのだった。

怪盗！？スパルタン？！！（後書き）

奴が・・・奴がやってきた！！

BATTLEスパルタン！！

「おはよう克蘭レスさん」

「おはようございますマリー様。朝練頑張ってください」

犬神アンダーグラウンドサーチの朝は早い。早朝に起きたマリーはまず朝練として、気の修練と走り込みを行う。それをしておかないと、なんだか落ち着かないのだ。

「おはようマリー」

「ああ。明日菜。おはよう」

麻帆良中を走り回って体力づくりをするため早朝から新聞配達バイトをしている明日菜と出会うことも多かった。まあ、今回の場合は明日菜がこちらを待ち受けていたようだが。

「で？ネギは元気にしている。休みの間は……………」

「ああ。まあ元気やで。でも明日菜、あなたがネギ君のことこころまで気にするやなんて意外やな。子供は嫌いなんやなかったん？」

「あんな劣悪な環境にいるんだから失敗しないほうがどうかしているわよ！ー！」

「……………」

微妙に否定できない明日菜のセリフにマリーは顔を引きつらせる

しかなかった。まあオカマのヤクザが殴り込みに来るような場所に子供がいれば誰だって心配するだろう。

「で？どうなのよ？」

「ちゃんとネギくん専用の部屋があるさかいに安心し。うちは無駄に空き部屋が多いさかいなあ。なんやったら今度泊まりに来る？」

「ああ？いいの。お願いするわ。ゲルのやつ信用できないし……」

「あとそうやなあ……昨日ネギ君が犬神君の依頼手伝ったんやけど……」

「へ、へんな依頼じゃないでしょうね！！」

「ああ……まあ、うん。それはええやんか」

「ちょっとはつきり答えなさいよ！？」

まさか三十代にもなって自分探しの旅に行っている人の捕獲だなんて言えるわけもなく、マリーは言葉を濁すことで明日菜の追及を回避、ちょっとだけうつろな笑みを浮かべて話を逸らした。

「まあ………ツッコミのスキルは上がったはずやわ」

「あんたのところの事務所って探偵事務所じゃなかったの？」

普通に探偵の仕事をしていけば上がるはずのないスキルの上昇を聞き、明日菜は若干顔に縦線を入れるのだった。

⋮
†
⋮
†
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
†
⋮
†
⋮

「また派手にやったみたいなあ………………。六重君」

朝練から帰ってきたマリーは克蘭レスが作ってくれた朝食を食べながら、明日菜にもらった朝刊の記事に目を通す。ちなみにほかのメンバーはもう食事を終えており、犬神はソファで本を読み、ネギと姫は仲良く一緒に食器を洗っている。

克蘭レスは朝に来客があるということでは今は席を外していた。

『怪異？それを飛ぶ少年を私は見た！？』

麻帆良新聞の一面トップを飾ったその記事を見てマリーは顔をひきつらせた。

そこには、月を背景に（みょーんという擬音が聞こえてきそうな）大跳躍をかましばっちりと証拠写真を抑えられている裏の関係者が写っていた。

六重トウジ。犬神ゲルのクラスメイト兼自称永遠のライバルである。

「昨日はうるさかったからな………………。おおかたあのダイナマイトバカが暴れていたんだろ。だったらあいつとの訓練ということは容易に想像できるはずだ」

犬神はそういつてメガネをクイツとあげる。

「ってか、犬神君気になったりせえへんの？一応クラスメイトやる」

「え！？この人犬神さんのクラスメイトなんですか！？」

マリーの言葉に驚いた顔をするのは食器洗いを終えたネギである。昨日三十代モラトリアムを捕獲したネギは、ちよつとだけ現実より美化されていた犬神を、現実に沿って正しく評価するようになり、マリーと同じようにツツコミの技術を習得していた。

つまりこの会社に慣れてき始めていた。それがいいことなのかどうかは正直微妙なところだが……………。

「ああ。裏の関係者で伝説の英雄の弟子らしいで」

「で、伝説の英雄の弟子！？す、すごそうな人ですね！！」

「まあ、伝説の英雄の息子のお前がそんなにたいしたことないからな。あまり期待しないほうがいいぞ」

「あつ……………」

さらつとはかれた犬神の毒舌に落ち込むネギ。そんなネギを気遣ってか姫はポンポンとその頭を撫でた。

「姫ちゃんとネギ君は仲ええよな？どないしたん」

いつの間にか仲良くなっていた二人にマリーは少し笑いながら話しかけた。

「ネギの父親はダメおや。何となく共感ができる」

「だ、だから一応尊敬しているんですからそういうこと言うのはやめてよ！！た、確かに父さんは父親としては失格かもしれないけど、

すごい人だったんだから!!」

「はいはい」

顔を真つ赤にして反論してくるネギを軽くかわす姫。ネギはそんな姫に頬を膨らませて頭に置かれた手を引き離す。

「そ、そんなこと言いながら姫ちゃんだってほんとうはお父さんのこと好きだったんじゃないの？」

「え？嫌いだつたよ。存在自体がうざい人だったから………父のように慕っていた人はいたけど」

「実の娘にそんなこと言われるなんてどんな父親だったの!？」

さらつと吐かれた毒舌にネギは愕然とした。この事務所………肉親に対する評価がシビアすぎる。

そんな時だった。事務所のインターホンが鳴らされゲルが玄関に視線を向ける。

「来たか」

「どないしたん犬神君？」

「依頼だ安川。助手その二と野菜を連れて執務室へ来い。ああ、その前に東側の壁を見に行けそろそろ奴からの依頼も来るはずだ」

「奴?………ああ、また矢文かいな」

何やら納得した様子で朝食を掻き込んだマリイは、姫を背中に背負いネギの手を取る。

「二人ともいくで。依頼文回収に」

「なんのですか？」

「ん？この子がそろそろ犬神君に依頼を出す頃やさかいな。その回収」

そういつて新聞を指差すマリイを見てネギはふしぎそうに首をかしげるのだった。

…ナ…ナ….:….:ナ….:ナ…:

ネギが玄関に到着した時、そこには小刀と巨大な男の首元に突き付けるクランレスと、通常の三倍はあるつかという巨大な拳銃をクランレスの額に突き付ける、眼帯をつけて長い髪をとさかへアーにした明らかにヤンキー臭い格好をした男がにらみ合っているところだった。

「えつと……………」

「相変わらずデンジャラスやなあジヨニー先生は」

その光景にフリーズしてしまったネギを放置し、マリーは拳銃を持った男に話しかけた。

「はん。安川か。相変わらずこのしみつたれた事務所にやとわれてんのか？」

「いつてええことと悪いことがあんでジヨニー先生。そんでクランレスさんは何しとんの？」

「ドアの外に殺気を感じましたので、一応の警告を」

むろんこの拳銃男は昨日スパルタン？に敗北した凸凹コンビのジヨニーである。その後ろにはデンジャラスすぎる二人の応酬にドン引きしているレイジーがいる。

「はあ、本で何しに来たんよ先生方二人は？」

「わかってんだらうが。あのクソやろうに用がある」

そうこたえ克蘭レスに案内されて中に入っていくジヨニーをポカンと見送った後、復活したネギは慌ててマリーに話しかけた。

「い、いいんですか！？あんな悪そうな人中に入れて」

「ねぎくん。落ち着いて。あれでも一応うちの教師やで」

若干顔をひきつらせてそう答えたマリーにネギはさらに目を丸くしてジヨニーが消えた廊下とマリーに視線を往復させる。

「え？先生？」

「ジヨニーとレイジーは初等部教師。ジヨニーは体育。レイジーはクラス担任をしている」

「うそでしょう！？」

姫の追加説明にネギはさらに驚きの表情を見せた。

言いたいことはわかるけど、いろいろと遠慮がなくなってきたな

あネギ君。もう何のオブライトにも包まらずに信じられないといった顔をするネギに苦笑をうかべながら、マリーは矢文が刺さっているであろう事務所の裏手へあるいていく。

「ああ、やっぱり来とったわ」

「それなんですかマリーさん？」

コンクリの壁に見ごとに突き刺さり、穴をあけている矢を見てマリーはため息をつきながらそれに気を流し引き抜く。そうでもしないと深く刺さりすぎて抜けないのだ。

「見ての通りのものやよ。でも真つ先に見るんは犬神君やから勝手に見たらあかんで」

マリーがそういいながらネギに渡した矢文には豪快な文字で、

『果たし状!!』

と書かれていた………………。。

「ちょ？先輩！？」

そういつて拳銃に手をかけるジヨニーにレイジーは慌てて立ち上がった。本当は昨日の夜学園長が頼んだ依頼の書類契約をしに来たのだが、そんなことはダイナマイトバカ・ジヨニーの頭に中からはきれいさっぱり消えているようだ。

「あのコソ泥は俺が殺す。てめえはてえだすな。余計な首を突っ込んで来たら殺すぞ？」

「殺す！？」

ジヨニーの殺す発言はいつものことなのだが、不慣れなネギはいちいち反応してしまう。レイジーはそのたびにぺこぺこ頭を下げていた。

「先輩！！いつも言っていますますが殺さないでください！！？」

「ふむ。別に貴様が依頼をけるというのであれば僕は別にかまわない。だが、こちらも別口で依頼が入っていてな。今回のスパルタン？の件は独自にかかわらせてもらうつもりだ」

「ああ？また果たし状か？つたく。来てるのはわかっていたがよお……………いい加減気づけよクソガキ。てめえのせいであいつの活動はここ最近活発になっていやがる。お前の負ける前は月一だった襲撃が今じゃ週三位増えていやがるんだ。あのバカ、俺たちとの戦闘をお前に勝つための特訓だと考えてやがる。この落とし前をどうつけるつもりだ」

そういつてジヨニーが取り出した一枚の紙には大きな文字でこう

書かれていた。

『今度こそ犬神君に勝ったんねん!!』

そしてその後ろには小さな文字で、

『P S ・ 図書館の魔法書一冊。なんかテキトーにパクらせてもらいます』

明らかに本題とP S が逆な手紙にネギは啞然とするしかなかった。

「こんなバカな予告上まで出しやがっておちよくっているとしか思えねえ」

「ふん。ジョニー。そのバカな予告上は貴様が昨日の夜にあいつを捕まえておけばなかったはずのものだ」

「ぐ!?!?」

ジョニーの言い分をひとしきり聞いた後、犬神は特に興味もないといった表情でジョニーに向かって毒を投げつける。

「そのザマで手を出すなどは……………片腹痛いわ」

「……………!!」

その言葉がまるで物質的な威力でも持っているかのようにジョニーの頭を殴りつけ、ジョニーの沸点の低い怒りの琴線に触れた。

「殺す。すぐ殺す!ぶっ殺す!!」

「落ちつてください先輩!!」

「あの……………マリーさん」

「ん、なんや?」

なんかもういろいろキレてしまい、拳銃を片手にブツブツ不穏な言葉を呟くジヨニーを見てネギはマリーに話しかけた。

「僕……………あんな大人には絶対になりません」

「それはとてもいいことだと思うよネギ」

「この学園のネギの教師は……………ほとんどが反面教師である。」

…寸…寸…………寸…寸…

「にしても犬神君。ほんまよかったん？」

「何がだ？」

「いや、ネギ君達だけで捕獲に向かわせてよかったんかって聞いてんねんけど……………」

そういいながらマリーと犬神は麻帆良一高い時計塔の屋根から図書館島のほうを双眼鏡でのぞいていた。

図書館島から少し離れた大通りではネギと姫が待機しており、スバルタン？を待ち構えていた。

「いざとなれば助手その二が何とかするだろう。それに奴にはキチンとクランレスに伝言を頼んだ。『僕と戦いたいならまずはネギ・

スプリングフィールドを倒せ』と。なにどちらにせよ逃げられることはない。あいつは僕との戦いに勝つことが目的だからな。野菜を抜けたとしても僕と一戦交えるまで逃げることはしないだろう」

「いや、それはわかってんねんけど……………」

そんな会話をしながら釈然としない表情でマリーは双眼鏡を下し犬神のほうを見つめた。

「わざわざネギ君をぶつける必要があつたんかいな？ いつも面倒なことせんと？ 殴り飛ばしてしまいやん」

そう。犬神は基本的にいつもからんでくる？ こと六重のことをめんどろな奴と認識している。そのため彼の依頼はきちんとして受け手をするが、ネギをぶつけてラスボスとして居座るなどという面倒なことはせずじかに出向いて殴り飛ばして終わらせるのだ。

しかし、今回に限ってそれをしようとはしない……………。

「ネギ君関連で何かするつもりかいな？」

いぶかしげなマリーの視線に、犬神は覗いていた双眼鏡をおろし、メガネを上げる。

「安川。僕たちのネギに関する依頼は奴を一人前に育て上げることだ。そしてその中で最も面倒なのが奴に施すべき戦闘訓練」

「ああ、英雄の息子やもんなあ……………。いろいろ厄介こともありそうやし、確かに自衛の手段ぐらいもつといたほうがええやろうけど」

「それを僕たちが教えられるかといえは答えは否だ。僕は誰かに戦闘技術を教えるの酷く不向きだからな」

「ああ、まあ犬神君は練習せんでも大半の格闘術はできるさかいなあ。技の習得過程なんて人に教えることはできひんやろうけど……。ほなだれに……。」

そこまでいったときにマリィはようやく犬神の狙いに気づいたのか、若干あきれた表情で犬神を見つめ返した。

「もしかして……。」

「ああ、奴に押し付けるぞ」

その言葉が紡がれた時、図書館島のほうで大きな銃声が響き渡った。

そして、その頃図書館棟の地下では……。

「師匠……… 本当に僕は行かなくていいのですか？」

「ええ。君はまだまだ先でしょう。君の同級生が面白いことを考えているみたいですし、しばらくはラカンの弟子にお任せしましょ

「う

そういってフードをかぶった人物は優雅に紅茶を口に含む。

「さて、修行を再開しましょうかイエダニ君」

「僕の名前は猫谷ねこたにです!!」

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「はあ……………今日もたいしたことなかったなあ。ええ加減デス眼鏡が出てくるかと思ったんやけど……………」

人を撲殺できそうな巨大な本を片手に夜の闇を跳躍しながら、スバルタン？は大通りに降り立つ。

この逃走劇はいささか張り合いがなさ過ぎた。こんな調子で犬神に勝てる力を手にすることができるとか？はため息をつく。

当初はあの狸の学園長に一泡ふかしたって！と喜んでいたスバルタン？だったが、ある戦いで敗北してしまっただけからは貪欲に訓練のためにこの行事に臨んでいた。

少年探偵犬神ゲル。彼の無敗歴に師匠以外で唯一泥をつけた男。その男に勝つために？は日夜訓練に励んでいるのだった。しかし、その訓練が今は問題だった。

弱すぎるのだ。この学園の魔法先生や生徒のすべてが彼の実力を大きく下回っている。そんな相手と何千何万回戦おうが結果は同じで、まったく訓練になっただけの気がしなかった。エヴァンジェリンあたりが出てくればあるいは？と思いはするのだが、『バカの相手は嫌いだ』の一言で見事に撃沈。同格のタカミチが出てきてくれれば御の字なのだがどうやら彼も自分の相手をしてくれる気はないらし

い。

正直訓練の相手がいなくて伸び悩んでしまっているのが今のスパルタン？の現状だった。

「まあ、今はええか」

なかなか面白そうなやつと喧嘩ができそうやし。

口元に凶悪な笑みを浮かべながらスパルタン？は長い杖をかまえて自分と対峙する真面目そうな顔をした一人の少年に目を向ける。

「お前か小僧？英雄の息子いうんは。犬神君から話は聞いてるで」

「ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

「はつまじめなやつちゃんあ。ええか一つ教えといたるわ」

スパルタン？はそういうと、目礼をしているネギに向かって一気に駆け出し蹴りを放つ！！

「！？」

まさか礼の途中に襲い掛かってくるとは思っていなかったのだから。ネギが慌てて杖を構えるがその反応ではあまりに遅い。

「はあ！！」

しかし、スパルタン？はわざと蹴りの速度を遅くし、ネギの杖による防御を間に合わせる。そしてその防御の上から強力な蹴りを叩

矜持と正義（笑）と地獄の一夜

凶悪な蹴撃がネギの頭が今までであったところを薙ぎ払う。

「!?!」

ネギはその不意打ちと同じ行為に驚きながらもなんとか対処。杖でその攻撃を受け止めた。

「?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「戦闘中にあからさまな隙を見せたらアカンで坊主。本当やったら今ので一回死亡や」

そういつて天空に飛び上がる？を見て、ネギは憤りを感じた。

不意打ち。それもかなり汚い方法だ。《立派な魔法使い》を指すネギにとっては到底許すことのできない行為だ。

そのためネギは杖を構えながらも、なおも呪文を唱えようともせず怒りの声を？にぶつけた！

「ひ、卑怯ですよ？さん！！人が礼をしている時に攻撃……………へ
ブツ!?!」

しかし、？はそんなことに気を使う人物では当然なく、ネギの怒声を無視してその顔に見事な飛び蹴りをヒットさせた！

「…って、はあ!?!」

吹っ飛んでいくネギを見て思わず固まる？。それはそうだろう。今の不意打ちで戦闘態勢になったと思っただら、いまだ言葉で説得しようなどと試みている人物なんて？の記憶の中には誰一人としていない。この学園の先生や生徒ですら、そんなことはしないのだ。

想像以上のネギの甘さに愕然としつつ、？は傍らで控えて観戦していたヒメに半眼を向ける。

「なあ、姫ちゃん。お前は参戦せえへんの？正直こんなガキ相手にしてもあんまり価値無い思っんやけど？」

「私の仕事は観戦すること。ネギが危なくなったら助けること。だから今はいい。まだネギは危なくないから」

「そら俺が手加減しとるからや。俺が本気出してこいつと戦ったら二分で百回殺せんで？」

「うっつ……………話はちゃんと最後まで……………」

「そういつて立ち上がるネギに、？はため息をついて瞬動を行う。

「へー！？」

このままではまともな喧嘩はできないと判断した？はまずはネギの甘さを抜くことにした。

ネギの目前へと瞬間移動した？はその額に強烈なデコピンを叩き込む。

ただのデコピンのはずなのに、まるで硬球の直撃を受けたかのよう
うにのけぞるネギ。そうして姿勢を崩したネギの足払いをかけネギ
の体全体を空中に浮かべた後、

「どっせえいいいいいいいいいい！！！」

「うわあああああああああああああああああああああ
？」

力任せにネギの体を天空へと放り投げた。

「ええやるネギ君。お前の話を聞いたろ。ただし俺に一撃入れるこ
とができたらやけどなあ」

？はそういつて虚空瞬動を行い天空へと飛び出す。そして、杖を
使い何とか落下を免れたネギの前に出
現し再びデコピンで弾き飛ばした！！

…十…十…十…十…十…十…

「なあ……………犬神君」

「なんだ安川」

「ネギ君一方的にタコなぐりにされてるんやけど？」

「当然だ。ネギは近接戦闘の手段を持たない魔法使い。？は一流の魔法使いですら苦戦する近接戦闘のプロフェッショナルだ。勝てる要素がどこにある」

「ほななんでネギ君？にぶつけたんよ！？明日菜にばれたら怒られんの私なんやで！？」

そういつて顔に縦線をいれて、表情をひきつらせるマリーにいぬ

がみは眼鏡をきらりと輝かせてどや顔で答えた。

「安川。奴は痩せても枯れても天才少年だ……………この意味は分かるか？」

「ん？」

マリーは突然そんなことを言ってくる犬神に首をかしげた。

「要するに……………奴は神様に愛されているといたいなのだ」

「……………ほんまかいな」

マリーたちの雑談をしり目に天空で展開される一方的な戦いは続く。

…†…†……………†…†…

「はあはあはあはあ……………」

ネギは杖の上で荒い呼吸をしていた。

はい……………。早すぎる。

？の足元には高速回転する車輪が二つ。おそらくは気を高速回転させて空に浮いているのだろう。そうすることによって作られた足場を使い地面にいる時と同じように瞬動を使う。速度でいえば間違いないタカミチすら超えるだろう。

「ど、どうして話を……………」

「坊主。お前に話すことを許した覚えはないで？」

瞬間。再びネギの目前に現れた？はその額にデコピンを叩き込み

杖からネギをたたき落とす。

「くっ！？杖よ！！！」
メア・ウィルガ

さすがにこの短い詠唱の魔法は成功し、ネギの杖は彼の手に収まった。だが、

「虚空瞬動もできひんのかいな？」

「！？」

瞬間！落下するネギの目前に現れた？が今までのデコピンとは違う、気が込められた右手を振りかぶって出現した。

「これでも出力は低めや。死にはせえへんやろ。うけてみい！！！」

「！？」

そして、ふり抜かれた左手からはすさまじい気が放出され巨大な衝撃となりネギを打った！！

「？！！！適当に右パンチ！！！」

「ひ、左手じゃないですか！！！」

律儀にツツコミを入れるネギを無視して、？のはなった衝撃はネギの体を強打、その体を地面に勢い良くたたきつけようとした。

「八卦・巽・開。帝国式防御気弾。《柔法・気円》」

その時、今まで傍観を決め込んでいた姫が動いた。その両手には気が握られておりそれを荒まじい勢いで落ちてくるネギに向かって投擲する。

「ふええ！？ちょ、姫ちゃん！？」

「安心してネギ痛くはないはず……………」

自分に向かっただけの攻撃だと勘違いしたネギが悲鳴を上げるが姫は特に気にした様子もなく、指を鳴らす。

瞬間！！その気弾はパンというおとともに見事に破裂し気で生成された細かい網に変化した！！

「ほお。便利そうな技やなあ」

一足先に虚空瞬動で降り立ったスパルタン？は、その光景を見て口笛を吹く。

「まわれ」

その？の言葉を無視して姫はさらに指示をだし、天空に展開された網を回転。ネギの落下エネルギーを回転エネルギーに変換しつつその勢いを完全に殺す。

そして、それによってようやく呪文を唱える余裕ができたネギは杖を使い空中に浮き何とか怪我のないまま地面に降り立った。

「今のは危なかった……………」

「なんや？文句でもあるんかいな？」

「別に」

無表情のまま？にそういう姫を見て、若干悪いとは思っていたのか？は目をそらしながらそうつぶく。しかし姫は特に言及する様子もなくのんびりとネギのそばに歩いていき荒い息をしているネギの肩に手を置いた。

「ネギ。帰るよ。今回はネギの負け」

「そ、そんな！！納得できないよ！！」

しかし、ネギからは想定外の言葉が吐き出された。

「はあ？」

自分の勝利にいちやもんがつけられ、明らかに機嫌が悪くなる？。対するネギも一歩も引かないという姿勢で？に立ち向かう。

「あんな不意打ちから始まって詠唱もさせてくれない戦いなんて卑怯じゃないですか！！やり直しをしてください」

「ネギ、それはさすがに……………」

ネギのあんまりといった態度に姫は声だけ不快感を表す。どのような戦いだろうが勝負は勝負。負けは負けだ。おまけに？はかなり手加減していた。本当なら初回からあの右パンチ（笑）を使ってネギを圧倒することもできただろうに、彼は始終威力の低いデコピンを使ってくれていたのだ。お礼を言う必要ならあるだろうが、文句

を言う筋合いはまるでない。

姫はため息をつきながら、いくら大人びていても所詮は十歳だな、
とため息をつきつつネギをいさめようと口を開きかけた。

だが、その前に……………！！

パンッ！！

鋭いおとともに？のビンタがネギに向かって飛でいた。

瞬動で現れた彼はネギを頬を張り飛ばし、その体を吹き飛ばす。

「!？」

そのまま建物に叩き付けられ、泣きそうになりながら目を白黒さ
せるネギに向かって？は今まで聞いたこともないような低い声でネ
ギを怒鳴りつけた。

「オンマエ何勝手なことぬかしとんのじゃ、こら!!」

「ひっ!？」

青筋を浮かべ、鬼神のごとき気をまき散らしながら近づいてくる
？に、ネギは悲鳴を上げて後ずさる。しかし、彼の後ろは彼がたた
きつけられた壁でありそれ以上後ろに下がることは不可能だったた
め、ネギん顔には絶望が浮かんだ。

「卑怯や？不意打ちや？そんなもんでいちゃもんつける気かこら！
!ふざけんなや!!喧嘩にルールもくそもあるおもとんのかクソガ

キ！！」

そついいながら？はネギの襟首をつかみ持ち上げる。ネギは真っ青になりながらガタガタと震え、？の怒りの表情を見つめていた。

「喧嘩するときに相手が『今から殴りますけどええですか？』とか『不意打ちするから頑張つてよけてや』とかいうおもとんのか！笑かせんのも大概にせえや！喧嘩はいつもどんな時でも真剣勝負なんや！ましてや裏の世界に入つとる魔法使いや気力使いにとつては、命を懸けた戦いゆうんも少なくない！そんな中でお前がゆうような礼儀正しい戦いができるおもとるんか！！」

？は幼いころから戦場に立っていた。そして才覚をあらわし常勝無敗とおそれられた彼だったが、彼が生まれたときから最強だったかと問われれば彼の答えは否だっただろう。

彼は血反吐を吐くような訓練をしてこの強さを手に入れた。才能はある方だったらしいがそんな些末なことは戦場でなんの意味も持たない。才能があるということはつまり「訓練しないと強くなれない」ということなのだから。ガキであろうとなんであろうと、強くなければ生き残れない。弱さは悪である。それこそが戦場の本質だった。

そんな中で育ってきた？にとつては戦いは神聖なものだし、どんな手段を使つても勝つということは当然のことだった。それを、ネギのような甘い理想論が真っ向から否定した拳句、まけたくせに偉そうにも抗議をしてきたのだ。彼の怒りはひとしおだろう。

「お前の言葉は軽いんや、ネギ・スプリングフィールド！！お前が何を目指しとるか知らんし、何をしたいんかもしらん！！せやけ

どなあ、人の戦いバカにした拳句、卑怯やなんやゆうて負けを認めへんやと!?己いつたいなに様のつもりや!!英雄の息子やったら何してもええとおもとんのかこら!!」

そして?はネギに向かってこういった。

「ああ、すまん。英雄の息子やからかいな。お前の故郷はさぞ何やっても笑って許してくれるやさしい大人たちがそろっとたんやろはっ。反吐がでんで」

そういつて、ネギをから手を離れた?はつばを吐いた後ネギに背を向ける。そして最後に明らかな嘲笑を顔に浮かべて、ネギの故郷を笑った。

瞬間、ネギの頭の中から恐怖が消え去り、すさまじい怒りの炎が燃え上がる。

思い出されるのはあの雪の日。自分の故郷の住人達が永久石化され動かなくなつた地獄の一夜……………。

「あやまれ……………」

「ああ?」

「ネギ?」

ネギから発せられた言葉に、?と姫は不思議そうに視線を向けた。

「スタンおじいちゃんや……………みんなに謝れえええ

ええええええええええええええええええ!!」

矜持と正義（笑）と地獄の一夜（後書き）

あ、あれ？ギャグ小説のはずだったんだけど……………。

戦いの果て・・・

ネギは意識を失った状態で暴れ続ける。

魔法の射手。白き雷。雷の暴風。風精召喚。武装解除。ネギが使えるおおよその魔法のすべてが？に向かって飛来した！！

「はあ！！なめんなっ！！」

しかし、？もこの程度ではやられない。ナギ譲りのバカ魔力によって作り上げられた、通常の威力よりもかなり高い威力を誇るネギの魔法を両手から射出される気弾によってことごとく撃ち落していく！！

「？！！千烈拳！！」

空中で花開く殺傷能力抜群の花火たち！！

姫はその光景を見て慌てて虚空瞬動を使いネギのところへと飛んできた。足元には？と同じように車輪がついておりそれが姫の飛行を補助している。

「ネギ、おちつけ」

姫がそういつて捕縛用の気弾を放つが……………

「……………！！」

ネギは全身を覆ったバカ魔力でその気弾を消滅させる！！姫の気

弾に込められた気をネギの魔力が上回ったのだ!!

「うっとおしい……………」

自分の気弾がはじかれたことに若干機嫌が悪くなった姫はその両手に膨大な気をためていく。明らかに殺傷目的の高密度の気であったが今のネギにはこれくらいしても大丈夫だろうと高をくくって姫は容赦なくその気弾を放とうとした!!

「って、姫ちゃんあかんよそんなことしたら!？」

「!?!？」

しかし、姫の攻撃は後ろから伸びてきた手に両手をつかまれることによって止められた。

「ふむ。僕は別にかまわないが？」

「犬神君余計なこと言わんとって!？」

姫の後ろに立っていたのは？たちと同じような方法で飛行を行う、犬神とマリーだった。黒い笑みを浮かべながら『殺れ』といわんばかりに首をかき切るしぐさをする犬神に、真理のハリセンによるツッコミがヒットした!!

「ああ!!犬神君!？なんや俺と勝負師に来てくれたんか!!」

そんな犬神たちを見て、ネギとの戦闘を一時中止しこちらに駆け寄ってくる？にいぬがみは少しだけ微笑み……………。

「話しかけるなコソ泥が。その程度のガキと拮抗した戦いしかできないようなしよぼいレベルの泥棒など………相手をする価値もない」

グサツ!?

犬神の言葉が容赦なく?の脳天を貫き、?の動きを一瞬停滞させる。

当然それを見逃すような状態のネギではなく、?の懐に入り込んだネギは雷の暴風を至近距離でぶちこんだ!!

「つつぎゃあああああああああああああああ!?!」

天高く飛んでいく?を見てゲルは再び毒を吐く。

「ライバルなどと思ったことはないが………残念だ」

? 関連での学園長の依頼がなくなるからやるうなあ………。犬神の言葉に隠された真意を正確に悟りながら、マリーは特に何も言わずに姫に説教を続ける。

「あのなあ姫ちゃん。あんな状況で殺傷能力の高い技使ったらアカンよ。ネギ君怪我したらどうすんの?友達傷つけたりしたらあとあと公開すんのは自分なんやで?」

「帝国での暴走した人を止める方法はあれだった」

「暗殺者時代のことは忘れてえや!?!」

ツッコミを入れてもよかったのだが、実は今は犬神にとある作戦が決行中だった。不用意に口を挟んで失敗すると、あとで犬神が怖いので今は自重する。

そして、作戦は実を結んだ。

「ちょ、ちょっとまったりいいいいいいいいいなあああああああああああ！！！」

天高く飛んだはずの？がいつの間にかこちらに戻ってきておりネギの懐を強襲！！その旨に片手で爪を突き立てひねりを加えながらネギを吹き飛ばす！！

「？破裏剣掌！！！」

すさまじい回転を加えられたネギはまるで砲弾のように吹き飛び時計塔の中にめり込む！！ラカンのオリジナルとは違い、幼く体の小さい？のそれは単体ではそれほどの力を発揮しない。そのため敵を遠くに吹き飛ばした後、固いものに叩き付けることで破壊力を底上げしているのだ。

「ちょっと弱者の気分をシュミレートしてただけや！！こっからはバリッバリの全開である餓鬼叩き潰したるさかいにそこで待つとけや！！！」

「いや、六重君！？その前にやりすぎ！！！」

マリーの必死なツッコミには耳を貸さずに？はネギがめり込んだ時計塔へと飛んでいく。犬神はそれを見てクイツとメガネを上げぼそりとつぶやいた。

ボロになったネギが横たわっていた……。

ネギ・スプリングフィールドVSスパルタン？……勝者、スパルタン?!!

……

……………そのはずだった。

「まだ……………だ……………」

？が完全に油断して背を見気ている時、ネギはヨロヨロと、しかし確かに立ち上がった！！

「負けるわけには……………いかないんだ！！」

ネギの体はボロボロだった。魔力の暴走によって魔力は限界まで消費され、体に至っては骨折や筋肉の断絶を起こしているかもしれない。顔も無残なくらいに腫れ上がっており、見るに堪えないほどの無残な状態になっていた。

立っていることすら奇跡……………そんな状態でありながら、ネギはそれでもあゆみを止めなかった。

自分のための戦いだったら今のネギはここまで食い下がることはしなかっただろう。彼はまだ十歳なのだ。負けて当然だし、重症とあっていいほどの怪我を負わされているのだから泣いたっていい。しかし、彼は立ち上がった。この戦いはもはや彼のためなどではなくバカにされた故郷の人たちのためなのだから……………。

「あやまれ……………」

「な！？」

ネギはボロボロで魔力も微弱だった。しかし、今回はそれが功を奏した。ネギが弱り切っていたため気配は薄くなってしまい、ネギが？のすぐ後ろに近づくまで？はネギの存在に気づくことができなかったのだから。

「謝ってくださいよお……………」

しかし、ネギの体には力が残されていなかった。最後の一撃の足しになればとねぎは右手に魔力を込めて？の体を弱弱しい拳で叩いた。

そして、この時事故という名の奇跡が起こった。

ネギが使える魔法は何も戦闘用の魔法ばかりではない。彼が使える基礎的な魔法の中には精神に働きかける魔法がある。何か使える魔法をもつろうとした意識の中で取捨選択してしまったネギは間違えて拳にその魔法をかけてしまった。

読心術という魔法を……………。

…
寸…寸…………寸…寸…

ネギは夢を見ていた。

煙が立ち上る血なまぐさい空間。真つ赤な夕日に無数の破裂音がこだましている。

「トウジ……………何をしている」

「いや殺してもうた人の弔いを……………」

そんな中ネギは一人の少年を見ていた。軍服を着たネギぐらいの金髪の少年。その手には刃渡りが異常に長いアーミーナイフと拳銃

が握られており、軍服は鮮血に汚れていた。

「なあ、中隊長。なんで俺はこんなこと世なあかんのかいなあ」

「ここが戦場だからだ」

少年の言葉に無精ひげを生やした軍人はそう答える。彼は何もかもにつかれたといった表情をしながら少年の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「何を考えているのかは知らんがこの程度のことです迷うなよトウジ。戦いなんて所詮はうすぎたいなものに過ぎない。特に戦場ではそうだ。不意打ち、だまし討ち、ブラフに張ったり。あらゆる手段を使わないと俺たちはここでは生き残れない」

「せやから戦いは汚くともその行為を恥じるなやろ？おのれの大切なもんを守るためにたたかっとるんやからそれを恥じるのは、戦って殺してきた相手への冒瀆やと………耳たこになるぐらい聞いたで」

「だったらそんな迷いにまみれた言葉を吐くな。次死ぬのはお前かもしれないんだからな」

最後にその言葉を聞いて、ネギは目を覚ました。

…
…
…
…
…
…

「大丈夫？」

「……………姫ちゃん」

ネギが目を覚ますとそこは犬神アンダーグラウンドサーチの中だ
った。

「?さんは?」

「もう帰った。あなたが眠りこけてからもう一日たっている」

「そう……………」

ネギはそういつて首だけを動かして窓の外を見つめる。ネギの全身には包帯がまるでミイラもかくやといわんばかりにまかれており首以外動かせないのだ。

「?さんに悪いこと言ったな……………」

あの夢はおそらく?の過去なのだろう。そして、あんな過去を持つていた彼が、自分の言葉に何を感じたのかネギは大体わかっていった。読唇術のおかげで理解できていた。

それはあれだけ怒るのも無理ないよねえ……………。と苦笑交じりにつぶやくネギに、姫はぼそりと声をかけた。

「ネギ。?から伝言」

「なに?」

まさか、あれだけ怒っていた?から伝言とは……………。ネギは少し不安になりながらも姫の話の話を黙って聞く。

「あなたの過去を見たって」

「!?!」

「『雪の日』……………大変やったな。まあ、俺もいいすぎたわ。悪かった』だって」

ネギはしばらく絶句していた。おそらく朦朧とした意識の中で読心術を使ったため、本来一方通行のはずの読心術が変質し、両方の記憶を交換してしまったのだろう。

あの雪の日の記憶を見られてしまい、若干慌てるネギに姫はのんびりと話しかける。

「ネギ……………負けちゃったね」

「……………うん」

「でも？もゲルには勝てないんだよ？」

「世界にはまだまだ上がいるってことだね……………」

二人の間に沈黙が流れる。姫は黙ってネギを見守り、ネギは黙って何かを考えていた。

そして、

「姫ちゃん。僕……………強くなるよ。？さんに負けないぐらいに。そしていろいろと学ぶ。本当の正義はなんなのか。何が正しくて何が間違っているのか」

「……………」

「今回？さんは間違ったことは何一つ言っていないかった。でも、僕は僕が今まで信じてきたことのすべてが間違이었다とはどうしても思えないよ」

「……………」

「だから僕。もっといろいろな話を聞いて勉強して、よく考えて、？さんみたいな自分の正義を見つけてみせる」

「そう……………」

姫はそれだけ言うと、ネギの目を覆うように彼女が来ていた服の長い袖をネギの顔にかぶせる。

「私もまだ自分の正義見つけていないの。育ちが悪かったから、いまだに自分が道具だって感覚が抜け切れていないんだ」

「僕としては姫ちゃんの過去が気になるよ……………」

姫はそのネギのツツコミをスルーして話を続ける。

「だから、ネギと一緒に探すよ自分の正義」

「……………うん」

姫の言葉を聞き、ネギは少しだけ微笑んだ。ようやく、すべてのスタートに立てた気がする。そう思いながら。

「でも今は寝ないとね……………」

「そうだね」

ネギは最後にそう言って笑うと小さく寝息を立て始めるのだった。

……
……
……
……
……
……

「ふお……………これはいったいどういうことじゃ？」

「どういふこともーいうこともあらへん！！俺も一枚かませるよーてんねん」

その頃の学園長室では学園長とヘアバンドを巻いた金髪の少年が話をしていた。これが六重トウジの昼の姿である。

「あんなおもしろそうなガキほっとけるかい。格闘に関しては俺がみっちり鍛えたるわ」

「まあ、君が彼の師匠をしてくれるならそれに越したことはないが……………」

近右衛門は何かをうかがうように、来客用の机でコーヒーをすすっている犬神に目を向けた。

「もちろんこちらとしては何ら問題はありません。こちらの報酬が減らなければですが」

「俺は依頼料なんていらんで。俺が育てたいおもただけやからな」

ふむ。だとしたら出費はゼロじゃしな。プラスマイナスでいうと+じゃろつし……………もんだいなの？

最後にそう考え納得した近右衛門は、六重にしっかりと頭を下げた。

「ネギ君をよろしく頼むぞ。六重殿」

「おう！…まかときい！…」

こうして、ネギに一人目の師匠がつくのだった。

戦いの果て・・・（後書き）

ゲルが空気だ！？

というわけでスパルタン？編完です！！

ゲルはおそらく計画通りとほくそえんでいることでしょう。

今回はシリアス要素が強かったですが、次回は吸血鬼へんは（笑）要素強めでお送りしたいと思います！！

はたして明日菜は従者になるのか？ゲルはいつたいどう動くのか？師匠になった？は？マリーのツツコミは次回こそ冴えわたるのか！？

こつごきたい〜（^ー^）ノ

さくら通りの吸血鬼

「はあはあはあはあ!!」

出席番号16番、佐々木まき絵はやるの闇をかける。

「なに………なに?なに!?!あれは!!」

運動部に所属していて体力は一般人以上に保有しているはずの彼女が荒い息で、そうつぶやく。敵はかなりの強者のようだ。

麻帆良を闇がつつむ中、彼女と追跡者の戦いは続く。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

夜の闇の中。麻帆良の建物の屋根に立った一人の老人がその光景を見ていた。

いま、少女が足をもつらせて倒れてしまったところであり、襲撃者は彼女の実に覆いかぶさろうとしている。

「ふむ……………」

老人はそうつぶやくと、スツとその場から姿をけし!!

「失礼。逢引にはいささか強引が過ぎるかとおもいますが？」

「!?!」

襲撃者に襲われていた佐々木まき絵の目の前に出現!襲撃者を蹴り飛ばし彼女から引き離れた!!

「マスター!?!」

襲撃者の後ろに備えていたロボットのような耳をした少女が襲撃者に駆け寄っていく。

「安心しろ。障壁のおかげで大事ない!!」

襲撃者はそういうと同時に、マントから顔をだし鋭い目つきで介入してきた老人をにらみつけた。

「確か……………あの外道のところの執事だったか？金が絡まないと貴様らは動かないんじゃないのか？」

「あいにくと、あなたのやろうとしていることは現在面倒を見ているネギ様に深く関係しそうなことだったので、主人から介入しろと言われております」

老人……………克蘭レスはそう答えながら、おびえ切っていたまき絵の首筋に手刀を叩き込みその意識を刈り取る。

「あと、学園長からあなたのクラスメイトへの魔法ばれを極力阻止するようにも言われているので」

克蘭レスはそう答えながら、まき絵をやさしく横たえ自分の執事服の上着を重ねる。その動きの一つ一つは完璧に洗練されており、優雅に、美しく、気品あふれるしぐさであった。それだけで勉強になると襲撃者の従者である絡繰茶々丸は感心しながらも、主を守るために前に出る。

「やめておけ茶々丸。お前ではこいつには勝てない」

しかし、彼女の主はそういつて彼女を端にどけた。そんな主に言葉に茶々丸は驚愕する。

自分は主を守るために作られた戦闘用ガイドノイドだ。一通りの武術はAIにインプットされて
いるし、拳銃一丁でも一流の魔法使いとそこそこ渡り合える程度の実力は持っているのだ。

しかし、そんな彼女にも勝てないと彼女の主は言った。つまりこの老人が一流以上……………全盛期の彼女の主と並び立つほどの強者ということを示している。

「なるほど……………あなた直々にお相手してただけるとは……………。光栄の極みではありますが、はたして力の大部分を封じられたあなたに、私を倒せますかな？」

「無理だろうな。正直勝てる気は全くしない。あの合気鉄扇術の爺といい、お前といい、日本には面倒な気力使いが多すぎる……………だから」

瞬間、彼の目の前に立っていた襲撃者は塵気楼のように掻き消え、そしていつの間にか克蘭レスの後ろへとやってきていた彼女は克蘭レスの背中に氷の魔法を叩き込んだ！！

「多少の不意打ちぐらいは許してもらおう。この計画……………失敗するわけにはいかんだ！！」

氷の魔法によって立ち込める白い煙。その中から響き渡る声には必死さがにじみ出ていた。しかし、

「いやはや、おみごと。すっかり騙されてしまいましたよ」

「「!」」

克蘭レスはいつの間にか茶々丸の後ろに立っておりぱちぱちと手をたたいている……。まるで襲撃者の努力をあざ笑うかのよう……。うに……。

「しかし、不意打ちは我々忍びの専門分野にございます。次からは違う方法をとることをお勧めいたします」

「き、貴様!?! いったいどうやって!?!」

確かに手ごたえはあつたはずだ!?! 襲撃者が慌てて魔法を叩き込んだ場所に目を向けるとそこはいつの間にか白い煙が晴れており、氷漬けになった何かが姿を現していた。

それを見て襲撃者は絶句してしまふ。

そこで氷漬けになっていたのは……

……まるで神の手によって作られたかのごとく、克蘭レスに精密に似せられた、等身大の木像だった!!

「って、なんだこの無駄なクオリティ!?! 普通に丸太とかでよくないか!?! なんて木像!?!」

「マスター………今はそれどころでは」

「くう!?!」

突っ込みどころ満載な克蘭レスの忍術に翻弄された襲撃者を、慌てて駆け寄ってきた茶々丸がいさめる。襲撃者は齒噛みしながらも懐からフラスコを取出し、地面へと叩き付けた。

「今日のところはこれで勘弁してやる！！覚えていろよ！！」

たたきつけられたフラスコからは凄まじい量の煙が飛び出し克蘭レスの視界を奪う。そして煙が晴れた後にはもう誰もいなかった。

「いやはや、やはり彼女は素晴らしいまでの……………」

克蘭レスはそういったところで口をつぐみ、横たわっている佐々木まき絵へと歩み寄った。どんな小さな痕跡も残すのは危ない。彼女を寮に送り届けてこそ彼の任務は完成されるのだ。

克蘭レスは最後に襲撃者が消えたところを見て最後の言葉を呟く。

「素晴らしいまでの三流悪役でしたな。あんな捨て台詞いまでき子供向けの特撮でも聞けませんぞ」

いいものを見た。と何故か満足げな彼に、遠視を使って様子を見ていた襲撃者が、ブチコロス！！と喋り舞い戻ろうとするのを茶々丸が必死に押さえ込んでいたらしいが、そんなことは彼は知らない……………。

さくら通りの吸血鬼（後書き）

始まりました。エヴァンジェリン編。

ほかの二次創作とは違いギャグテイスト強めでお送りしたいと思います！
います！！

克蘭レスの能力も明らかになったことですし、ゲルと克蘭レスにいじり倒してもらいましょう！！

え、だれをだって？もちろん、あのエターナル口……………。

超・・・・・・・・・・・・・・・・

「三年A組!!」

「……………ネギ先生ーっ?」

「朝からみんな元気やなあ」

「アホなだけだ」

「千雨……………」

朝から辛辣なセリフを吐く親友に雑感顔をひきつらせながら、マリーは苦笑をうかべた。

あれからいろいろあり、今日から三年生。最近ではネギの格闘に指導に六重がやってきたり、たまくに明日菜が泊まりにやってきたりと、犬神アンダーグラウンドサーチは賑やかな生活を送っていた。

そして、何とか無事進級で来た明日菜とマリーは、正式雇用されたネギのもとでふたたび生徒生活を送ることとなった。

「千雨ええ加減ならたらええのに。そんな悪いクラスでもないやろ?」

「うつせ。私は常識なしな奴らが嫌いなんだよ」

「あははははははは……………」

微妙に否定できないどころか、魔法使いがいるこの学園で常識を求めるのがむしろ難しいことなのだが、千雨は一般人なのでそんなことは言えない。

なので、マリーはあいまいに笑ってごまかすことしかできなかった。

「大体、ガキが先生なんてありえねーよ。労基法はどこ行った？」

「いやまあなあ……………でも最近はやつとこさ仕事に慣れてきたんか、かなり先生らしくなって来とる……………」

「今すぐ服を脱いでください!!」

「……………」

そんな二人に聞こえてきたとんでもないセリフに、マリーと千雨は半眼になり……………。

「先生らしく?」

「ごめん千雨。言いたいことわかるけどチヨイ待つといて」

明らかな嘲笑を浮かべる千雨に、そう答えてマリーは即座に教団までダツシュ!!ネギの顔面にハリセンを叩き込み彼のメガネを吹き飛ばす!!

「おのれは何処のセクハラ教師やあああああああああああああ
あ!!」

「ヒデフツ！？」

美しく弧を描いて吹っ飛んでいくネギを見て、クラスメイト達は思わず拍手を送った……………。

………
………
………
………
………

「さくら通りの吸血鬼？」

さて、先ほどのネギのセリフが身体測定を受けるためだと知った
マリーたちは、速やかに気絶してしまったネギを追い出し（ちよつ
と強く殴りすぎてしまったかもしれないとマリーは若干後悔した）、
マリーたちは服を脱いでいた。

そんな時に聞こえてきたのが佐々木まき絵の夢の話である。

「なんか、私は寮に帰るに桜通りを歩いていたんだけどね、突然ぼろ
くて黒い布を羽織った小さな陰に襲われたの……………そして
ら突然現れたすっごいおひげのおじさんが助けてくれてねえ」

「ゆ、夢やんなあ？」

まき絵が手で示したひげの形に、あまりに思い当たりすぎる自分
の知り合いを思い出しながら、マリーはとりあえずそう尋ねてみた。

「うん。ゆめだよ。だって私目を覚ました時には寮についていた
もん。どうやって帰ったかがどうしても思い出せないんだけどねえ」

「……………」

もうバリバリ本当の話臭い、まき絵のセリフにマリーは思わず顔
をひきつらせた。

「最近有名やんなあ。吸血鬼のうわさ」

「まき絵もその話聞いたからそんな夢を見たんじゃないか？」

「うん。そうかも」

友人のアキラと亜子にそう言われて苦笑いを浮かべるまき絵。と
そして、まき絵が測定のためにその場を離れると同時に、近くに控
えていたエヴァンジェリンを急襲。念のため確認を取りに行く。

「なあなあエヴァちゃん。さくら通りの吸血鬼ってエヴァちゃんち
やうよな？」

「……………だっただろうした？」

あれ、なんか若干機嫌悪い？

なぜだか親の仇でも見るような視線で自分を睨みつけてくるエヴ
アに驚きながら、マリーはそれでもめげずに話しかけてみる。

「いや、別にどーもせえへんけど……………ネギ君になんかするん
やったらやめといたほうがええで？犬神君が黙ってへんやろうし…
……………」

マリーの真剣に心配した表情をみて、エヴァはため息をつく。

これはどうも知らないな……………。一応友人とは言え
マリーも犬神の一味の一人ではあるので、何らかの妨害をしてくる
かと警戒していたのだが、この口ぶりだと犬神とあのむかつく執事
が動いていることは知らないようだ。

そう結論付けたエヴァは警戒を解き、いつもの口調でマリーに話しかけた。

「ふん。別にその程度ならどうとでもなるな。忘れたのか安川。私は伝説の吸血鬼だぞ!!」

「封印されてるんちゃうんかい!?!」

「その封印ももうしばらくでとける……………」

「?????」

マリーはしばらく不思議そうな子をしていたが、

「ああ!!封印解く方法を学園長が見つけてくれたんやな!!よかったやん。これでようやく卒業やな!!」

「ああ……………うん。まあ、なあ?」

ちよつとだけ言葉を濁してしまうエヴァに気づかず、マリーはここにこと笑いながらエヴァの肩をたたいた。

「ああ、でも封印解けても卒業するまでは麻帆良にいてや。一緒に修学旅行にいこ」

「ああ、わかってるよ」

若干顔を赤らめながらそう答えるエヴァにマリーは満足げにいなづいた後、身体測定へと向かった。

「よろしかったのですか？」

「ふん。いまさらともだますことに罪悪感を感じるような柔い精神は持っていない」

背後に控えていた茶々丸にそう聞かれて、エヴァンジェリンは鼻を鳴らす。そして、冷たい声音で茶々丸に守備を訪ねた。

「そちらはどうだ？」

「博士に頼んで軍事研の方から、ミサイルランチャーなどの重火器を譲り受けました。迎撃の準備は万全です」

「そうか……………」

エヴァはその答えに満足げにうなづき、不敵な笑みを口元に浮かべる。

「犬神ゲル。今宵も邪魔をしに来るというのなら、いいだろう。完膚なきまでに貴様をたたきつぶす」

戦争だ……………。エヴァのその小さな呟きはクラスメイト達の騒がしい喧騒にかき消された。

…
…
…
…
…
…

「吸血鬼だと？」

「そうです!!」

その晩の犬神アンダーグラウンドサーチにて……。じぶんの教え子たちから吸血鬼のうわさを聞いたネギは燃えに燃えていた。

「生徒の安全を守るためにもパトロールをするべきだと思いませんか!！」

「思わないな」

しかし、その熱意は犬神の一言によってわずか数秒で粉々に打ち砕かれた!！」

「……………即答!？」

返答に0.1秒もかかっていない犬神の言葉にネギは一瞬フリーズしてしまったが、そこはなれば何とやら。何とかツツコミを返すことに成功する。

「ふん。やるようになったではないか」

「いやそんなことで感心されても困るんですけど……………。僕犬神さんから教えられたことってツツコミのことしかないですよね? ツツコミスキルだけがガンガン上がっていつているような気がしますよ!？」

「世の中に一番必要な技術がスキルアップしてよかったじゃないか?」

「ツツコミがですか!？」

マリーバリのツツコミを披露しながら犬神に食って掛かるネギ。物覚えはええんやけど、その才能の果てしない無駄遣いやなあ。と若干呆れながら食器を洗い終わったマリーはその会話に参加した。

「ネギ君。ネギ君。思いつきり話ずれとるで？」

「はっ！？そ、そうでした！！どうして吸血鬼退治しないんですか！！」

マリーにそういわれてなんとか自分を取り戻すネギ。そして犬神はいつものようにメガネを光らせながらネギのこう返した。

「きまっているだろう……金にならないからだ！！」

「力強い返事ありがとうございます……」

いや、もうわかっていましたけど……。若干へこみながらそれでもネギは食い下がる。

「でも犬神さん。もしかしたらマリーさんが襲われるかもしれないし、犬神さんも危なくて夜に依頼こなすことができなくなりますよ？」

「ネギ……」

しかし、犬神はいたって平然とした表情でネギの肩に手を置き、傲然と言い放った。

「正直……超・どうでもいい」

「超……！？」

いつぞやのセリフと丸かぶりな犬神答えに愕然とするネギを後目に、犬神は肩をすくめながら玄関へと歩いていった。

「正直吸血鬼が暴れようが、超知ったこっちゃないし、超どうでもいい。学園長の話では今のところ死者も出ていないようだし、実害もない。だったらちよつと大きめの蚊に噛まれたと思って割り切ればいいではないか」

「いや、蚊と吸血鬼はだいぶ違う思っんやけど？」

というマリーのツッコミを意に介さずに犬神は玄関で靴をはき外出の準備をする。

「行くぞ。克蘭レス」

「御意」

「あれ、どっかいくん？」

そういつて玄関のドアを開けた犬神にマリーはそう尋ねた。今夜は依頼が入っておらずのんびりとする予定だったと思っのだが……

「少し用事があつてな。人探しをする予定だ」

「ほな私もついて行ってつたおか？」

「あ、だったら僕も。ついでに見回りもしたいですしー!!」

それを聞いて一応は好意で手伝いを申し出る居候と探偵助手。

しかし……。

「別についてきてもいいが………僕はこの依頼の間始
終不機嫌だぞ？」

「え……………」

「始終？」

「初めから終わりまでだ」

その言葉にマリーとネギは顔を見合わせ……………。

数分後。

「「あはっ？いつてらっしやーい」「」

姫を伴い笑顔で犬神を見送った。

「八つ当たりとかされとーないしー！」

「軟弱な奴め……………」

「行ってまいります……………ペコリーニヨ」

「「ニヨ！？」」

克蘭レスの不思議なお辞儀にツツコミを入れる、ネギと姫……
……………そして犬神たちは麻帆良の闇へと足を踏み出した。

少年探偵VS吸血鬼

「く、くそ！？な、なんなんだいったい！！ただの噂じゃなかったのかよ！！」

「ふふふふ。そう思っている奴がいるからこそ私の獲物は減らないんだ。現代人の鈍さに感謝だな」

エヴァはそういいながら一人の男性を追跡していた。今夜の獲物は彼である。本当ならネギの来栖の人間を襲い技とねぎに気づかせるといふ手法を取りたかつたのだが、昨日の一件でその方法では犬神がやってくるということは理解した。

だから彼女は実験を開始したのだ。

ネギの周りの人間以外を襲うに当たり、あいつはきちんとやってくるのか？

来ないなら、少し手間はかかるがまだネギを自分のもとに誘導することは十分にできる。だが、あいつが昨日から私の行動のすべてを封じるつもりなら……………。

「戦争するつもりだ。犬神ゲル」

「ふん」

そして、奴はやってきた。昨日のひげ紳士を伴い奴は縦の喪の屋根に立ちはるかな高みからエヴァを見下ろしていた。

「来てしまったか………………。犬神ゲル。今夜お前の命は尽きることになるぞ」

重火器を無数の構えて戦闘態勢を取る茶々丸。エヴァもマントから無数のフラスコと試験管を取出し犬神に向かって構えを取った。

だが………………。

「おい、その幼女。邪魔だ。どけ」

犬神の口からはとんでもない言葉が発せられるのだった。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「はあ!？」

いきなりの用無し宣言に啞然とするエヴァと茶々丸。しかし、そんな彼女たちを放置して状況はどんどん進んでいく。

「ちくしょう!! 噂じゃなかったのか!? あんな怪物が襲ってくるなんて聞いてねえぞ!？」

「怪物とは失敬だな。僕のようなかわいい少年を捕まえて……………」

「ちよ、ちよっと待て!! お前私たちにビビって逃げていたんじゃないのか!？」

犬神を見てちよっと人間がしてはいけないような恐怖にゆがんだ顔をする男に、エヴァは慌てて話しかけたが……………。

「え、あ、だれ？」

気づかれてすらいなかった……………。ちよっとだけへこ

神に、男の顔はさらにひきつり……………。

「僕は僕の仕事を果たした。あなたにも、自分の義務を果たしてもらおうか？」

「あわわわわわわわわわわわ……………」

もつめつたに聞けないような典型的な慌てふためいた声を上げる男。そんな二人の様子を見て……………。

「なあ、茶々丸。あいつをだましてまでこの場に臨んだ私の覚悟はどうなるんだ？」

「マスター。気を確かに」

色々と理不尽な状況にエヴァは嘆く。

「というかお前たちは何しに来たんだ？そいつは私の獲物なんだが……………」

とりあえず状況把握がしたかったため犬神にそう尋ねるエヴァ。すると犬神はどす黒い怒気をにじませながらこう答えた。

「こいつは僕の元依頼者だ」

「元？」

「成功報酬を払わずに僕から逃げ出そうとした身の程知らずのな」

「ああ……………なるほど」

男の命をどぶに捨てるような行為、若干呆れながらエヴァは身を引いた。

金がらみの話で犬神にケンカを売るほどエヴァは考えなしではなかった。犬神は金の話が絡むと20倍界王拳を使えるようになる男である。

「いや、マジで勘弁してください！！依頼料はきちんと払いますから！！」

最終的に男は泣きながら土下座した。生まれて初めて見る男の本気の土下座にエヴァは若干引いてしまうが、犬神はいたって冷たい瞳で男を睨みつけ続ける。

「逃げたくせに？」

きゅぴーん！！犬神の目が深紅に輝き魔法世界ムンドゥス・マギクスの怪物みたいな殺気を放ち始める。

当然男は恐怖におびえがたがたと震え始めるが、ここで口を閉ざしたら終わると理解しているのか口だけはクルクルとよくまわりながら言い訳を紡いでいた。

「いや、なんとというか！？今不況だし、株でミスっちゃったりパチンコで大負けしたりしちゃって……………」

「いや、完全に自業自得だろそれ！？」

訂正。言い訳どころかぼろが出まくりだった。

「僕には……………」

そして、犬神は男の言い訳をさえぎりどす黒い言葉を解き放つ！！

「嫌いな人種が七億ほどいるんだが」

「七億!?!」

「人類の大半が嫌いではないか!?!」

男とエヴァのツツコミを無視して犬神は話を続ける。

「その最たるものが……………貧乏人と、けち臭い金持ちと……………」

そして、目元に影が入りその向こうから、狼のような人殺しの視線が男に対して向けられた!!

「謝罪で自ら、許しを請うものだ」

そして決め台詞。

「ドあつかましいわ!?!」

「ごもつとも!?!」

「うをお!?!」

男はそういいながら飛び上がり、何故かエヴァすらも飛び上がった

た。

「だがお前にとっては幸いなことに、僕は私情で仕事はしない」

「常に私情でしているだろうが!!」

主に金のために。

エヴァのツツコミを華麗にスルーし犬神は克蘭レスに命じて男を引きずっていかせる。

「金がないなら別のもので返してもらおう。よかったな。この世には金銭以外にも労働で支払う対価があつて」

「な、内臓系は嫌ああああああああああああああああああああ
!?!」

「失礼な。うちはそんな闇金テイストではない」

「おまえ、自分の顔見たことがあるか？」

そこで犬神はようやくエヴァのほうを向き一言。

「あれ?いたのか?」

「ずっといたよ!!」

ようやく本題である。

ちなみに……………。

「あの男はどこのに連れて行ったんだ？」

「なあに。ちよつとうちの地下室に連れて行ったただけだ」

「地下室？ものすごい内臓系の臭いがするんだが？」

「だからうちは闇金ではないといったはずだ。地下室にあるのはただの……………」

「ただの？」

「人力発電機だ」

「……………そういえばマリーが言っていたな。うちの生活費では電気代だけが見たことないって……………」

「うちはほら？エコ発電だから」

「ずいぶんと人に厳しいエコだな……………」

……………
……………
……………
……………
……………

「それで？お前はいつたい何がしたいんだ？」

「私の目的はただ一つ。この呪いの解呪だ」

夜の闇の中、犬神とエヴァンジェリンが殺気交じりの視線を交換していた。

犬神はひどく鬱陶しそうに。エヴァはかなりの怒気をはらんで。

「それは困るな。大方あの千の呪文の血族のあいつの血を使って魔力を回復したうえで力技で粉碎しよという考えなのだろう？」

「察しがいいな」

「エターナルロリの考えることなどすべてお見落とした」

「どつちなんだ！！あと、その呼び方はやめろ！！」

好きどころになったわけじゃないんだよ！！

エヴァの魂の叫びを聞きながら茶々丸は犬神にいじられるエヴァンジェリンを記録していく。

殺気はあっても緊迫感はかなり欠けていた……………。

「まったく最近の吸血鬼はこれだから困る。昔の吸血鬼はトマトジュースを飲んで血液の代わりにしたんだぞ。昔の先達たちを見習い仲良くやっていこうとは思わんのか？」

「そんなギャグ漫画の住人達と一緒にするな!?あと、私に呪いをかけた奴の息子じゃなかったら、私だってもう少し友好的に接してやっただわ!..!」

「できないことは口にするな」

「^{ハナ}最初から全否定!?!」

「マスター。話がずれています」

「くう!?!」

犬神のイジリマシンガントークにちよつとだけ載せられてしまったエヴァは悔しそうに歯噛みをする。そのすがたはまるで.....

「そう。一昔前の魔女っ娘物の敵役みたいな.....」

「お前たちはどうしても私のこと三流悪役にしたいのかああああああああああああああああああああああああああああああ!?!」

エヴァの絶叫が夜の麻帆良に響き渡った。

「まったく。突然叫びだしおつて。ご近所迷惑だと思わんのか？」

「だれの……………せいだ……………」

「マスター。のど飴です」

色々と呼びすぎてしまい、のどを嚔らしてしまったエヴァは肩で息をしながら座り込み茶々丸のかいがいしく世話をしてもらっている。

「それで、お前はいったいどうしてほしい？ギャグ補正でそろそろのども治っただろう？」

「コマ割りが無いから不可能だバカ……………。私とぼーやを戦わせる。私が勝ったら奴の血を吸わせる。その代り私が負けたらあのぼーやの修行を手伝ってやる」

「却下だ」

犬神はそういってさっさと踵を返して、自分の事務所へと戻ろうとした。

「一応聞いておくが……………なぜだ？」

「僕の依頼はあいつを育てて一人前にすることだ。おまけに昨日のお前の行動を見る限り、お前は自分のクラスメイトを使ってあいつを追い詰めようとしているのだろうか？　だったらそれは看過できない。あのクラスへの魔法ばれの阻止も依頼の中に含まれているからな」

「そうか……………なら……………」

戦争だ。

エヴァがそうつぶやき、背中を向けている犬神に向かってフラスコを構える。犬神もそれに反応したのかぴたりと歩みを止めエヴァのほうを振り向いた。

「初めに言っておくぞ。現状僕は確かに克蘭レスには勝てないが、負けもしない。昨日あいつとの交戦を控えた貴様らが僕に勝てると思うのか？」

「貴様こそ。私たちが今日の間は何の対策も講じていないとでも思ったのか？」

エヴァと犬神の魔力と気が高まりあいぶつかり合う。ぎしぎしと空間が歪みあたりに暴風が吹き荒れ始める。

そして……！

「あの、犬神様」

「……………なんだ。茶々丸とやら」

「おい茶々丸!？」

二人の戦闘をさえぎるように、茶々丸が二人の間に入りいぬがみに話しかけた。

「安心してくださいマスター。私に妙案があります」

「妙案だと？」

「犬神様のデータはすべて今日の間に入力しておきました。おそらくはネギ先生との戦闘を許可していただけかと……………」

…

「はあ、そんなことができるのか!？」

エヴァの言葉に深くうなづき、茶々丸は犬神に向かってこう言い放った。

「犬神様。ネギ先生と戦わせていただけのそれなりの報酬をお支払いします」

「茶々丸……………いくらそいつが金の亡者でもさすがにそれは……………」

無理だろう? エヴァがそう言ってため息をつきかけたとき!!

「さて、具体的な話をお伺いしましょうか」

「おちたああああああああああああああああああああああああああああ!？」

まさかまさかの陥落だった。ちなみに、犬神の目は『¥』になっている。

「なんだったんだ。私の苦勞と覺悟はいつたいなんだったんだ」

「ああ、マスターがあんなに感情の発露を……………」

思いつきりへこんだエヴァンジェリンを茶々丸が無表情のまま記録し『ますたーの成長記録』というファイルに保存されたことをエヴァンジェリンは知らない。

「ふっ……。腕を上げたな安川」

「いや、どこの漫画のまねしとんねん！？全然にあってへんよ！？」

「むっ。失敬な奴だなそこはかとなく湧き出ているだろう？僕の……お金が大好きだというオーラが！！」

「そんなん湧き出さんでええわボケ！！」

再びのツツコミによやく満足したのか、犬神は地面に転がったメガネの回収しそこについた誇りを吹き払った。

「さて、次の依頼の話だ」

「満足したんちやうんかい！！」

もう話が進まなかった……。

「あ、あの……犬神さん？吸血鬼にあつたんですか！？」

閑話休題がようやく終わり、まともに話すことになった犬神一行の会議はネギの第一声から始まった。

「無論だ。コンビニでトマトジュースを買っているところに出会ってな。最近のカゴメの野菜ジュースにはまっているといっていたな」

「ま、マジですか！！」

「大マジだ！！」

「思いつきり嘘っぱちゃんか!!」

話を進める!!

「ほんで、その吸血鬼さんはいったい誰やったん？ やっぱり外部からの侵入者とか？」

「いや。あの封印された吸血だったよ」

至って平然と、きつぱりという犬神に、マリーは思いつきり縦線を入れる。無論犬神はマリーがエヴァンジェリンと友人なのを知っているわけで……。

「いやいや……そこは躊躇おうや！？ 仮にも私の友達が私をだましてまでなんかしたがってんねんで!! おしえんの少しはためらうやろ!？」

「何を言っている？ そんなもの躊躇って何になる。奴がここ最近の騒動を起こしていたのは事実だし、お前に隠したところで結果が変わるわけでもない。だったら教えることを躊躇う理由がどこにある？」

「うっ」

至って正論。犬神の言葉にやや面を喰らいマリーはひるんだ。当然と言えば当然のことだった。本当に外部から吸血鬼が入り込んでいるなら麻帆良の魔法先生や魔法生徒が黙っていないだろう。なにより深夜にあのダイナマイトバカの大砲級拳銃の轟音が響き渡っているはずだ。それが無いということは、つまりは内部犯。それも学園長が手綱をとれないほどの実力者だということ……。

「はあ……。まあ、薄々感じつつたけども……。『お前に真実を知る覚悟があるか?』とか、そういうセリフがあってもよかったやん?」

若干ふてくされたマリィ。犬神との間に緊張が走り若干のシリアスさが……。

「KOKUGO?」

し、シリアスさが……

「NO!! 誰が古き良き日本を学べゆーた!？」

シリアスさが……出るわけなかった。

まあ、そんなこんなでエヴァがマリィをだましたことは平然と流されてしまったが、そんなことはどうでもいい、というかよく知らないうちに命の危機を迎えた少年は見事に置いてけぼりを喰らったわけで……。

「いやいや!! 二人とも何の話をしてるんですか!! と、とにかくその吸血鬼さんをつまえたらいいいんですよね!?!? どんな人なんですか?」

「ん? なあに。ただの闇の福音だ」
ダーク・エヴァンジェル

「実家に帰らせてもらいます」

「あきらめんのはやっ!?!?」

どこから取り出したのか風呂敷を担いでどこかに行こうとするネギに容赦ないハリセンの一撃。犬神アンダーグラウンドサーチに來てから自分では逆立ちしたって勝てない存在がいると知ったネギ。そのため世界の広さをいち早く知ったはいいが、あきらめ癖がついてしまっていた……。

「いやいやいや!! 無理ですって!! 勝てないですって!! 死んじやいますって!! 相手はあの闇の福音ですよ!!」
ダーク・エヴァンジェル

「なんや、エヴァちゃんって、そんな強いん？」

実はマリー、エヴァの本当の実力……というか全盛期の實力というものを全く知らなかった。もともと魔法使いとは若干遠い父お持つ彼女。しかも、旧世界の戦場ばかり渡り歩いていた父親を持つ彼女は魔法使いたちの常識にはかなり疎かった。

そのため闇の福音ダーク・エヴァンジェルといわれても《黒い天使?》としか聞こえないのだ。

「まあ、そうだな。全盛期なら僕も少々苦戦するかもしれないといった程度の相手だ」

「いや、めっちゃ強いやんか!! え、うそ、あの子そんな強かったん!?!」

驚愕の事実には愕然とするマリーに犬神は黒い笑みを浮かべた、

「まあ、ようするに……お前が友人を名乗るなど、三億年早いほど高みいる存在だということだな」

サクツ！？

マリーの七万のダメージが入った！！

物理的ダメージを伴った口撃を喰らい額から血を流し倒れるマリーにネギは泣きながら縋り付いた。

「だ、大丈夫ですかマリーさん！？気をしっかり持ってください！！」

「まあ、そんな冗談はともかく」

「冗談では済まない感じのダメージですけど！？」

閑話休題……？

「でさあ、犬神君。なんでまたネギ君がエヴァちゃんと戦わなあかんの？しかもエヴァちゃんって犬神君と同じくらい強いんやろ？そんなネギ君が負けるに決まってるやん」

そんな相手にネギをぶつけるなんて、ネギを育てるように言われた犬神としては最悪の選択肢のはずだ。現に克蘭レスさんが通りかかって証言してくれたが今まではちゃんと邪魔をしていたようだし……。

そんな風に考えたマリーの当然と言えば当然の疑問。それに犬神はいつものように眼鏡を輝かせて一言……。

「そんなもの……闇の福音から金が入るからに決まっているからに

ダーク・エヴァンジェル

決まっているからだろう!!」

「やっぱりかぁ!!」

もうある程度予想していたとはいえ、さすがに言い切った犬神にマリーのツッコミが決まる!!もうテンプレとっていい展開にちょっと苦笑をうかべながら、ネギはため息をついた。

「犬神君……君はもうちょっと人情とか優しさとかを覚えるべきやで?」

「SINZYOU?」

「NO!!なんでエンターテイナーやねん!!」

「あ、あの……僕は結局どうすればいいのでしょうか?」

もういつまでたっても話が進まない二人の掛け合いに、ネギはちよつと泣きそうになりながらそう尋ねた。当然である。このまま無駄な時間が過ぎていく内も、闇の福音が襲いかかってくるかもしれないのだ。その恐怖はひとしおだろう。

「ああ、安心しろ。契約で奴との戦いは次の満月。大停電の日と決められている。それまで奴はお前に指一本触れないし僕が触れさせない。そのあたりは安心しろ」

「そ、そうですか……」

ようやく安心できる要素ができたことに安堵の息を漏らしながらネギはため息をついた。これで次の満月の晩までは安心だと……。

だが……。

「でも犬神君……このままやとどっちかの依頼が履行できひんで？ネギ君負けたらただではすまへんやろうし、ネギ君守ったらエヴァちゃんとの契約履行できひんし……」

「安川。僕を誰だと思っている。僕はプロフェッショナルだ。無論どちらの依頼も完遂する」

「どうやって？」

「なあに。要はネギが負けなければいい」

その言葉と同時に、犬神はネギの両肩にポンと手を置いた。

「僕が次の満月までにお前を死ぬほど鍛えてやろう。次の満月の晩大停電によって奴の力のほとんどが元に戻るが、すべてが戻るわけではない。僕が全力で鍛えれば何とか奴と張り合えるようにはなれるだろう……」

声音はいつもと変わらずとても平坦。しかし、その眼は失敗は許さんといわんばかりに殺気が込められ、ネギを睥睨していた。

「さあ。特訓は今晚からだネギ・スプリングフィールド。お前に地獄を見せてやろう」

こののちネギはこう語ったという。

吸血鬼に殺されたほうがましでした……と。

依頼内容は？（後書き）

ギャグの切れが……。

ゲルの原作は巻数が少ないので、そろそろストックがなくなってきました……。

従者誕生

それから三日たった女子中等部のお昼休み……。

「で、あんなにネギがやつれているわけね……」

「まあ、そういうことや」

げっそりとした表情でふらふらしているネギを見て顔を引きつらせる明日菜。マリーはその言葉に苦笑を漏らしつつネギに向かって合掌した。

ゲルのもう特訓が始まってからまだ三日。そうまだ三日である。しかし、一度ゲルのしごきを受けたことがあるマリーだからわかる。

三日も受けているのによく持っているな……。それほどまでに犬神のしごきは苛烈なのだ。

別に犬神は特別な訓練をしているわけではない。ただの組手を延々続けているだけである。しかも犬神自身は攻撃しない。触れることができれば合格という破格の条件である。

それでも、犬神を捕まえるということは文字通り雲つかむようなことなのだ。

「だって、脚力だけで分身の術とか、ポールをつかんで横向きに体固定したりすんねんで？どこの雑技団やねん」

「それだけで金がとれるわよ！？」

「おまけに、見つけことすらできひんかったら飯抜きやし」

「虐待よそれ!？」

「え、失敗したら飯抜かれるんは当然ちゃうん？」

「マリーしつかりして!!そんなの当然、当然じゃないに決まっているじゃない!!」

ネギ(とマリー)の苦勞がしのばれる話である。

おまけネギと犬神の組手は麻帆良全土で行われるのだ。真夜中の麻帆良を駆け巡り探すことすら困難な犬神を見つけ攻撃を当てなければならぬというのはどれほど困難なことか……。

「ふふふ。私を倒すためにずいぶんがんばっているみたいじゃないか、ぼーやは」

「「!!」」

その時、突如後ろからかけられた声に明日菜とマリーはバツとふりむく!

そこには茶々丸を伴い今までの授業を屋上でサボっていたエヴァが立っていた。

「ああ、おはようエヴァちゃん」

「……マリー」

「お前……」

「え！？な、なんか間違ったこと言つた!？」

しかし、そんなことは関係ないとはかりに平然と挨拶をしてくるマリーに明日菜とエヴァは絶句する。

「おまえ……私はお前をだましたんだぞ？どうして怒らない？」

「え？ああ、なんや。そんなことかいな」

「そんなことって……」

お前たちはつくづく私の覚悟を踏みにじるのが好きみたいだな……。と、若干のため息をつきながらもエヴァは少し安心してこの学校に入ってから初めてできた友人のマリーに、敵意むき出しの視線を送られてきたら流石に多少の精神ダメージは免れなかっただろうから……。

「まあ、ネギ君殺されたら困るけど……エヴァちゃんそんなことせえへんやろ？」

「ふん。どうかな？私は悪の魔法使いだぞ」

「またまたあ。女子供は殺さへんゆーとつたやん」

「あんたたち……女子中学生が殺す云々連発するんじゃないの……」

若干どころか、百パーセント物騒さで構成された会話を交わす二

人に明日菜は顔に縦線を入れる。マリーあなたは常識人じゃなかったの？

「それに、私はエヴァちゃん信じとるしな」

「……そうか」

マリーの言葉に少し苦笑をうかべ、エヴァは物騒な空気を引つ込めた。

「ここは学校だ。わざわざ喧嘩を売るような態度をとることもないだろう……と。」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……」

「ちゃ、茶々丸さんってそんなキャラだったの？」

後ろで不穏な会話が聞こえた気がしたが……。エヴァは全力で無視する。

「それにしても……」

そこで、エヴァはようやく本題である人物に視線を戻す。

「頑張りすぎじゃないか？ ぼーや……」

「ああ、まあ、なあ？」

微妙に言葉を濁し視線をそらすマリー。そこには教室のドアに頭をぶつけうずくまるネギがいて……。

「あれでは私と戦えんぞ？」

「いざとなったらテンションホルモンを使っつて犬神君ゆーとったけど……」

「もってるのか!？」

「うっん?こっついたらあの幼女やったら面白い反応をするやろっつて」

「マスター落ち着いてください。まだ力は戻っていないでしょう?」

「離せ茶々丸!あの外道をぶち殺してやらねば私の気が晴れんだ!!!」

閑話休題。

「まあ、犬神君が言うには次の満月までにはお前が手も足も出ないくらい強くしておくから楽しみに待っている!やって……」

「ふん!!上等だボケ!!首を洗ってまっっているって伝えておけ!行くぞ茶々丸!!」

「はいマスター」

そういつてちょっと泣きそうになりながらその場を立ち去るエヴァたち。

「あれが真祖の吸血鬼?」

「ま、まあちょっと子供っぽいところがあるけどな……」

苦笑交じりに自分の友人を擁護するマリーに明日菜はため息をついた。

…
十
十
…
十
十
…

「で、どうするのよ、あんたは？」

「あははは……どうしましょう？今のままじゃ犬神さんに殺されてしまいそうですし」

その日の放課後、ネギとともに家路についた明日菜の質問に、ネギは苦笑交じりにため息をついた。基本的に自分のことを気にかけてくれる明日菜にネギは好意を持っていた。それはそうだろう。原作では明日菜はつらく当たってきたため初期のネギの心証は最悪もいいところだったが、こちらの世界には明日菜以上に滅茶苦茶をやってくる怪物がいる。相対的に明日菜への評価が上がるのは当然のことだ。

「パートナーでもいたら話は別なんでしょうけども……」

「パートナー？それって、この前あなたのお姉さんが手紙で言っていた？でもそれって要するに恋人探してみたいなもんなんでしょう？」

「はい。僕もそう思っていたんですけど、克蘭レスさんから聞いた話によるともともとパートナーとは後衛の魔法使いが呪文を唱える時間を稼ぐ前衛職のことだったらしいんですよ。そういった人と契約を結んで力を共有することで連携を取り戦いを有利に進めるというのが本来の魔法使いの戦い方だったそうで……」

「へえ……。でもそれって……」

「はい。前衛の方にはかなりの負担がかかりますから、僕みたいな素人の前衛を務めてもらうとかなるとかなりの実力者が必要で……」

「うちのクラスのメンバーは？かなりの実力者ぞろいだけど？」

「ゲルさんが黙っていないでしょうし、僕望みませんから……」

「そっか……クラスメイトは頼らないって決めたものね……」

じゃあどうする？もはや八方ふさがりといっていい状況に二人がうなりながら頭を悩ませ始めた時だった。

『ふふふふ。景気悪そうな顔してんじゃないか大将。助けがいるかい？』

「え？」

「なに！？」

突然聞こえてきた声に二人は立ち止まりあたりを見回す。まさか、エヴァンジェリンの襲撃！？二人の脳裏のそんな言葉がかすめた時だった、

『下！下っ！！』

その言葉に従い下を向いてみるとそこには。

『オレッツチだよネギの兄貴。アルベール・カモミール久しぶりだ！』

ネギの助言者（？）（ここに到着！！）

⋮
†
⋮
†
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
†
⋮
†
⋮

『なるほど……つまり兄貴はそいつに一撃入れてやりたいんだな？』

「そーなんだよ。どうにかならないかな力毛君」

場所は移って女子生徒寮。明日菜の部屋へと移った二人と一匹は対犬神用の作戦会議を練り始めていた。エヴァンジェリンは？と聞くのは無粋である。先の恐怖よりまずは目前の危機を乗り切るほうが先決なのだ！！

『ふふふ。だったら簡単さ兄貴！！この姐さんと仮契約をしちまえばいいのさ！！』

「ええ！？」

「な、何言ってるのよあんた！！」

飲んでいた紅茶を吹き足ながら驚くネギと、顔を真っ赤にしながら怒声を上げた明日菜。当然である。先いくらももとは戦いのために儀式だったとはいえ、今は恋愛色が強いことにはなんら変わりはないのだから……。

『じゃあ姐さん、このままネギの兄貴を放っておくっていうんですかい？こんな十歳の子供が痛めつけられているのに姐さんは黙ってみていると？』

「うっ！？」

それを言われると痛い。第一彼女は犬神からネギを守るということを誓いネギのそばによくいるのだ。その割に彼女は今までネギを犬神から守れたことなんて一度もなかった。なんという体たらく。

なんとという情けなさ。

それが負い目になっていいのか思わずたじろぐ明日菜を見てカモはいやらしい笑みを浮かべ畳み掛けてくる。

いや、別に痛みつけられていませんよ！！というネギの言葉も今は届かない！！とどかないっいたら届かない！！

『なあに。ほんのちょっと十歳のガキンチョと唇重なるだけじゃないっすか！！ノーカンすよノーカン！！それとも姐さん……もしかしてキスしたことないのお？』

「なっ！！あ、あるわよ！！キスぐらい！！二万回ぐらいやってるわよ！！」

「明日菜さん落ち着いて！！あとそれ本当だったらかなり問題ありますよ！？」

カモの挑発にやすやすとのってしまふ明日菜に、貞操の危機を感じたネギは慌てて落ち着くように言い聞かせてみるが……。

『じゃ、問題ないっすね』

「いいわよ！！やってやろっじゃない！！」

ささつと方陣をかくカモに乗せられネギをがっつりわしづかみにして法人の中に放り込む明日菜！

「ま、待ってください！！僕と明日菜さんは教師と生徒でっ！！」

ネギの抵抗はむなしく……こうして一人の少年の初キスはいえ

たといふ……。

…
十…
十…
……
十…
十…
…

その日の深夜。

「うん？神楽坂か？なぜこんなところにいる」

「なぜって……決まっているでしょう！！」

ちよつとだけ疲れた表情をしているネギとともに現れたどこかで見たツインテール少女の出現に、ちよつとだけ表情を動かした犬神に明日菜はびしつと指を突きつけた！！

「この前は言い負かされちゃったけど、こんかいはあんたを『キヤ

ン』っていわせてやるために来たのよ！！」

「あつそ……」

びしつと決めポーズをまでとって犬神に宣戦布告をした明日菜の言葉。

しかし、犬神はたった一言でその言葉をつぶした。

「え……」

ちよつとだけ絶句してしまうネギとカモ。そして、あつさりと自分の決め台詞が一蹴されてしまったことに固まる明日菜を放置して犬神は地面をけり麻帆良へと飛んでいく。

「まあ……貴様が来るのは予想外だったし、貴様を本格的に魔法にかかわらせるのももう少し後の予定だったのだが……。僕の予定が狂った事情に関しては後でお前たちの体にゆっくり聞きましょう」

ゲルはそうつぶやいた後、麻帆良の闇の中へと消える。

「お前程度が何人増えようが同じことだ。お前たち二人では僕にふれることすらできないだろう」

ブチッ！！

その言葉を聞き明日菜の中で何かがキレた！

「ジョートーよ！！この外道！！今日こそ吠え面かかせてやるんだから！！ネギ！！呪文お願い！！」

「あ、はい！！シス・メア・パルス契約執行 60秒間！！ミニストラ・ネギイネギの従者」 神楽坂明日菜『！！！！』

夜の追いかけてこが始まった。

「なるほどそういつわけて神楽坂がいたのか」

「はい……」

それからしばらく経って……。月を背景に建物の屋根に立った犬神は息も絶え絶えになって倒れ伏した明日菜とネギに事情を尋ねていた。その右手にはがたがたと震えるカモが握られており、今にも背骨が握りつぶされそうな力で握りしめられている。

『だ、旦那……ギブ……ギブっ!!』

ちよつとしゃれにならなさそうな声音で犬神の手をタップする力
モにたまたま克蘭レスと一緒に依頼をこなしていた最中に通りか
かったマリー顔に縦線を入れてドン引きしていた。

「犬神君……君そのうち動物愛護団体に訴えられんで……」

「しつたことか」

平然とマリーの言葉を切り捨てながら犬神はマリーへ向かって力
モを投擲。マリーに無事受け止められた力モはマリーの服にもぐり
こみがたがたと震え始めた。

「おお〜。だ、大丈夫か？」

「あ、悪魔だ……悪魔があの旦那には取りついてるんだ!!」

「あ〜。否定できひんなあ〜」

「聞こえているぞ安川……」

若干虚ろな笑みを浮かべるマリーの言葉を聞き、犬神は明らかに
青筋を立てながらマリーを睨みつけた。

「さて、野菜……言い残すことはあるか？」

「で、できるだけ苦しくならぬように殺してください」

「いいだろう」

「よくないよ！？犬神君やったらシャレにならんしな！！」

特筆することもなく特別なこともなく。ある意味予定調和といわんばかりに気で強化すらしていなかったゲルにあっさり逃げ切られた二人。結局この日は一度も犬神にふれられないまま追いかけてこは幕を閉じたのだった。

後日談。というか裏話。

『ところで姐さん』

「マリーでええよ」

『じゃあマリーの姐さん。あんたも胸にまだブラはいらねえと思うんだが？』

「……………」

『あ、あれ？姐さん！？ちょ、まっ！！オレッチの関節をそつちは曲がらな……………！？』

そののち…………カモを見た人間はいない…………。

修行終了

朝。

小鳥がさえずる爽やかな朝。カーテン越しに部屋を照らす暖かな日差しがマリーの目覚めを促す。

今日も一日いい日になりそうだ。そう思いながらマリーは目をさまし……。

「グッモーニング！マリーちゃん！！」

マリーの部屋に不審者が一人……。

「俺様参上？」

赤い目を隠すマスクに、超人的ヘヤセット。風もないのになびく真紅のマフラーには実は針金がとおされているらしい……。

彼の名前はスパルタン？。和が犬神アンダーグラウンドサーチのBOSS、犬神ゲルに何度となく挑戦し激闘を繰り広げ……

「……………」

るたびにボコボコにされて泣きながら逃げていくということを繰り返す、自称天才怪盗を名乗る生粋のバカである。

おまけにこの前は犬神に乗せられてまだ十歳のネギをタコなくりにした経歴を持つ危険人物。現在はネギの体術の師匠として結構良

好な関係を築いているらしいが……。

「まあ、今はそんなことよりも……」

「？」

マリーの呟きに不思議そうに首をかしげる？に、マリーはカードから取り出したハリセンを使って一撃！！

「バツモーニングー！！」

「レイトツッコミありがとうー！！」

正面を向いている？の顔が横を向くぐらい力いっぱい殴りつけた
！！

…：：：

「お目覚めすつきり？」

「ドッキリや！なに朝っぱらから人の部屋に不法侵入かましとんねんコソ泥！！」

「ふっ……泥棒に何とは愚問の極み……といたいところやけど今日は泥棒としてやってきたわけやないからいわんとくわ」

「ほな、その悪趣味な格好は何でしてきたんや？」

「マリーちゃん。この格好結構気に入っているんやからけなすんはやめて。心に刺さる……」

そんな会話をしながら、マリーはぼっさぼさに寝癖のついた金髪にブラシをかけいつものように後ろでまとめ、？はだらだらと窓に

座りながらその様子を見ていた。

見られて気になるなどマリイは言わない。どうせまだ話があるのだろつから、何を言ってもこのバカが出ていくことがないことぐらい知っているのだ。

「ほんで、ホンマいつたい何しに来たんよ。言っとくけど私の部屋に金目のもんはないで」

「うん。虫かごみたいにクソ狭いしね。一畳って……」

「殺すで?」

「そんなことは君がねとる間に調べたからしつとるよ。根こそぎ」

「根こそぎ!?!」

「あと、君の胸にまだブラはいらんわ。それはチチとはよべへん」

「キシヤ

!?!」

コソ泥に好き勝手言われてしまひ猫のようにブチギれるマリイを無視して、?は話を進めていく。

「今日やってきたんは他でもない……うちの弟子がこまっとなるようやったから力かしたろつおもてな」

「ああ……ネギ君のことかいな」

?が明かした事情によつやく合点がいったのか、マリイはカード

にハリセンを収めた。まあ、といっても自分の部屋から不法侵入したことは納得できないが。

「そう！うちの弟子が犬神君にいじめられて日々泣き寝入りしていると聞いた俺様はいても立ってもいらねず、こうしてはるばると……」

「はいはい」

「ちよ、きいてえや……」

何やら語りだした？を無視してマリーはいつものようにマラソンを開始するため、トニーングウェアを着こみ、ついでに？が来たと知らせるためにネギを起こしに行く。

「ネギ君。あなたの師匠がなんかきてんで」

そんなことを言いながら部屋に入ったマリーが見たものは……。

「はふう」

なぜか明日菜の胸に顔をうずめるようにして満足げに眠っているネギと……。

「うちゅ」

寝ぼけているのかそれとも寝ぼけたふりをしているのかは定かではないが、ズボンを半分脱ぎパンツを露出した姿でネギの額にキスをかましかけている明日菜の姿。

「……………」

マリーはその光景を見てしばらく無言になった後……。

「よし異常なし」

「いや……マリーちゃん現実逃避してんと早いこと起こしたったほう
が二人のためやと思うけど」

なぜか晴れやかな顔をしてその光景を無視したマリーに、珍しく
？がそうツツコむのだった。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「はあ？おねえちゃんにとつたから、明日菜の布団にもぐりこんだん？」

「はい………すいません」

「まったくよ。あんたのせいで最悪の目覚めだわ！！」

「でもせやったらなんで私のところにはこーへんかつたんやろ？」

「あ、言われてみれば………」

「決まっているだろう。貴様の貧相な体ではネギの姉の代わりは務まるまい」

「殺すで？」

「マリーーこれ新しい食料？」

『姐さん助けて！！』

「おお、オコジヨ妖精やん。珍しいもんがおんな」

「ゲル様……今日のご予約ですが」

カオス……。今の犬神アンダーグラウンドサーチの食卓の様相のことである。みんな好き勝手しゃべりながら朝食を楽しんでいる。ちなみに明日菜は昨日の犬神都の追いかけてここで敗北したあと、疲れ切っていたので事務所に泊まったのだ。

「それで、貴様はどうしてここにいる？」

「はっ！！そんなもんきまつとるやろうが。弟子を助けるためや」

「弟子？」

「あ、はい！！しばらく前から格闘術の訓練をしてきている六重トウジ先生です」

「NO！！ネギ君、俺のことは師匠とよべゆーたやる！！」

「あ、はい！！師匠！！」

「ああ、ええなあその響き！もつかいや！！」

「師匠！！」

「わんもあ！！」

「師匠！！」

何か変なツボにはまってしまったらしい？とネギを見て明日菜は顔を引きつらせる。

「ねえ……あの人って、もしかしてバカ？」

「もしかせんでもバカやで」

かなりひどいことを言う二人に鼻を鳴らしながら、犬神はさっさと食卓から離れた。

「まあ、そんなことはどうでもいいが……安川。依頼だついでいい」

「へいへい」

犬神に呼ばれてささっと朝食を掻き込み立ち上がるマリーに、姫は握りしめて圧迫していたオコジョを手放しついていく。

「あ、だつたら僕も」

「別についてきてもいいが……」

今日は休日ということのでついて来ようとするネギを一瞥して一言犬神はつぶやく。

「今回の依頼は……浮気調査だぞ？」

「行ってらっしゃい！ー！」

ネギは即座に態度をひるがえし、食卓から断固として動こうとしなかったという……。浮気調査に何か嫌な思い出でもあるのだろうか

か？

いやまあ、十歳なら浮気調査に参加したがるのは当然ではあるのだが……。

「ふふん。そんな余裕かましててええんかいなゲル君！俺にはネギをお前に勝たせるための秘策があるんやで！！」

しかし、そんな犬神たちを？は呼び止めた。

「秘策！？」

「ちよ、そんなのあんの？」

今までゲルに負け続けたネギはもちろんのこと、昨日苦い敗北を味わった明日菜も？のその言葉に食いつく。しかし……。

「いや、全然気にならないな」

一番食いつくべき犬神はそういつて？の言葉を切り捨てた。

「……………」

もう啞然とした状態で固まる三人をしり目に、犬神はさっさと踵を返し部屋を出ていこうとする。

それに慌てた？が慌てて言葉を重ねた。とうかがかまってほしかったようだ。

「いやいや、もうこれが成功した君、俺に向かって『きゃーん』し

か言えへん様なすつごい策なんやで！どうや、気になってきたやる！！教えたつてもええんやけど！？」

「いや、結構」

「はっはは！！犬神君、それ以上は俺がなくさかいにやめたほうが身のためやで！！」

そんな脅迫なのか懇願なのかよくわからない言葉を放ちつつ、？は話を進めていく。ちなみに彼は血の涙を流しており、明日菜とネギは？のことが非常にかわいそうに見えたらしい……。

「ふふふ！！余裕かましてられるんも今のうちやで、犬神ゲル！！新月の夜には気を付けることやな！！」

「師匠……それ捨て台詞」

「やっぱバカじゃない……」

仮にもバカレンジャーと名高い明日菜にすらそんなことを言われる？に、もうネギは頭を抱えるしかなかった。

ちなみに、？が先ほどにセリフを吐き振り返った時にはもうゲルの姿はなかったという落ちがつき、？がしばらく再起不能になったのだが、それは面倒なので割愛させていただく。

「犬神君の弱点を探してとっ捕まえるんや!! ただの弱点やないで!! 致命的で、確実な、知られただけで思わず身代金払ってまうよ
うな、そんな秘密やら弱点を探すんや!!」

「あの……それって、かなりひどいことなんじゃ……。しかもそれを
するために家探しなんて」

朝食を終えた明日菜、ネギ、?はそんな会話をしながらゲルの部
屋へと向かっていた。先ほどの会話のようにゲルの弱点さがし、そ
れをネタに脅迫し動きを封じて捕まえる。それこそが?の秘策であ
った。

本当は犬神をおびき出して家の外に出させるといふ段取りもあつ
たのだが、犬神は?のことをガン無視してさっさと仕事に行つてし
まったので、その段取りはなかったことになる。

都合がいいと喜ぶべきか、相手にされなかったことを悲しむべき
か、いまいちよくわからないことになつてしまつていたが、まあ今
はそれは気にしないと?は自己完結。ずんずんと事務所の中を進む。

「や、やっぱりこんな非人道的なことはやめましょうよ」

「あほかネギ!! 勝つためやつたら何してもええんや!!」

「ダメだ……師匠頭に血が上つて声が聞こえていない……。あ、明
日菜さん止めるの手伝つて……」

「さあ、ネギ!! 手早く探すわよ!! 絶対あの外道ぎゃふんと言わ
せてやるんだから!!」

「あすなさあああああああああああああああん!？」

明日菜のまさかの裏切り愕然とするネギを後目に、?と明日菜はゲルの部屋の前にたどり着いた。

「さて、ここやな!？」

「ええ、そのはずよ!!昨日寝るときここに入ったみたもの!！」

そういつて、二人が前に立った扉は……。

とつてなし。鍵なし。何やら金属質な光沢をもつ、宇宙戦艦とかに使われてそうな自動ドア……。

「「って、なんでここだけSFチック!？」」

「だ、だいぶ前に家ごと事務所を吹き飛ばされたことがあるからその対策だって……」

「ほんと何してんのよあいつは!？」

ネギから聞かされた何やら物騒な理由に明日菜は愕然とするが、
？はそんなこと気にしない。

「ふふふ。ここが我が宿敵の巢……」

そういつて？はドアの切れ目をまたぐように両手を配置した後、
気でめいっぱい強化した両手を使い、力づくでドアを開けようと
する！！

「ふんがああああああああああああああああああああああ
ああ！！」

五分後……。

びくともしなかった扉の前で荒い息をしながら？は一言ツッコミ
を入れた。

「あかんがな！？」

「しらんがな！！」

思わず関西弁に名ってツッコミを入れるネギをしり目に、明日菜
は微妙に引きつった笑みを浮かべる。ネギから本気の？は、大陸弾
道弾級の威力を持つ攻撃をしてくると聞いていたのに、その力でさ
え、なおあかない扉にあきれているのだ。

「つーか俺の気を込めた力でも微動だにせえへんってどういうこと
やねん！！鉄でもないのにめっちゃ固いし！？なにこれ？ガンダリ
ウム！？」

「も、もうあきらめましょうよ。犬神さんにはれたら確実に怒られますし……」

扉をくまなく調べてとんでもない事実を知ってしまった？をしり目に、ネギはもうちょっと泣きそうになりながら？の袖を引つ張った。ばれたら間違いなくろくなことになることはないことは目に見えているのだ。ネギがおびえるのもわかるというもの……。

しかし、？はあきらめなかった！！

「あほか！！あきらめたらそこで試合終了やで！！なあに、ドアが開かへんのやったら違つところと道つくるのみや！！」

？はそういつた後、横に壁へと手を付けた。

「ま、まさか！？」

「ふはははは！！甘いで犬神ゲル。ここの壁は普通の素材みたいやし、俺のパンチやったら一発や！！」

「やっぱり！？ダメですよここ賃貸なんですから！！明日菜さんも何か言つてくださいよ！！」

「やっちやいなさい！！」

「明日菜さん！？あなたそんなキャラじゃないでしょう！！どつしたんですか！？」

ネギのツッコミフィーバーが炸裂する中、明日菜はちよつと座っ

「壁の中にも金属が……犬神さん。シエルターでも作ったんですか？」

まるで建築物破壊用のハンマーで殴ったかのような巨大は穴が開いた壁からは、ドアと同じ材質の金属がのぞいていた……。その傍らには殴りつけた手が大変なことになっている？が……。

そんな光景にもう言葉もない明日菜とネギだった。

「く、くそ。このままやったら犬神君の弱点は探れへん」

「い、いやもう、師匠いいですって。格闘技真剣に覚えて《戦いの歌》完璧にしますから、もういいですって……」

「でも、ネギ……」

「明日菜さん。あなたにはあとでお話があります!!」

あくまで弱点を探ろうとする？に、ネギはフルフルと首を振りやめるように頼み込み、反論しようとする明日菜にくぎを刺した。

これ以上家を粉碎されたら犬神がなんというかわからないかだ。

三人がそんな風にもめている時だった。

「ネギ先生」

「「「!!」」」

突如聞こえてきた呼びかけに、ネギたちは慌てて窓のほうを振り

向いた。そして、その窓からのぞいていた人物は緑色の髪に能面のようにならない、やけに整った顔。そして、背中から荒まじい噴出音が聞こえるバーナーが出ていて……。

「茶々丸さん!？」

「え、その背中なに!？」

「え、ロボットやる?」

驚いたように固まるネギと明日菜の二人に?がツッコミを入れた。

「そ、そんな!?!茶々丸さんがロボットだったなんて!?!」

「全然気づかなかったわ!?!」

「いや、パツと見わかるやん!?!関節とか耳とかめっちゃロボット臭いやん!?!」

今までとは立場を逆転させて漫才を始める三人をしり目に、茶々丸は伝言を伝えた。

「マスターから伝言です。『ぼーや……ちょっとかわいいそうすぎるから手を貸してやる。耳を貸せ』だそうです」

「ふえ?」

「ちょっと、あんたネギを狙っているんじゃないの?」

「はい。ですがマスターは基本的に照れ屋なので本当のことをおっ

「しやりませんが、あれでかなり優しいお方です」

「そ、そうなんだ……」

「あと、夜中にギャーギャーうるさいといっておられました」

「不通に安眠妨害が嫌だったただけですよねそれ。というか吸血鬼のくせに夜寝ているんですかあの人!？」

あきれた声でツツコミを入れるネギを手招きし、茶々丸はネギに秘策を授けるのだった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

その夜。犬神と向かい合う明日菜とネギ。

ネギの右手には茶色い封筒が握られていて、犬神はそれをじっと見ている。

「い、犬神さん!!」

「なんだ野菜……」

ネギが一步足を踏み出し、犬神はそれを受けて立つといわんばかりに静かに気を解放していく。

そして……。

「お金払うから一撃入れさせてください!!」

「御意。クライアント」

ゲルは即座に瞬動でネギが持っていた封筒を奪い取り、その中の金を数えた。中身は二十万。ネギが犬神の仕事を手伝い、手に入れ

た報酬の約半分である。

そして、月明かりが照らすなか。ぴたりと固まった犬神の背中にネギがポンとたたくことによって犬神の地獄の特訓は終了したのだった。

「なにかが……まちがってない？」

「明日菜……いまさらやで」

そんな光景を見ていた二人の言葉を聞き流しながら……。

後日談。

「で？なんであんな面倒なことしたんよ犬神君。金で終わらしたんやったってことは、あんまり役にもたたへん修行やったんやろ？」

「バカを言つな安川。あのタイミングだったから僕は金を受け取ったんだ。もつと以前だったら絶対に受け取らなかつたぞ？」

「へ？」

「考えてもみる。ネギはまだ十歳だ。魔力うんぬん以前にまず体力が戦いを行うためには圧倒的に足りない。それを鍛えるために毎日追いかけてこをさせたに決まってるだろう」

「え？」

「それに《戦いの歌》をほとんど実践と同じ状況下で使えたんだぞ。？と修行するときと比べて格段に早く操作方法を習得できたはずだ」

「……」

「それに追いかけることという遊びはなかなか頭を使うからな。追う側も追われる側も綿密に計画を立てて戦えばかなり有利に事が運べると学んだはずだ。ましてや、今回のエヴァンジェリン戦の戦場は麻帆良だ。追いかけて僕を探し回っただろうから、麻帆良に地理、環境にはかなり詳しくなつたはず。これだけでもナギ・スプリングフィールドの呪いを解くこと以外自堕落に生きていたエヴァンジェリンとは大きな差が……。なんだ安川？その意外そうな顔は」

「いや……意外ときちんと考えてたんやなあって……」

「失敬だぞお前は」

犬神はマリーにそういいながら紅茶を口に含んだ。

「それに……」

「それに？」

「あのタイミングが一番、野菜から金を搾り取れる時期だったろうからな。僕を絶対に捕まえられないと知ったら必ず、金を払って終わらせよう。と誰かが提案するはずだと……」

「私の関心、返せやボケ！！」

犬神アンダーグラウンドサーチに軽快なハリセンの音が響き渡ったという。

修行終了（後書き）

修行編終了です。最後のあれはよかったのかな……？

あすなに若干のキャラずれが……。大丈夫です！！あんなふうになるのは犬神関連の時だけですから！！

看病？

ほとんど満月となりつつある、月を見上げ、美しき金色の鬼は不敵に笑う。

「ふふふふ……もうすぐだ。もうすぐこの封印を解くことが……」

そういつて、彼女は自分の体を見回す。まるで鎖が全身に巻きついているかのような魔力の檻。彼女はそれを握りつぶさんとばかりに握りしめる。

「待っている……ボーヤ。決戦の日は……は、は、はんつくしょん！……」

「マスター。おうちに入ってください。まだお風邪をひいておられるのですから」

「うん。そうする」

「申し訳ありませんマスター。私がもう少し気をつけていれば……」

「いくな茶々丸。私の健康管理がずさんだったのがいけなかったのだ。は、は、はつくしょん……！」

「マスター。花粉症のお薬です……」

「うう、死ぬ。鼻水で窒息死する……」

お、鬼は不敵に笑いながら……自分の呪いを解くために戦う前に、

自分の病気を治すために戦うのだった！！

…
十…
十…
…
十…
十…

早朝。麻帆良学園世界樹前にて……。

鋭い風切り音とともに、とんでもない速さで拳が振るわれていく。

「しっ！！」

鋭い呼吸とともに、打ち出される？の拳にネギは必死に食らいつき、体をひねることによける。しかし、

「アホ、フェイントや」

「！！」

突きに隠れるようにして放たれていた、下回し蹴りがネギの顔面を容赦なく打ち抜きかける！！

その時、誰かがネギの服の襟をつかみ無理やりその蹴りの軌道からネギの体を外した！！

「大丈夫ネギ！！」

「あ、ありがとうございます明日菜さん！！」

ネギを引っ張った人物は片手に巨大且つ、きれいに装飾が施されたハリセンを持つツインテールの少女。神楽坂明日菜。

彼女も犬神の訓練が終わった後、？を師事して格闘術の鍛錬にいらして。どうやら今回の吸血鬼戦に参戦するようである。

彼女はネギを後ろに放り投げるとぞと同時に、ハリセンを振りか

武士キツクスへと殴りかかる。しかし、？はタカミチと同等の実力を持つている怪物である。訓練を始めて間もない少女の攻撃を喰らうわけもなく、あっさりとそのハリセン攻撃をよけ、伸ばされた彼女の手を取り、関節を決め、天高くぶん投げた。

「きゃあああああああー!!」

「失点やで明日菜ちゃん。素人があんま大ぶりの攻撃したらスキつくるだけやゆーたやる?」

？がそういつて、ネギのほうを振り返った時、

「ウエニアント・スヒー 冴玉ウナーレス・フルタリナシヨルガタイオーネフレット・テンベスタマダストリーナ来れ雷精 風の精!!! 雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐……」

明日菜を投げたことにより若干のタイムロスをした?。その隙を ついて完成させた今のネギが使える魔法で最強の威力を誇る魔法を、ネギは詠唱し終えていた。

「やば!?!」

「ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンスいつけええええええええ!!! 雷の暴風!!!!!!」

巻き上がる雷をまとった暴風。それがまるでレーザーのように一直線に?へと延び、彼の体を飲み込もうとする……だが!!

「はっ!!なーんて、いうと思ったんかいな!!」

瞬間、彼の拳にすでに貯められていた気が解放され、ネギの魔法をあっさりと迎撃した!!

「なっ!?!」

「チエックメイトです!?!」

そして、?の後ろから爆炎を切り裂いて飛び出してくる人物が一人。左右色違いの瞳に、なびくツインテール。手には巨大なハリセン!?!

「でりゃあああああああああ!?!」

女の子らしからぬ大きな気合いの声とともに、彼女のハリセンは?の頭をとらえ、パン!?!という軽い音を立てた。

「私の脚力なめてんじやないわよ!?!」

「うわぁ……マジで?本気で負けてもうたで……」

素人コンビに負けたことでショックを受けたような、弟子の成長がうれしいような……。?をそんな複雑な気分にしながら、最後の訓練は終わりを告げた。

荒い息をして座り込むネギと明日菜。そんな彼らに？は苦笑を浮かべつつ、近くにあった自販機から買ってきたスポーツドリンクを投げ渡す。

「ほれ」

「あ、ありがとうございます……」

「あんた……こんなに強かったのね。普段あんなにバカなのに……」

「明日菜ちゃん。俺のことどう思ってたの？」

自分の評価に低さに若干ショックを受けながら、？は肩をすくめる。

もっとも今の彼を？と呼ぶのはいささか語弊があるだろう。彼の姿は怪盗用の悪目立ちする格好ではなく、ヘアバンドをつけてジャージを着た普通の少年の服装だったからだ。

今の彼は六重トウジ。麻帆良学園中等部所属のただの学生である。

まあ、男子たちの間では女子中等部の武道四天王と対なす、麻帆良武道猛将などといわれているので、普通の学生というのはいささか語弊があるが……。

「ほんで……いちおう、短い間で詰め込めるもんは全部詰め込んだつもりやけど……。お前としてはどうやねん、ネギ。あの吸血鬼に勝てそうか？」

？……トウジの珍しく真剣な声音での問いかけ。ネギはそれに少し、驚きながらもネギは少しだけ頷いた。

「勝ちます。魔力量も経験値も……そして生物としての格も、何もかも勝てる要素がない勝負ですが……勝って見せます！！」

「……ええ覚悟や。間違えたでネギ」

ネギのはつきりとした答えに、満足したのが当時は嬉しそうにネギの頭をなでる。そこにはちゃんとした師弟関係が見て取れて……。

「あんたたち、ちゃんと弟子と、師匠やってんのね……。そっこのほうが意外だったわ」

「……どういう意味や（ですか）！？」「」

明日菜にそんな失礼なことを言われてしまい二人のとも、若干のけぞりながらツツコミを入れた。

準備は万端。気合は十分。あとは戦いるときがくるのを待つだけ……そのはずだったのだが。

…
十…
十…
……………
十…
十…
…

時間は流れて……。満月の夜……の前の夜。

マリー、ネギ、明日菜は突然犬神に呼び出しを喰らい事務所へと集合させられた。

「ちょっと……。いったいなんなのよ私たちに用事って」

「あの……犬神さん。明日の対決の準備で僕も少し忙しいんですけど……」

若干呼び出しに不機嫌そうな顔をするネギと明日菜。それはそう

だろう。マリーから命の危険はないといわれてはいるが、明日の夜は間違いない死闘となる。彼らも彼らなりの準備を行い万全の態勢で臨みたいはずだ……。だが、

「黙れ。叩き潰すぞ」

「……………！！」

二人は犬神の一睨みによって沈黙を余儀なくされた。不機嫌なのは犬神も同じだったらしい。

「あはははは……。ほんで犬神君。こんな時間に集合かけるなんてどないしたんや？」

ガタガタ震えながら泣き始める、二人を隅へと逃がし、マリーは冷や汗交じりに犬神に問いかける。さすがは長年の助手！！あの、犬神に話しかけるなんて！！そんな感じの表情で、二礼二拍手一礼する明日菜とネギ。

私は神社か！？安川大明神か！？真理は激しくそうツッコみを入れたくなったが、さすがに不機嫌な犬神の目の前で漫才を繰り広げるの気が引けたので、全力で本能を抑え込む。

「なんだ、ツッコまんのか？つまらん」

「どないせえっちゅうねん！！」

しかし、犬神から自分の努力を全否定されてしまい結局は鋭いツッコミを入れることになってしまっているのであった……。

閑話休題。

そんな騒ぎはなかったことにして、犬神はさらっと要件を言った。

「エターナルロリが風邪をひいたらしい。このままでは契約が履行できない。お前たち。ちょっと行って看病して来い」

「え？風邪？」

「あの……私たちがあの子の敵なだけど？」

「何か文句でもあるのか砂利二人？」

「「ありません……」」

人殺しの視線を向けてくる犬神に敬礼する二人。いつか犬神を倒すといっていた明日菜だったが、彼女が犬神に逆らうことはもう不可能といっただろう。

ちなみにマリーは？

「毎年毎年気をつけえゆーとんのに……。またゲームで夜更かししよったな？あ、茶々丸？悪いんやけでそっち行ってええ？あんた一人やったら看病大変やろ。私もそっち行くわ」

意外と手際よくエヴァの看病の準備をしていた……。

珍しいことに、この家に三人もの客人が来たのだ。

「ホンマにもうー！あんたいっつもこの時期になると体調悪くなるんやから、体調管理には気をつけやって去年も一昨年もいったやる！何してんのよー！」

「うづ……すまないマリー」

そんなことをいながら、マリーが差し出したスプーンから弱弱しくおかゆをすするエヴァ。そんな光景を見た、ネギは……。

「エヴァンジエリンさんって……結構子供みたいですよね」

一生懸命看病をしたのだが、性別の違いからほとんど役立たずとなってしまったネギはそんなことを言いながら新しい氷嚢を作ってくる。

「見た目子供な分余計にね……」

ひらひらと体温計をふるい、少しそれを冷やしてからエヴァンジエリンに渡す明日菜。先ほど汗をびっしょりかいていたエヴァンジエリンの服を変えたり汗を拭いたりしたのは彼女だったりするのだが、その間ものすごく暴れられたのでちょっとしたキズをいくつも作っていたりする。

「ほう……死にたいらしいな貴様らー！」

「ほら、あばれたらアカンー！」

「うう。明日覚えてるよ」

余計なことを呟いていた二人を目ざとく見つけたエヴァは、若干の怒りとともに立ち上がろうとするが、マリーの手によってあっさりベットに戻されてしまい、恨みがましい視線を二人に送るだけで終わった。

どうやら本気で、風邪にかかってグロッキーになっているようだ。

「本当にありがとうございます、マリー様。私も少し用事があったので助かります……」

茶々丸はそういって、制服を着こみペコリと一礼をした。

「つてのある大学病院に薬をもらいにいってきます……。本当なら昼間のうちに言っておくべきだったのですが、マスターのことが心配で離れることもできず……」

「ああ、ええよ。私もこの子に早いこと風邪治してほしいな。いつてき」

「了解しました。マリー様なら安心して任せられます」

「安心できないものも何人かいるが……」

「マスター……そんな照れ隠しを」

「貴様、茶々丸!! なおったら、必ず博士に脳みその点検してもらっからな!!」

無表情のまま頬を抑える茶々丸に、エヴァはちょっと泣きそうになりながら怒鳴り声を上げた。そんな主から逃げるように……しかし、かなり楽しそうにさっさと茶々丸は家を出ていく。なんやかんやで人間臭くなりつつある彼女だった。

「といてもやることほとんどないけどな。服も変えたし、汗も拭いたし、体温は計ったし、おかゆも食べたし、あとは寝るだけやなエヴァ。どないする？隣で子守歌でも歌ったるか？」

「さすがにそこまで子供ではないわ馬鹿者……」

若干顔を赤く染めて、文句を言ってくるエヴァにマリーは肩をすくめた。

「はいはい。ほな私ら下におるし、なんかあつたら呼んでや」

そういつてひらひら手を振りながら、部屋を出ていくマリーたち。しかし、マリーは部屋を出てすぐに扉の前で待機した。

「どうしたんですか？」

「そんなところで、止まって」

「いや……なんかあつたらすぐに助けられるようにな」

平然とそんなことを言っただけのマリーに、ネギと明日菜は感嘆のため息をついた。

「本当に友達思いね」

「マリーさんってすごいですよね……。エヴァンジェリンさんと友達っていうのもすごいですが、犬神さんの助手して、うちのクラスのスツッコミ役して……」

そこまで言っただけでネギはようやく気付く。もしかして、うちのクラスメンバーで一番すごいのはエヴァンジェリンさんや明日菜さんじゃなくて、もしかしてマリーさんなんじゃ……。

「マリーさんって……もしかして超人ですか？」

「筋肉バスターなんて撃たれへんよ？」

「え!？」

「私を何やと思つとるんや、二人とも!？」

そんなマリーの軽やかなスツッコミを受けて、二人はなぜか恍惚とした表情になる。

「完成されたタイミング」

「ポケにあわせて調節された見事なスツッコミの勢い」

「もう芸術ランクね」

「犬神さんが積極的にポケをかましてスツッコミを受ける理由がわかります」

「二人とも……ずいぶんうちのボスに浸食されてる気がするんで……」

もはや元のキャラが形も見受けられない二人の、行動にマリーは
やや頬を引きつらせる。

そんな感じに、エヴァンジェリンの看病は続いていく……。

……
……
……
……
……

それからしばらく経ったとき、

そろそろ氷嚢が解けてしまっただろうと思ったネギと明日菜は、二階が上がってきてマリーがドアの前にはいないことに気づいた。

「あれ？マリーさんは？」

「中に入ったんじゃない？」

二人はそういって、エヴァンジェリンの寝室に入った。そこで…。

「あ………」

「寝ちゃっていますね」

二人が寝室を除いた時、マリーとエヴァの二人は安らかな寝息を立てて眠っていた。エヴァはいつの間にか先ほどとは違うパジャマを着て、布団ので横になっている。マリーはそのベットにもたれかかりすやすやと寝息を立てていた。

あたりには、おそらく再び汗でぐっしょりになってしまったのだと思われる先ほど明日菜が着替えさせたパジャマや、ぬるくなった氷嚢。そして、汗を拭くといったと思われるタオルが散乱していた。

「うなされていたんでしょねエヴァンジェリンさん」

「私たちも呼べばよかったのに……」

本当ならマリーもそうしたかったのだろうが、あいにくとエヴァがうなされながらうわごことに、《千の呪文》サウザンドマスターの名前が出ていたため彼女たちを呼ぶのは控えたのだ。エヴァとねぎの父親の間に何があったのかは知らないが、少なくともネギには聞かれたくないだろうな、と思ったマリーなりの配慮なのである。

「それにしてもこの二人本当に仲がいいですね。クラス担任としてはうれしい限りです」

「たまに長谷川さんと一緒に話している時もあるみたいよ？マリーはほら……賑やかで明るくて、裏表のない子だからね……」

「うちのクラス全員がそんな感じでは？」

「ま、マリーはさらに別格なのよ！ー！」

勝手に別格扱いにされてしまったマリーは若干うなされている気がする。それもそうだろう……。ただでさえ能天気さは麻帆良一といわれている3-Aの中ですら別格といわれてしまったのだ。これで彼女が起きていたら、大いにツッコミを入れたことだろう。

「じゃ……氷嚢変えたら私たちもここにいよっか」

「はい！」

そういって、エヴァの濡れタオルを回収し新しい氷嚢を彼女の頭に乗せるネギたち。その後、彼らはじつとエヴァがうなされないうか見守っていたのだが、何分彼らは10歳と中学生。すぐに眠くなっ

てしまい、マリーの隣で彼女と同じようにすやすやと眠りの世界に入り込んで行ってしまった。

そして、それからしばらくして帰ってきた茶々丸はその光景を見て……。

「……………」

無言で《ますたーの成長記録》に記録した後、優しく彼らの体に毛布を掛けるのだった。

後日談というか今回のオチ。

「ああ……マスター。あんなにマリー様と仲良くして……。で、ですがもしかしたらそっち関連の關係を持っておられるのでしょうか？そつでないとおれほどの中の良さの説明が……。マスター。それはいけません。私敵にはありといえはありなのですが、やはり同性

同士というのは非生産的ですし……。せめて、マリー様は本妻にいてあとひとり、お婿様を取っていただかないと……」

「ちゃ〜ちゃ〜まる〜?」

「あ、おはようございますマスター。どうされたのですか?そんなに憤られて?」

「きさまというやつは〜!! いったいどんな経験をしたらそんな風になるのだ!! ええい、巻いてやる! 巻いてやる〜!!」

「ああ、マスターそんなご無体な〜」

「何やつとるん二人とも? はよ、いかな学校に遅刻すんで」

「寝坊したあああああああああああ!」

ガイドノイド。エヴァンジェリンの従者……。絡繰茶々丸。最近へんな方向に人間臭くないつつあるちよつと変わったロボットである。

看病？（後書き）

いい加減吸血鬼へんも終わらせないといけないのですが……。

ネギの夢見フラグをへし折ってみました。でもこれだとエヴァとナギの関係性が永遠の闇となってしまうし……。

どうしたもんでしょうかね？

決戦開始！！

「杖持った？」

「持ちました！！」

「防具持った」

「ばっちりです！！」

「小細工よしの道具は？」

「ぬかりありません！！」

「ほかは……」

「いい加減にしろ」

麻帆良の暗闇の中。大停電によって月の明かりしか光がなくなっ
てしまった麻帆良に、一軒だけ電気がついた事務所があった。

犬神アンダーグラウンドサーチ。人に厳しいエコ発電によってこ
の事務所にはいつでも明かりがともっている。

そんな明るい玄関先では、何やら物々しい武装で身を固めたネギ
と、その少年をぺたぺた触りながら何やら心配そうにしている明日
菜の姿があり……。

いつまでも不安そうにしている明日菜に対して、いいかげんにエ

ヴァとの待ち合わせ場所に行きたい犬神は、空手チョップを喰らわせ、明日菜の頭をまるで宇宙人のように平らにし、その眼を飛び出させた。

「つて、あすなさあああああああん!？」

「安心しろ。みねうちだ」

「どの辺が!？」

「死んで無いだろ?」

「漫画だから死にませんけど、通常の人間なら即死ですよ!！」

「あいにくここは小説だから漫画の原理は関係ないな」

「屁理屈コネないください!！」

結局いつもの漫才に戻る二人をしり目に、マリーは苦笑いを浮かべながら明日菜の頭を横から押元の形に戻した。

「こ、ここはどこ? 私は高畑明日菜?」

「明日菜すっかりして……。籍入れるどころか告白すらしてへんやろ?」

記憶喪失ではなく都合のいいように記憶の改ざんをしている明日菜にツッコミを入れつつ、マリーはため息をついた。

「エヴァちゃんのことやからそんな無茶はしーひんとは思っけど、

あんま危ないことになるんやったら決闘なんてすぐやめるんやで」

「何を言っている安川。そんなことをされたら僕が違約金を払わなければならなくなるではないか!!」

「君はホンマそればかりやな!？」

まあ、そんな風に騒がしい犬神アンダーグラウンドサーチ。今日はどうとどう……エヴァンジェリンとの決闘の日である。

…+…+…+…+…+…+…+…+…+…

世界樹広場前。そこに長い金髪をなびかせ空をふわふわ浮いている、怪異の王が佇んでいた。

吸血鬼真祖。最強の種族の一角に数えられる彼女の名前は……エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。ダーク・エヴァンジェール・マスター 闇の福音、人形使い、不ガ・ノスフェラトゥ死の魔法使い、あしきおとずれ悪しき音信、かいのしと禍音の使徒、わらべすがたのやみのまおう童姿の闇の魔王。無数の異名を誇る……世界最強の吸血鬼である。

そんな彼女はいま苛立っていた。

今から始まる決闘に……。ではない。あいにくと彼女は決闘の一つや二つ程度で精神状態に変化をきたすような柔い経験を積んでいない。では、決闘を挑んできた相手が宮本武蔵よろしく、遅れているのかといわれるとそういわけでもない。現在は決闘が始まる時刻の三十分前であり、まだまだ時間的には余裕があるほうだろう。

では、なぜ、彼女はここまで機嫌が悪いのか？その答えは彼女の周りにあった。

「なんで屋台が出とるんじやあああああああああああああああああああああ！？」

「マスター。落ち着いてください。口調が変わっています……」

煌々と照らされる自家発電による証明。もうもうと立ち込める焼きそばといった屋台料理の臭い。そして、騒がしく響き渡る客寄せの声。

「らっしやいらっしやい。焼きそばがおいしいよ」

克蘭レスが普段めつたに聞けないような口調で客の呼び込みをやっている。

「ったく……なんで俺らがこんなことしなくちゃならねんだよ」

「仕方ないですよ……。エヴァンジェリンさんたちの戦いを監視するならこういう形状を取らない限り却下だって犬神君に言われたんだから……」

やたら可愛らしいエプロンをつけたジョニーとレイジーが焼きトウモロコシを焼いている。

「まったく!!ネギ君にもし無茶を試してみる!!このわにやしがいぎのてっちゅいを」

「ガンドルフィーに先生飲みすぎです!!さっきまで職務中だったって飲んでいなかったのにいつの間に一升瓶開けたんですか!?!」

なにやら、カウンター席が作られた焼き鳥屋の屋台では顔を真っ赤にしたガンドルフィーにと、瀬流彦が騒いでいる。

「私のどこがいけないっていうのよ!!やっぱりこの年になった

「私は年増なの!?!」

「刀子……少し落ち着け……」

その隣ではおそらく失恋したのだと思われる刀子に絡まれた若干困っている神多羅木がいて……。

「ふおふおふおふお……にぎやかでいいのお」

「そうですね」

世界樹広場に設置されたいくつかの長椅子を一つ占拠した近右衛門と高畑は、二人とも浴衣を着こんでおりうちわ片手に将棋を打っている。

「どこの夏祭りだ!?!」

「ちなみにこれで上がった収益の80パーセントは犬神君の懐に入るわ」

「楽しそうだなあ!?!リリイ!?!」

にやにや笑いながら、リンゴアメを差し出し『食べる?』と聞いてくる元クラスメイトにエヴァンジェリンは怒声を上げた。この女の名前は前園リリイ。レイジーたちと同じく個性的な先生がそろっている(悪く言えば癖が強すぎる)初等部の国語教師だ。趣味は仕事をさぼって麻帆良を散歩すること。そのため彼女の授業の八割が自習である。高畑とは同級生。一応魔法先生に分類されているが、めったに働かないため実力は未知数。

「あら。私はあなたがからかわれる姿が大好きなのよ？楽しいに決まっているじゃない」

「だから私は昔からお前が大嫌いだったよ！！それよりいつたいこれはどういうことだ！？」

「やあねえ。いい加減気づきなさいよ。大体犬神君のせいよ？」

「わかってるよ！！でも聞かずにはいられないだろ！？」

まあ、つまりはそういうことだ。おそらく犬神は万が一の事態になった時、魔法先生と魔法生徒をエヴァとネギの戦いに介入させる気なのだろう。今回の犬神はエヴァとの契約によって戦いの参戦を禁じられている。もし万が一エヴァが勝っても、彼はネギを助けることができないのだ。

だからこそ……祭りを装った姿で魔法先生を一点に集めた。そうすることによって即座に戦力が動かせるように。

「ふつ。まあいい。どのような妨害をしてこようが……勝つのは私だ！……」

「……？何を勘違いしているのかは知らないけど……まあ頑張つてね？」

何やら涙目でそんなことを言ってくるエヴァに首をかしげながらリイはその場を離れた。ちなみに、リンゴアメはエヴァの手にしっかりと握られていた……。

決闘開始十分前にネギを連れてきた犬神は、いつの間にもやら屋台料理を大量に買い込みお面まで買っていたエヴァを見つめてやれやれとため息をついた。

若干顔を赤くして、猫のように威嚇するエヴァにネギと明日菜は激しく脱力した……。こんなのと戦うために自分たちは犬神と？から地獄の特訓を受けたのか？と……。

「おお、ネギやんけ！どうや、決闘まで時間もあるみたいやしお前もこつちでやきそばくわへん？」

「決闘前の人物にかける言葉じゃないことに気づけ！！」

そんな風に脱力したネギに声をかけてきたのは、怪盗の姿ではなく学生の時の姿をした？トウジである。そしてその後ろには見たことのない男子生徒が、三白眼になりながら？にツツコミを入れている。

「あの、後ろのかたは？」

「ん？ああ、こいつは俺と犬神君のクラスメイトで……」

「魔法生徒兼少年探偵を務めさせてもらっている猫谷ネコタニコースケだよ。噂はかねがね先生に聞かせてもらっているよネギ君。なかなか優秀な魔法使いだね」

そういつてネギに握手を求めてきたのは、蝶ネクタイをしめた犬神よりよっぽど少年探偵らしい少年、猫谷コースケ。《燃える天空ウイラニア・フロゴシス》を使いこなすことができる麻帆良の魔法生徒の中では最強とうた

われる天才である。

「ふん。イエダニ君ではないか？普段図書館にこもって修行しているお前が出てくるとはな。おおかた司書に何か言われたか？」

「僕の名前は猫谷だがね！？」

そして、犬神ゲルの永遠のライバル（自称）その二である……。つまりは全く相手にされていないかわいそうな人二号である。

「さて！？今ものすごい失礼なこと言われた気がするぞ！？」

「薬はほどほどにしておけ」

「やってないぞそんなこと！！」

ギヤーギヤーうるさく騒いでくる猫谷を完全に無視しながら、犬神はエヴァに歩み寄った。

「これで契約は果たした。報酬をもらおうか？」

「契約を果たした？だましたの間違いだろ？これほどの魔法生徒や先生を集めて……」

「……何を勘違いしているのかは知らないが、僕がこいつらを集めたのは、あくまで後々知らせなかったことであちらとの契約を反故にされるのを恐れたからだ。今回の決闘でこいつらに手を出すように言うことは絶対にしない」

「……信用できんな？」

「エヴァンジェリン……確かに僕は外道で、金の亡者だ。だが……」
あくまで疑り深い視線を向けてくるエヴァンジェリンを睨みつけ、
犬神は眼鏡を輝かせる。

「僕はプロフェッショナルだ。依頼人に嘘をつくようなまねはしない」

その言葉にあるおも実と真剣さを感じ取り、エヴァは少し目を丸くした後……ため息について警戒を解いた。

最近平和ボケをしていたか？私の目も曇ったものだ……。

エヴァは少しだけ反省をし、そして、茶々丸に指示をだし金が入ったアタツシケースを犬神に渡させる。

「確かに。受け取った」

アタツシケースの中身を確認するという犬神はそういうと、さっと踵を返しその場を離れた。どうやらもう彼女たちに用はないらしい。相変わらず態度がはつきりとした奴である。

エヴァはマントをひるがえし、世界樹広場の中央に立った。

「さて時間だ。……開戦と行こうか。ぼーや」

「エヴァンジェリンさん……。絶対に負けませんからね！」

「マスターはこの日のために準備を重ねてくれました。負ける道

理がありません」

「私たちだって準備は万全よ！負ける気なんてこれっぽっちもないんだから！！」

それぞれに鋭い視線を交わしつつ、エヴァとネギ・茶々丸と明日菜は向き合った。

いま……決戦の火ぶたが切っておおとされる！！

…
十
十
………
十
十
…

「さあ、始まりましたエヴァンジェリンVSネギ先生!! 実況と解説はわたくし安川マリーがお送りします。そして解説は?」

「解説の龍宮真名です。ちなみに解説になったのはギャラがよかったです」

「なおこの放送は有料です。聞きたい方は最寄りのATMから、犬神アンダーグラウンドサーチ口座に二千円りこんでください」

「「「「なんでだよ!?!」「」「」」

最終的にツッコミでしめられた。

激闘 1

満月の明かりが広場を照らす。

向かい合うは二人の幼子。

一人は、実年齢六百歳を超える、人類を超えた最強種『ハイ・デイトワイトウォ吸血鬼真祖』。数多の二つ名を持ちその性は凶悪といわれ、史上最高の賞金額を誇った人物。エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。

対するは見た目通り、年齢は十歳。メルディアナ魔法学校を首席で卒業した天才児。△ンドゥス・マギクス魔法世界で起こった大戦終結の立役者として知られる、『英雄』ナギ・スプリングフィールドの息子。ネギ・スプリングフィールド。

最古の賞金首と、時代の英雄の激突がいま……始まる!!

「まあ、その割には周りに緊張感がなさすぎると思うのだが……」

「あ、あはははは……。す、すみません。犬神さんがこんなことにしちゃって」

「いや。ボーヤが謝る必要はない。文句は後でちゃんと犬神についておく」

「よろしくお願いします」

いまいち緊張感には欠けていたが……。

「さあて始まってもうたね、たつみー。たつみーはこの戦いどう見る？」

「マリー。釘宮とかぶるからその呼び方はやめろといっただろう……。そうだな。魔力量から行ったらほぼ互角といったところだろう。エヴァンジェリンは満月により力がまし、学園結界のダウンによって電力に変換されていた魔力も戻ってきたとはいえ、所詮はまだまだに封印状態。全快というわけではないだろうからな。まあ、それでも一般魔法使いと比べたらお話にならないような強大な魔力を保有しているわけだが……。対するネギ先生は十歳とは思えないほど強大な魔力を持っている。流石は英雄の息子。『バカ魔力』と呼ばれたサウザンドマスターの息子だといっておこうか。しかし、それでも十歳の子供の魔力だ。きちんと成長すればサウザンドマスターに勝るとも劣らないものとなるのだろうが、まだ発展途上の彼ではせいぜい現在のエヴァンジェリンと同等の魔力程度しかないといったほうがいいだろう」

「ほな、互角の戦いになるってことかいな？」

「いや。経験値の差は明白だ。ネギ先生もここ最近はかなり頑張ってきたようだが、エヴァンジェリンにはそれを超える『600年』という規格外な時間をかけて積んできた経験値がある。熱くなりさえしなければ、ネギ先生など軽くひねることができるだろう」

つまり、戦いの専門家の龍宮から見てもこの戦いは絶望的な戦いなのだろう。

「だがそれは……」

「うわ！？ 犬神君！？ いつの間にかこっちきたんや！？」

そんな辛気臭い雰囲気を醸し出す龍宮とマリーの中央に、いつの間にか犬神が出現していた。

どうやら彼も解説席で試合を観戦するつもりらしい。

「エヴァンジェリンのペースさえ乱せればネギにもまだ勝機があるということだ」

「なんな勝算でもあるん犬神君？」

「ああ……とっておきを渡してある」

フフフフフフ……。ドス黒い笑みを浮かべてほくそえむ犬神。これには、マリーだけではなく会場で解説席を見ていたほかの魔法生徒や魔法先生たちもドン引きしたという。

「それにしてもなかなかいい体をしているな龍宮とやら。僕の事務所で助手をしないか？」

「え……」

「フフ。私は高いよ？」

「あれ？ 私の衣食住がいつの間にかピンチ迎えとる!？」

ついでにマリーの雇用も危うくなっていたりするが、まあそれはどうでもいい話だろう。

…
十…
十…
…
十…
十…
…

「周りがうるさいがそろそろ始めるとしよう。まずは小手調べだ…
…。茶々丸」

「はいマスター」

解説席のうるさい声を完全に無視して（若干顔が引きつってはいるが）エヴァンジェリンは自分の従者に命令を下す。

茶々丸はその命令に呼応し、足に内蔵されたモーターやら何やらをフル回転させ、とんでもない速さでネギを肉薄する！！

だが……。

「私のこと忘れてもらっちゃ困るわね！！」

「!?!?」

今まで三白眼で祭りの様子を見ながら『これ全部ネギとおんなじ魔法使いなの？』若干のカルチャーショック（あってる？）を受けていた明日菜がだったが、これでもちよっと前からネギと同じ訓練を積んできているのだ。茶々丸の攻撃にはしっかりと反応。カードから取り出したハリセンをもって茶々丸の攻撃を迎撃した！！

「流石です。明日菜さん……でも」

振るわれるハリセンはかなりの速度。非殺傷どころか『マジでダメージはいんのこれ？』といわんばかりの武器ではあるが、振るわれた速度が速度である。魔力で強化された明日菜の膂力で発生した剛力によって振るわれたハリセンはそれなりの威力をもって茶々丸に襲い掛かった。

しかし、魔力も気も使えない茶々丸はそれを補うための『ハイパーセンサー超五感』と『古今東西の格闘術格闘術・基礎〜奥義編』のソフトがインプツ

トされている猛者である。

茶々丸は完全にノーマークだった明日菜からの攻撃にも、慌てず騒がず冷静に対処する。

訓練したとはいえ所詮は素人。威力重視のため大振りかつ、横なぎになっていたハリセンを身を低くすることで躲し、茶々丸は明日菜に向かってさらに距離を縮める。

だが……。

「フエイ……ントっ!!」

「!？」

即座にハリセンを投げ出し、カードの戻した明日菜はそこから体に重心を起用に入れかえ、明日菜に近づいていた茶々丸に痛烈な蹴りを叩き込んだ!!

「確かに私はただの素人だったけど、教えてもらったのは六重君よ。弱いわけがないでしょ!!」

「……なるほど。申し訳ありません少し見くびっていました」

身を低くしすぎていたせいで、明日菜の蹴りを物理的にかわすことが不可能になってしまった茶々丸は仕方なく明日菜の蹴りを受け止め、じぶんから後ろに跳ぶことで何とかその衝撃を回避した。

しかし、これによってふたたびネギとの距離は開く。前衛の役割である『魔法使いの詠唱の阻害』ができない。

「マスター。申し訳ありません。少し時間がかかりそうです」

「構わない。もともと、そんな安い形で決着をつけようなどとは思っていない」

エヴァはそういつと同時に無詠唱による魔法を発動、ネギに向かって魔法の射手を打ち込んだ!!

「サギタ・マギカ魔法の射手連弾氷の17矢!!」

「くっ!!明日菜さん!!」

「任せなさい!!」

しかし、ネギはいまだに詠唱を続け明日菜はそれを守るために答える。

しかし、その回答は不正解。

「なんだ……もうつわりか？」

「え？」

エヴァンジェリンがそんなことを呟き、明日菜がそれに驚きの表情を見せる。そして……。

「な!？」

「覚えておけ。サギタ・マギカ魔法の射手はある程度コントロールが効く。私ほど

熟練したものにすればお前をよけてボーヤだけ狙うことなど造作ない」

明日菜のところだけを大きく迂回し、そのすべてがネギへと直撃！あたり一帯を煙で覆い尽くした！！

「うそ！？ ネギ！！」

「ふん。つまらん」

慌てて着弾した方向へ走り出す明日菜を見て、エヴァは少しだけ鼻を鳴らす。

奴の息子ということでも少し期待をかけすぎたか……。所詮は十歳のガキということだな。

エヴァンジェリンは内心の失望を隠そうともせず、頭を振った。とんだ茶番である。犬神が何を企んでいたのかは知らないが、その策を実行する前にネギが倒れてしまつようでは……。

エヴァンジェリンがそんなことを考えながら、ネギが倒れているであろう方向に歩き始めようとした……。その時！！

「戦いの歌！！」
カントウス

「なっ！！」

ネギがエヴァの真後ろに出現していたではないか！！

「まだ「入り」が不完全でしたから……。ああいった爆風に紛れてし

か使えないんですよね。あれ」

「瞬動術か!？」

？が教えたのは格闘術のみではない。近接戦闘のスペシャリストを自負する彼はおそらくエヴァとの戦いに必要になるであろうすべての技術をネギに教え込んだ。

時間がなく、ネギも彼も仕事と授業があるため、修行内容は薄い感じになってしまったが、犬神との追いかけっこによって基礎力がつけられていたネギはその修行のすべてを吸収し消化した。

そこにはネギの天才性もかわってくるのだろうが、まあそれはいまはいいだろう。

とにかく、今のネギは近接戦闘においてはそれなりに戦えるようにはなっていたのだ!

「だからこそ、茶々丸さんを抜いてどうやってエヴァさんに近づくかが僕の課題でした。だから……非常に申し訳ないことでしたが、明日菜さんを囮にして少しスキを窺わせてもらいました」

「なるほど……。魔法の詠唱も完全なダミー……いや、わざと時間をかけて大呪文だと錯覚させた《戦いの歌》だな」

勝つために……すべてを利用する。まるで?のような戦闘スタイルにエヴァは思わず笑みを浮かべた。これはなかなか楽しめそうじゃないか。と……。

「じゃあ、エヴァンジェリンさん……いきます!」

ネギはそういつと同時に、左足を軸足に二連蹴りをエヴァに向かって放った！

「なめるな！！」

しかし、エヴァも古強者。魔法使いの間合いに入られてからの対処法などごまんと持っている。

「ふんっ！！」

「うわっ！！」

エヴァが取り出したのは一本の扇。エヴァはそれを緩やかに回転させながらネギの体を数か所強打し、その力を完全に掌握。最後にネギの体にやさしく手を添えて掌握した力を一気に上へと押し上げた！

「合気鉄扇術という。魔法がなくともこのくらいはできるよつになつてから近接戦闘を挑むべきだったなボーヤ」

華奢に見えるエヴァの体から放たれた、魔法としか思えないような圧倒的技量。それによってネギの体は天高く打ち上げられ再びエヴァとの距離が開いてしまった！

「ネギ！！」

「さませせん」

爆炎の中で実はこっそりと反転し茶々丸の足止めをしていた明日

菜だったが、ネギがあっさりと吹き飛ばされるのを見て、慌ててネギに駆け寄ろうとした。

しかし、今度は立場が逆転。ネギのもとへと向かいたい明日菜の目の前には茶々丸が立ちふさがり、明日菜の行動を阻害する。

メル・ウィルガ
「杖よ！！」

しかし、ネギは空中でも慌てず冷静に呪文を詠唱し杖を呼び出した。というか？との特訓中は時計塔よりも高くぶん投げられたこともあるのだ。この程度の高さではビビらない。そして、その杖に乗って体勢を立て直し、一気に世界樹広場から離れていく。

「明日菜さん！！ いったん体勢を立て直します。市街地に隠れてください！！」

「オッケー！！」

ネギの指示を聞いた明日菜はハリセンをカードに戻し全力で世界樹広場から離れる。むろん茶々丸やエヴァも二人を追撃しようとしたのだが、そこは大神との追いかっこでかなり鍛えられた二人だ。茶々丸やエヴァの魔法をあっさりと振り切り、月明かりのみが光源の麻帆良へと消えて行ってしまった。

「ふん。いいだろう……。狩りを楽しむのもまた一興だ。いくぞ、茶々丸」

「はい……マスター」

長い長い麻帆良の夜は、始まったばかりである。

激闘1（後書き）

ネギのスペックがアップ！！

明日菜の演技力がアップ！

エヴァの本気度がアップ！

マリーの雇用継続確率ダウン！？

激闘2 くゲルの秘策く

真つ暗な麻帆良の中を走り抜けながら、ネギ・スプリングフィールドと神楽坂明日菜はとある裏路地で合流。そのまま走り続けてエヴァンジェリンの感知式につかまらないようにしながら、今後の予定を話し合う。

「で、ネギ……。これからどうするのよ？」

「初戦で大体の実力差はわかりました。これは犬神さんが言うように相手のペースを乱したほうがいいですね」

「つまりこのままガチンコ勝負したらぼろ負けするってことね」

「オブラートに包んでほしかったですけど……。まあ、そういうことです」

そう。原作とは違いネギはエヴァンジェリンとの実力差はきちんと理解している。

何せ日頃から師事している人間があのだかみちと同格の怪物や、外道成分たつぷりのタカミチ越えの化け物である。

そんな教師たちに教えを受けているのに相手の実力を測れないようなら、ネギは天才の看板を下ろさなければならぬだろう。

そんなわけで相手のとの戦力分析を滞りなく済ませたネギは、弱者なりの勝ちを拾うために自分の手持ちの手札を思い出しながら、そのルートを考えていく。

詰将棋のように。複雑な迷路のように。難易度はかなり高いことには違いないが、犬神さんは必ず勝るといったんだ。だったらそれに至る道がどこかにあるはずだと……。

「僕たちが勝つために必要な手段は最低でも二つ。第一はエヴァンジェリンさんを弱体化させること。もともと封印によって15年間の学園生活を強いられていた彼女です。満月の夜+学園結界のダウンということが重なって擬似的に復活を果たしていますが、それも薄氷のような危うい状態での復活。何らかのイレギュラーによって、彼女の優位性が簡単に崩れる可能性があります」

「具体的な方法を上げるなら？」

「ベストなのは学園結界の復活……ですが」

「無理ね。確かにそういうものがあるってことはゲルから教えてもらったけど、どうやって発動しているのかとかは秘密にされたし……」

「ええ。ですのでこれはひとまず置いておきます。一番手っ取り早いのはエヴァさんの動揺を誘うこと……。犬神さんもこうなることは予測していたのか、僕に切り札を渡してくれました」

ネギがそういつて取り出したのは、プラチナの小さな指輪。そこには無数の文字が刻まれており、微弱な魔力を放っていた。

「……戦いに手は出さないんじゃないかなかったのあのバカ」

「準備を手伝わないとは言っていない……だそうです」

なんという屁理屈。流石は外道の犬神ゲルである。

「で、これどうやって使うの？」

「さあ？ ゲルさんが言うにはこれをたたき割れば後は勝手にエヴァンジェリンさんが動揺してくれると聞いていましたが……」

まあ、とりあえず今は犬神さんを信じてこれにかけることにしましょう。ネギの覚悟のこもった言葉に明日菜は笑いながら頷いた。もとより勝つ可能性のほうが低いのだ。多少危ない賭けでもそれに乗るしか彼らに勝ち目はないのだから……。

「続いて第二段階ですが、彼女たちが動揺し全力が出せないうちに何らかの方法で彼女たちを無力化する必要があります」

「そっちの用意は？」

「完璧です。理論上力づくでは抜け出せない方法を取りますので、うまくひっかけることができれば僕たちの勝ちは決まります」

目指すべきは麻帆良外れの湖にかけられた巨大鉄橋。そこにネギは、逆転の一手を仕組んでいた。

…
…
…
…
…
…
…
…

「ふん。私に捕捉させない気が。ガキの割には頭が回る」

？やゲルの教育がよかったのか、いまだに自分の感知式に引つかからないネギに舌を巻きながら、麻帆良上空にたたずむエヴァンジェリンは凶悪な笑みを浮かべる。

その傍らには、背中と足からバーナーを噴出させた茶々丸がハイパーセンサーなどを総動員してネギたちを搜索している。

「申し訳ありませんマスター。調査完了までしばらくかかりそうです」

「かまわん。獲物をじっくりと探すのも狩りの楽しみだ」

「ですが学園結界が……」

「あれはあと一時間くらいはもつのだろう？ 安心しろ。頭がいいとはいっても所詮は子供。それまでにはけりがつく」

「そうですか……」

エヴァンジェリンがそういって、再び感知式を麻帆良に走らせたとき、それは起こった。

パリン！！ と、ガラスが砕けるようなおとともに麻帆良上空に巨大なスクリーンが出現。何かの景色を映し始めたではないか。

「なんだ？」

「おそらく犬神様の策ではないかと……」

「ふん。ボーヤに何か持たせたか。だが、ただの映像ごときで何が……」

だが、この時エヴァンジェリンは知らなかった。覚悟が足りなかった……。いつたい自分がどれほどの外道を相手取っているのか…… 自覚していなかったのだ。

観客席でドス黒い笑みを浮かべエヴァンジェリンを嗤う犬神に、観客席にいた魔法生徒・魔法教師はドン引きする。しかし、その間にも映像は流れており……。

『危なかつたなーガキ』

そういつて、がけから落ちていたエヴァンジェリンを助けたのは長身の赤毛の男性。千の呪文の男。サウザンドマスター

「父さんじゃないですかあああああああああああああああああ
ああつー!!」

そんなネギの叫びが遠くから聞こえた気がしたが、今はそんなこととは関係ない。

続く映像。変わるシーン。泣きかけながら指輪を何とかしようとするエヴァ。ポカンと口を開けたまま固まる麻帆良魔法関係者たち。その場に訪れたカオスに若干顔をひきつらせながら、マリーは改めて自分の雇用主の外道っぷりを再確認する。

『お前……誰だ。なぜ助けた』

『さあな。くうか?』

森の中での短い会話。それがどれほど少女の心を救っただろうか。麻帆良魔法関係者たちはいつの間にかその映像に見入り、感情移入していた。まあ、もっともこの思い出を持っていた本人はいま泣きそうになっているが……。羞恥心で……。

『おい、貴様……私のものにならんか?』

再び変わるシーン。そこでエヴァンジェリンは顔を赤らめながら千の呪文の後ろを歩いそうだった。その愛らしい姿に麻帆良魔法関係者から思わずため息が漏れ（なぜか主に女性）、こんな言葉が呟かれる。

「ああ、恋したんですね。エヴァンジェリンさん」

その声がどういうわけか聞こえてしまったエヴァンジェリンは、「かはっ!？」と思わず血反吐を吐いて倒れこむ。やめてくれ……あれは一時の気の迷いだっただ。私のキャラじゃないんだ。お願いだから許して……これ以上悪の魔法使いとしてのプライドを傷つけないで……と。

しかし、映像は残酷に続いていく。

『おいおい……。もう一か月になるぜ？ 俺についてきてもいいことねーぞ。どっかいけ』

『やだ。お前がうんと言っただけで、たとえ逃げて持も、地の果てまで追ってやるぞ』

エヴァンジェリンの一途なセリフに悶える女性魔法関係者。男たちも一瞬ぼうつとしてしまったが、すぐに正気を取り戻しあわてて彼女は悪の魔法使いだと思ひ込みなおす。

「ま、まったく。悪の魔法使いが千の呪文に惚れるなんて……つりあっていないだろ?」

そしてその遺志を強固なものにするために、ぼそりと男性魔法関

係者の誰かが呟いた。しかし、

「何をおっしゃっているのですか……！ 愛に善悪は関係ありませんわ……！」

「そのとおり。いまふざけたことを言ったのは誰？ たたき切つてあげる」

高音・D・グッドマンと葛葉 刀子を筆頭に、女子から猛烈な反発を受けその意見は封殺された。外野がそんな事態になっていることも無視して、映像は続いていく。

シーンが変わり、舞台はどこかの砂浜。

『ついに追いつめたぞ千の呪文の男。この極東の島国でな』
サウザンドマスター

そう発言するエヴァンジェリンは幻術によって大人に姿を変えており、かなり色っぽい。魔法関係者男性の好感度が上がる。

そのご、二人の芝居がかった言葉の応酬が続いた後、

『従者パートナーもいない魔法使いに何ができる……！ 行くぞチャチャゼロ』

『あいさーご主人』

エヴァンジェリンは千の呪文サウザンドマスターの男にとびかった。

しかし、

『えっと……この辺だった？』

『ひ、ひいいいい！？ 私の嫌いなニンニクやネギ〜！！』

エヴァちゃんがネギ君目の敵にすんの、もしかしてネギが嫌いやからやるか？ 一人的外れな予想を立てるマリーをしり目に、映像の中の千の呪文サウザンドマスターの男は杖を使って落とし穴の中の水をかき混ぜながら高笑い。

『フフ……お前の苦手なものなどすでに調査済みよ』

強い匂いによって弱ったエヴァンジェリン。彼女は力の制御を失い思わず幻術を解いてしまった。

『ああ、ご主人の幻術がとけた！？』

『わはははは！！ 噂の吸血鬼の正体がチビのガキだと知ったらみんななんというかな？』

『やめるバカ〜っ！！』

しかし、その姿になってもいまだにんにくを増やし続ける千サウザンドマスターの呪文サウザンドマスターの男。その姿はまさに鬼畜外道である。

『ふむ。さすがは千サウザンドマスターの呪文の男。感動した』

『君はそうやるな』

その映像に感銘を受けた犬神がそんなことを呟くのを耳ざとく聞きつけ、マリーは顔に縦線を入れる。

『ひ、卑怯者！！ き、貴様千の呪文の男だろう！？ 魔法使いなら魔法で勝負しろ！！』

『ごもつとも。麻帆良魔法関係者が大きくなづく。しかし、ここでも千の呪文サウザンドマスターの男の爆弾発言。

『やなことだ。俺は本当は5、6個しか魔法を知らねーんだよ。勉強苦手だな。魔法学校も中退だ。恐れ入ったかこら！？』

不良然とした声音で、そんな誰にも自慢できないことを堂々と言い切る千の呪文サウザンドマスターの男に魔法関係者たちはカクンと口を開け絶句する。まあひとりだけ……。

「ぎやははははは！！ いいこと言っじゃねえか！！」

「ちょ、先輩！？ 何言ってんですか！？」

と、笑い声をあげたものがいたが、それは誰なのかはいわなくてもわかるだろう。

『おいサウザンドマスター！！ 私になにが嫌なんだ！？』

『だから俺はガキには興味ないつてば』

どうやら匂いにやられて思考回路がマヒしてしまっただらしい。普段は絶対言わない直球での求愛の言葉をぶつけてくるエヴァンジェリンに汗をかきながら、千の呪文サウザンドマスターの男は断りの言葉を紡ぐ。

『歳なのか！？ 歳なら百歳超えているぞ 私！！』

『じゃあオバハンだな』

『オバハンいうな　　!!』

『落ちつけよご主人』

なんかもう必死すぎるエヴァンジェリンの言葉に麻帆良魔法関係者の心が一つになる。『なんてかわいそうな……』と。ちなみにこちらのエヴァンジェリンは映像を止めるのに必死すぎとこのことには気づいていない。

『なあ、そろそろ俺を追うのはあきらめて、悪事からも足を洗ったらどうだ?』

『やだっ!!』

子供が駄々をこねるようにそう叫ぶエヴァンジェリンに「そこは、はいつていえや」とマリーは思わずツツコミを入れる。

『そーかそーか。じゃあ仕方ない。変な呪いかけて二度と悪さのできない体にしてやるぜ』

『うつ!?　　なんだこの強大な魔力は!!』

ようやく発動される千の呪文サウザンドマスターの男の魔法。しかし、それはまともな魔法ではなく子供にオシオキとして使うような魔法で……。

『ば、バカやめろ!!　　そんな力で適当な呪文使うな!!』

『確か麻帆良の爺が警備員ほしがつてたんだよね。え〜っと。マ』

ンマンテロテロ……長いなコレ?』

高まる魔力。上がるバカさ。露呈するのは千の呪文の男のいい加減な性格。

『あ、やめっ!? ひどいぞサウザンドマスター!』

『ご主人びーんち』

にんにくに囲まれ魔力も練れず、抵抗レジストができないエヴァンジェリンに千の呪文の男は容赦なく呪いをかけた。

『インフェルヌス・スコラスティクス
登校地獄!』

『いや ん!! 好きなのがいいいいいい!!』

最後に出た率直な告白に、全麻帆良が涙したという……。

…
…
…
…
…
…
…
…

映像が終わった。誰にとっても衝撃的だった映像はその場に大きな爪痕を残した。

魔法関係者の涙とか……。

ナギを知るがゆえにもう苦笑を浮かべるしかないタカミチと近右衛門とか……。

真っ白に燃え尽きてしまったエヴァンジェリンとか……。

「マスターにこんな過去があったのですね！！」とかいいながら、その映像を永久保存する茶々丸とか……。

すごく申し訳なさそうな顔で物陰からエヴァンジェリンを見つめ

るネギと明日菜とか……。

そんな中、高笑いをしている人間が一人。

むろんこれを仕組んだ、犬神ゲルである。

「ふははははははは！！　これで奴は怒りと羞恥心でまともな判断など下せまい！！　さあいまだネギ！！　そこで固まっているエターナルロリをぼこぼこにしてやれ！！」

鬼だ！？　鬼がいる！！　再び麻帆良魔法関係者の気持ちが一つになる。

ダーク・エヴァンジェル
闇の福音とかよりもこいつのほうが危険じゃね！？　とも……。

「なあ、犬神君……。いつの間にあんなにとつたん。というか私ですらあんな過去しらんかったんやけど？」

「愚問だな。ネギとの決闘が決まった時からあいつの弱みを握るために四六時中克蘭レスに見張らせていたのだ。そして、たまにあるエターナルロリがうなされると克蘭レスから報告を受けてな。うなされていた時の夢を採取させてみたのだが、案の定ビンゴだったというだけの話だ」

「犬神君。倫理観って言葉しつとる？」

「僕にとっては『金』な言葉だな」

「さよか……」

もう言葉も出ないマリーであった。

……
十……
十……
……
十……
十……
……

にげてく。チヨ一逃げてく。内心でネギにそう祈りながら天空を
荒まじい速度で飛んでいく主に茶々丸は追従するのだった。

当然、その光景をこっさり見ていたネギと明日菜もがくがくと震
えており……。

「「あわわわわわわわわわわわわわわわわわ……」」

修行中にすら見せたことがない量の冷や汗を流し、この世界の人
類ではちよつとありえない感じの顔色になりながら、真剣に命をつ
なぐために次の作戦へと移行するのだった。

激闘3 くゲルの奥の手

「リック・ラク ラ・ラック ライラック!!
魔法の射手!! 連弾・闇の29矢!!」

サギタ・マギカ セリエス オブスクリー
ウンデトリーギンギョーリトウス・オグスクリー
闇の精霊29柱!!」

「あわわわわわわわ……」

一方的に放たれる闇夜に溶け込む漆黒の弾丸。それらは隠れていないはずのネギたちをしっかりと発見・追尾し、あっさりとネギたちの居場所を使用者に告げる。ネギは魔法銃で、明日菜はハリセンで、それらの攻撃を撃ち落とし、慌てて違う場所に隠れるために移動を開始した。

状況は完全に優勢。少なくとも二人はちよつとずつ目的の場所に近づいているし、その間エヴァに発見された回数は皆無である。しかし、二人の震えは止まらない。目の前に圧倒的な恐怖の権化がいるから……。

「わるいごはいねえくがああああああ!!」

「マスター……それは違う鬼です……」

普段の愛らしさはどこえやら……。今や完全に悪鬼羅刹と化したエヴァンジェリンが、ネギたちのことを血眼で探している。

「どどどどどどどどど……どうすんのよネギ!? 確かに冷静さは失っている見ただけで、完全に違う種類の強化（狂化?）フラグ立てちゃったじゃない!?」

「そ、そんなこと僕に言われても!? 大体犬神さんがあんな切り札きるなんて思ってたいなかったですもん!? ふつう知っても切るの躊躇いますよあれ!?!」

そんな風にもめながらも二人は足を止めることはない。

そして……。

「つきました!!」

「うっね!!」

目の前にそびえたつのは巨大なレンガ造りの柱。車が通れるように設計されたそこは人が戦うには十分な広さを備えている。

麻帆良の大鉄橋。

学園都市の最端に位置するこの場所こそが、最後の決戦の場所である。

「行きますよ明日菜さん。僕たちの持てる力のすべてをここで使います」

「ええ……」

並々ならぬ覚悟を秘めた声でそう言ったネギに、明日菜はいつもの明るい雰囲気殺し、静かに頷く。

「犬神さんのために……僕たちを鍛えてくれた?さんのために……そして」

ネギがそこまで言ったとき、

「みつけたぞおおおおおおおおお！　ネギ・スプリングフィールドおおおおおおお！　おおおおお！　」

はるか遠くからエヴァンジェリンの絶叫が聞こえてきて……。

「なにより……僕たちの命のために」

「ええ……」

二人は神妙な表情を霧散させ、ちょっとだけ泣きそうな顔でそうつぶやいたという……。

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「さあ、戦いもいよいよ佳境に入ってますね！！」

「佳境というか……いろいろ壊れていないかい？」

「それは言いつこなしやでたつみ。いや、そのことに関してはホ
ンマエヴァちゃんに詫びいれなアカンとは思ってるけどもな」

世界樹広場の解説席では顔に縦線を入れたマリーと、エヴァの壊
れ具合にちよつとだけ引いている真名がそんな会話を交わしていた。

そんな彼女たちの隣では、泰然自若とした表情のゲルが座ってお
り、麻帆良の魔法関係者たちから恐怖の視線を一身に浴びている。

「何を言う安川。計画通りだ」

「いや、確かにエヴァちゃん冷静さを失つとるみたいやけど、でもあれはないやろ犬神君……。明らかに怒りくるつとるやん。狂化（確定）されとるやん。あんなん六重君でも勝てるかどうかかわからへんで」

マリーのツツコミを平然と流し、犬神は黒い笑みを浮かべる。

「なあに……。もし万が一ネギが負けるようなことになったとしても……」

犬神はさきほど克蘭レスから渡された 髑髏マークがついた
スイッチをいじりながら言葉を切った後、

「僕にはまだまだ奥の手がある」

黒い……。黒い、どす黒い笑み。見ているだけで精神汚染してしまうのではないか？ と錯覚してしまうほど黒い犬神の笑みに、会場の人々は今すぐこの場から逃げ出したい衝動に駆られたという……。

最低限の冷静さを取り戻すには十分な時間がたっている。

そのため、ネギたちが今までのように背中を向けて逃走するのではなく、こちらを向き戦意をむき出しにしてきたので、怒りに燃えるエヴァンジェリンも少し不審に思い足を止めた。

「なんだ？ もう追いかけてこはおしまいか、ボーヤ？」

「あはははは……。そ、そろそろ体力も限界ですので……。それに、逃げ切っただけではあなたは完全に負けを認めることはないでしょう？」

「ふふふ……。よくわかっているじゃないかボーヤ」

だがそれだけではあるまい。

600年の経験からくる圧倒的な戦略脳。それをフルに活用しエヴァンジェリンはネギたちがなぜここにきて戦う気になったのかを考えてみる。

初戦の手合わせはお互いの実力がどの程度化を計るため。さすがにネギごときに底を計られたということはないだろうが、今回の戦いでどの程度の力を使うのかぐらいいは見切られてしまったはずである。つまりこれは必要な戦闘。納得はできる。

では今まで逃げていたのはなぜか？ 考えるまでもなく彼我の差に気づいたからだ。初戦の場で戦いを続けていけば、まず間違いなく負けていた。だからネギたちは逃走した。これもまた納得がいく。

では、ここで戦う姿勢を見せたのは？

逃げ回っているだけで戦力が上がるわけでもないし、格闘術の切れが上がるわけでもない。むしろ麻帆良中を長時間逃げ回った彼らの体力は相当数減っているはずだ。初戦で戦ったときよりもむしろ優位性は減っているはず。それでもここで事を構える気になったということは、

「茶々丸……。気を付ける。何か罠が張ってあるかもしれん」

「はいマスター」

「「ちっ！！」」

エヴァンジェリンの言葉を聞き、ネギと明日菜は舌打ちをしながら自身に強化の魔法をかけエヴァンジェリンと茶々丸に襲い掛かった！！

「やはりそうか！！　だが甘かったな！！　あると分かった罠など最早何の役にもたたん！！」

試験管を飛ばし、あたり一帯に探知の魔法をかけたエヴァンジェリン。茶々丸はそれを守るためい鋼の体を使い明日菜とネギを迎撃する！！

しかし、

「なっ！？」

「マスター！！」

エヴァンジェリンが試験管を放ったとき、突如として魔方陣が出現しエヴァンジェリンの体に無数の光の鎖を飛ばす。

まさか自分の足元にすでに罾があつたなどとは考えておらず、油断していたエヴァンジェリンはあっさりとそれにつかまり身動きを封じられてしまった！

「バカな！？ いつの間に！！」

「事前にですよ……。もつとも速効性の罾ではなく僕が発動するタイミングを自由にできる形式の罾ですけど……！」

ネギのその言葉と同時に茶々丸の足元にも魔方陣が浮かび上がり、彼女の動きを封じる。

「なっ！？」

「ちなみにこの橋に設置してある罾の数は約七百あります」

「魔法による地雷原か！？ 貴様……いつの間にこれだけの魔方陣を！？」

「時間はたつぷりあつたんですよエヴァンジェリンさん。僕が格上のあなたに勝つために準備をする期間は」

言われてみればその通り。犬神と契約を結んだのはこの戦いのずいぶんと前。おまけに、その間ネギたちは修行にかこつけて麻帆良中を駆け回っていたのだ。小細工や罾を仕掛ける時間は確かに大量に用意されている……！！

「だがボーヤ……。これだけで私に勝つたと思うのか？」

「思いませんよ。600年生きた吸血鬼にそんな甘ったれた希望を抱くような柔な修行はされていませんから。エヴァンジェリンさんのことです。おそらく結界を破る方法ぐらいいくらでも持っているでしょう。たとえば……。茶々丸さんに科学的技術から結界を破ってもらうとか？」

ネギの予想にエヴァンジェリンと茶々丸は固まった。事実彼女たちの秘策はそれだったのだ。結界につかまった瞬間茶々丸は耳に内蔵されたアンテナをだし、結界をハッキング。それを数秒で打ち破ることができる。

「でも……。それにしたって多少の時間はかかりますよね？ だったら……。」

ネギはそういつと同時に右手を掲げてみせた。その手には膨大な魔力が収束されておりいつでも魔法の発動が可能な状態にスタンバイされている。

「な!?!」

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ
「雷の暴風……。さつき茶々丸さんと戦っている間に小声で詠唱させてもらっていました。これを発動させるのとエヴァンジェリンさんが結界から抜け出すの……。どちらが早いか言わなくてもわかりますよね？」

チエックメイト
完璧な王手。誰が考えてもこの状況からの逆転は不可能だ。

麻帆良中が、マリーが、真名が……。？でさえもネギの勝利は確定

したと思っていた。

この状況から逆転できる存在などいない。

「くくくくく……。さすがだなボーヤ」

もしそんなことができるならばそれは……

「だが……ボーヤは忘れていたようだな？」

「？」

本物の……

「私は」

化物だ……!

「くっ!？」

明日菜の悲鳴じみた叫びにネギは齒噛みしながら、魔法を打つかどうか迷った。彼はまだ10才。心優しい子供なのだ。だが、ここで撃たないとネギたちは負けエヴァンジェリン達に殺されてしまうかもしれない。だったら……。

「ためらいはしませんよ……エヴァンジェリンさん!!」

ネギは覚悟を決めた表情で手に待機させていた《雷の暴風》を解き放つ。

まるでレーザーのように伸びる雷と暴風の集合体。結界が壊れるころにはそれはエヴァンジェリンの目前へと迫っていた!! 一応ネギの手によってエヴァンジェリンを殺さないように加減されているとはいえ相手は対戦車ライフル級の威力を持つ中級呪文。食らって無事ですむはずがなかった。

このままでは直撃する!!

誰もがそう思ったその時だ!!

ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス
「闇の吹雪!!!!」

エヴァンジェリンは無造作に手をふるうことで、そこから漆黒の暴風を出現させた!!

「えっ!？」

ネギが唾然とした表情でそれを見て固まる中、エヴァンジェリン

エヴァンジェリンの呼びかけに答え顕現した光の剣。

敵に絶望を与える圧倒的な破壊力を持つその剣を見て、ネギと明日菜の顔が引きつる！！

「殺さないように加減はしてやる。下手に動くなよ……危ないからな！！」

その言葉と同時に放たれる圧倒的な破壊に、ネギと明日菜は思わず目を閉じた！！

…十…十…十…十…十…十…

「ふむ。少しいじりすぎたか」

広場でその様子を見ていた犬神は、最後にそうつぶやくと手元においてあったボタンを押した。

…
十…
十…
……………
十…
十…

「!? マスター!!」

変化に気づいたのは茶々丸だった。結界から抜け出した彼女は主の攻撃から逃れるために、バーニアを使って橋の下にある湖の上へと退避していたのだが、それに気づいた彼女は切羽詰まった声で叫びながらエヴァンジェリンへと近づいて行った!!

「なんだ……」

せつかく勝負を決めようとしているところに水を差され、若干不機嫌になるエヴァンジェリンだったが、

「なっ!?!」

彼女もすぐにそれに気づき思わず顔をゆがめてしまう!!

「バカな!? まだ復旧までの時間は三十分近くあるぞ!?!」

そう。麻帆良に電気が復活し、再びまぶしく光り輝き始めたのだ
！！

……
……
……
……
……
……

「僕は戦いに手を貸すことはないとはいったが、『メンテナンスを手伝わない』といった覚えはないぞ闇の福音」
ダーク・エヴァンジェル

そういつて『フハハハハハハ』と高笑いする犬神を見て、真剣に犬神の抹殺計画を考える麻帆良魔法関係者たち。

そう。犬神はメンテナンス部隊にクランレスを送り込み、メンテナンス作業を急ピッチで終了させ、いつでも電気が復旧させることができるように細工をしておいたのだ。

エヴァンジェリンが負けても納得できるところで電源の復旧ができるように。ネギが負けそうなときに復旧ができるように！！

「ミッションコンプリート」

最後にきらりと眼鏡を輝かせ『眠たい』といいながら事務所に帰っていく犬神を見送ったマリーたちは、

「このこと……エヴァちゃんには話せへんな」

「間違いなく戦争が起こるだろうからね……」

ハハハ。と乾いた笑みを浮かべるしかないのであった。

…
†…†…
…
†…†…

とまあ、そんなこんなで……麻帆良の電源復帰により、再度発動された学園結界によって再び魔力が封印されてしまったエヴァンジェリン。当然断罪の剣が維持できるわけもなく、手元に宿った膨大な光はプスプスと間抜けな音を立てて消えてしまい、あたり一帯に沈黙がおちた。

固まる明日菜とネギに、呆然とするエヴァンジェリン。慌てて戻

つてきて自分のマスターの手当をしに行く茶々丸。

あまりにあっけない最後。というか、もはや最後とっていいのかわからないくらい気まずい最期に、明日菜とネギは顔を見合わせ
て……。

「え、えっと……そういう時もありますよ」

「そ、そうそう。たまたま運が悪かったただけだって……。あのまま
続いていたらエヴァちゃん絶対に勝ってたわよ」

とりあえず、ショックのあまり固まっているエヴァンジェリンを
励ましてみた。

とうぜん敵にそんなことをされてしまい、プライドの高いエヴァ
ンジェリンが耐えられるわけもなく……。

「フフフフ……死のう」

「落ち着いてくださいマスター!!!」

橋の欄干へと駆け寄り湖に飛び降りようとするエヴァンジェリン
を茶々丸は慌てて止め、それに気づいた明日菜とネギもそれに急い
で協力する!!!

「笑えよ茶々丸!!! あんなに自信たっぷり勝利宣言をした私を
笑えよ!!! 最終的に無様に負けてしまった私を笑えよ!!! そし
てその手を離せバカども!!! 私はもう生きていける自信がないん
だ!!!」

「大丈夫ですよマスター！！ 生きていたらきつといいことありますって！！」

「そ、そうですよエヴァンジェリンさん！！ 僕の血ぐらいなら死なない程度にあげますから！！」

「ほ、ほらネギもこういつているんだし！！ それにエヴァちゃんさっきのかっこよかつたって！！」

「うわああああああああああああああああああああああああああああん！！」

もう子供のように泣きじゃくるエヴァンジェリンに様子に、全麻帆良が泣いたという……。

こうして、麻帆良全体を騒がせた吸血鬼騒動は、最後の最後まである外道の少年探偵の手に踊らされる形で幕を下ろしたのだった。

激闘3 くゲルの奥の手（後書き）

はい……。というわけで終了しました吸血鬼編。

納得いかないという方も多数おられるでしょうが……。まあ、主人公は《あの》犬神なので許してください。

今回は吸血鬼編の後始末と『ジヨニーとゆかいな仲間たち』の短編をやりたいと思います。

ごうごきたうい。

決闘の後始末

エヴァンジェリンとネギの決闘が終わった翌日。

「エヴァちゃん！ 飴食べる？」

「エヴァンジェリン……たまには授業に出るよ」

「エヴァンジェリンさん？ お体大丈夫ですか？」

「昨日の決闘で疲れたらどう？ お菓子買ってあげよう」

「……」

昨日の決闘についての清算を行うために麻帆良を歩いていたエヴァンジェリンに向かって、無数の好意的な声が飛ぶ。

そのすべてが、今までエヴァンジェリンを毛嫌いしていた魔法先生魔法生徒からだった。

「なんだ？」

両手いっぱい買い与えられたお菓子を茶々丸と分担して持ちつつ、エヴァンジェリンはそうつぶやく。

「なんで今日は麻帆良の連中が死ぬほどやさしい！？」

な、何か裏があるのか！？ 昨日以上の辱めを私に受けさせるための犬神の策か！？

この時、生まれてこのかた感じたことのないほどの恐怖をエヴァンジェリンは感じていたという……。

ちなみにこの話を聞いたマリーが「犬神君の策が別のところではない結果をもたらしたとる!?」と愕然としつつ、「他人の好意は素直に受け取らなあかんよ」とエヴァをいさめている光景が犬神アンダーグラウンドサーチで見られた。

…†…†……………†…†…

「じゃ、じゃあ……おねがいします!」

「ああ、そう緊張するなぼーや。本当にちょっとだけだ。ちょっとだけだから」

「え、エヴァちゃん!?　なんか笑顔が怖いで!」

犬神アンダーグラウンドサーチで、ネギが突き出した腕をエヴァがかみつけている。

いわゆる献血。魔力補給。

エヴァンジェリンがかけられた封印を解くために、死なない程度になら血ぐらいあげますよと了承したネギ。そして今日、この日、エヴァに血を吸わせる約束になっていたのだ。そして、

「では……ちゅう〜」

マリーと明日菜監視の下、それは行われる。

「ちゅう……」

「ちゅう〜」

「……」

「~~~~~」

「ガタガタ!!」

「ちょ、エヴァンジェリンさん!? ネギがものすごい顔しながら、真っ白になっていつているけど!?!?」

「はっ!? しまった!! あまりにおいしすぎてつい飲みすぎてしまった!?!」

「ちょっとおおおおおおおおお!?!」

その後、数分間……ネギは『献血怖い献血怖い献血怖い献血怖い』とぶるぶる震えていたらしい。ちなみに、この先一生涯、彼が献血を行うことはなかったという……。

まあ、封印は無事に少しだけ解け『今回卒業すれば解ける』『修学旅行には行ける』という嬉しい特典が付き、マリーとエヴァが笑いあったので彼の犠牲もあながち無駄ではなかったのだろう。

ちなみに、ネギを看病している間にふと何かを思いついたといった表情になったマリーが一言、

「なあ? 犬神君の血ってどんな味がする思う?」

「さて、今回の報酬についてですが……」

「あんなことをしておいて、まだ報酬がほしいというのかこの外道が!!」

ネギの血によって、無事に封印が若干緩んだエヴァは犬神に払う報酬の相談をしていた。

「ほう？　つまり払わないと？」

「あたりまえだ!!　ひ、人の過去をあんなに大々的にばらしおつて……恥を知れ!!」

まあ、その怒りはごもつともやけどエヴァちゃん……犬神君に恥なんて言葉は通じひんよ。

いろいろあきらめきつっているマリィは、内心でそう考えながら犬神がどう出るのかと、そちらのほうを見つめる。

すると彼は、視線に殺気を込めてひとこと、

「お前もうちのエコ発電に協力するか？」

とだけつぶやいた。

「はらわさせていただきます!!」

「エヴァちゃん!? うちの電気関係ほんまどうなっとんの!?!」

マリーがこの事務所での生活に、初めて恐怖をもった瞬間であった。

決闘の後始末（後書き）

というわけでショートストーリーに納めてみました！！

ナギ・スプリングフィールドについての情報はまたの機会に

次回！！ ダイナマイト刑事^{バカ}……もとい教師^{バカ}のお話。

ダイナマイトバカの日常

「きゃ〜！！ 乱闘よぉ〜！！」

その日の麻帆良は騒がしかった。

女子校エリアの大通りで、武道関係部活どうしの乱闘が発生していたからだ。

「古菲部長と戦うのは俺たち柔道部だ！！」

「フザケンナ！！ 俺たちボクシング部のほうがずっと前から古菲部長と戦う約束していたんだよ！！」

喧嘩の理由は見ての通り、中国武術研究会の古菲と戦うため。

別段珍しくもない。このエリアではよく起きていたこと。古菲はありとあらゆる格闘家を相手取っても平然と叩き伏せる猛者であり、そんな彼女の強さにあこがれて、武道関係部活のメンバーがこぞって対戦を申し込むのだ。

当然彼女の体は一つしかないため、その部活の順番が巡ってくるまでにはかなりの時間がかかる。そのため、こうして順番争いを巡って部活同士の乱闘が常日頃から起こっているのだが、

「た、大変！！ 広域指導員の先生を呼ばないと」

一人の女子生徒がそういって、駆け出しかけたときそれは現れた。

「かつ。バカガキどもが……俺が久々にこつちに足を延ばした時に乱闘とは……思い知らせてほしいらしいな」

凶悪な笑みを口元に浮かべ、鳥のとさかのようにセットされた髪を揺らしながら現れたのは、二メートルはあるであろう巨大で細身な……しかし、鋼のような筋肉で包まれた男。

目には眼帯。片手に拳銃。着ている服は、前のあいた黒の皮ジャンとレザーパンツ。

明らかに『何処の黒社会？』といわれかねない格好をした男。そんな彼の後ろには、髪を七三分けにした、メガネをかけている真面目そうな男が立っていて、

「あ、ちよつと……ジョニー先輩!？」

慌てて静止をかけようとしていたが、

「この俺の射程距離てのよとくとこ内で罪を犯したことを……」

男はそんなこと一切気にせずに、

「後悔……したくてもできないようにしてやる」

「ぐはっ!？」

物理的ダメージを伴った凶悪な言葉を吐いた。その言葉を聞いて、七三分けの男の胃に荒まじいダメージが入り『あ、また僕が命がけでとめないといけないんだ……』とちよつとだけ絶望する。

「そこまでだガキども」

「なんだこらあああああ!?!」

そんな七三分けを微塵も気にすることもなく、眼帯男は乱闘に悠然と近づく。そんな彼に話しかけられ、乱闘をして気が立っていた少年(?)たちは殺気だった目を眼帯男に向けた!!

しかし、

「なんだとは、なんだこら? まったく見て分かんとは救いがたきバカどもめ」

眼帯男は凶悪な笑みを浮かべながら、何のためらいもなく、到底人間が扱いきれそうもない大口徑拳銃を少年(?)達に向ける!!

「広域指導員だ。つーわけで、死ね!!」

「死!?! はあ!?!」

「ちよっ!?! 先輩ストおおおおおッブ!!」

「え? こ、広域指導員が『死ね』!?!」

七三の静止の声もむなしく、近くで乱闘を見ていた生徒たちの驚愕の顔も気にせず、眼帯男は拳銃をぶっ放しその場を阿鼻叫喚の地獄に叩き込む。

これが、麻帆良学園名物、最恐の広域指導員……『クレイジージョニー』と『苦勞人レイジー』の日常である。

「車両火災2。重軽傷者20。器物・建築物破壊……多数」

……
十……
十……
十……
十……
十……
十……

麻帆良学園初等部職員室。

そこには、グラサンをかけ、くわえ煙草をしたスキンヘッドの学年主任の前に立たされていているジヨニーとレイジーがいた。

今学園主任が読んでいるのは『今回の』ジヨニーの指導活動によって発生した被害内容である。

「主犯格である乱闘をしていた生徒たちは、それぞれとりかえしのつかない精神的なトラウマを植え付けつつ無事確保か……つたく。また派手にやりやがったな。おかげでスクープだ。明日にも報道部の連中がお前らのことをすっぱ抜くだろうよ」

学園長がこの世の生物とは思えない顔色してたぞ？ まあ、もとより人間離れしているビジュアルではあるけど……。と、かなり失礼なことを言いつつ学年主任はレイジーたちを睨みつけた。

「で、始末書……書いてきたか」

「おつよ」

そんな状況であるのに、何故かふんぞりかえりながら懐に手を入れるジヨニー。そんな彼を、レイジーはちょっと顔色を悪くしながら見つめていた。

「ほれ」

そして、ジヨニーが取り出した始末書には、

『バカガキ複数……殺し損ねた。次は確実に殺す　　ジヨニー & レイジー』

と、とんでもない内容が書かれた上に署名捺印が押されていて……。

学園主任は、しばらくの間、それを鋭い目で見つめた後、

「よし」

と、軽い声で自分の机にしまった。

「よし!?! あれで!?!」

愕然とするレイジーをしり目に、学園主任……通称・主任はにやりと笑いながらふんぞり返っているジヨニーを見つめた。

「それにしても……お前は相変わらず大馬鹿野郎だな。流石はダイナマイト」

「あん?」

主任の言葉に、ジヨニーが片眉を上げるが、

「だが……そんな馬鹿は嫌いじゃないぜ」

主任のその言葉を聞き、ジヨニーは満足げに笑みを浮かべ、

「へっ……。いきなり何言ってやがるオッサン。禿るぞ」

「へへへ。何となくだ気にすんな。あと俺は剃ってるだけだ、殺す

ぞ
」

と、恥ずかしそうに笑いながらお互いのことをけなしあう。

それはまるで、大勢に歯向かい、我が道を行き、犯人を捕まえようとする刑事たちのような……。そんないい空気を醸し出していて

……

「え？ 何この空気？ 類友？」

思わずレイジーにそうつぶやかせた。ちなみに……彼らがやったことは、大勢には向かう以前にただの犯罪である。もう、麻帆良にいなかったら懲役うん十年といわれかねないほどの……。

「つて、主任！！ ここは思いつきり説教するところじゃないんですか！！ なにわけのわからん物わりのいい上司みたいな笑み浮かべてんですか！！」

「うっせえな〜レイジー。大声出すなよ」

「出しますよ！！ 始末書とか何か根本的に間違っていますもの！！」

ギャンギャン噛みついてくるレイジーに、立ち上がった主任は彼の肩を抱き込み話しかける。

「まあまあ、落ち着けよレイジー。ここだけの話な……」

そして、グラスンを光らせながら一言。

「おれ『なあなあ』とか『グレーゾーン』とか『玉虫色』って言葉が大好きなのよ。適当に生きようぜ」

「尊敬させてくれませんか主任？」

レイジーの皮肉もなんのその。主任はにやにや笑いながらレイジーの肩をポンとたたく。

「まあ、実際あいつと組んで三か月以上もった広域指導員はお前が初めてなんだ。今回は犯人グループに大した被害も出ていないみたいだし……」

「めっちゃくちゃトラウマ植えつけていますけど、それは大した被害じゃないんですか？」

「まあ、そんなことはさておきだ……頑張っているお前にご褒美をやる。新しいニックネームだ！」

「ニックネーム？ いりませんよそんなもの」

何やらやたらとハイテンションにそんなことを言ってくる主任に、レイジーは少し警戒の表情を浮かべた。こういう主任は、たいてい、ろくでもないことを考えている。

「何警戒してんだよ。今回はマジだって。お前の新しいニックネームは……ゴクウだ！」

「なんでそこでゴクウなんですか？」

「何言つてんだよ!! 超格好いいぜゴクウ!! 元氣玉とか打てるかもよ? ほら、ともに叫ぼう!! 『オッス!! おらマチヤアキ!!』」

「ま、まっちゃ!?!」

結局主任のペースに流されてしまったレイジーは、大きくため息をつきながら肩をすくめる。

「もういいですよ……色々このままで。呼び方とかも……」

「おっ? そうか? 悪いな!! じゃあこれからも頼むぜ……」

そして、主任は再びレイジーと肩を組み……

「御供?」

「!?!」

なにやらニュアンスを変えてレイジーのあだ名を呟いた。

それを目ざとく察知したレイジーは

「今あだ名違いました!! 人身御供のほうでした!! やっぱ僕は生贄ですか!!」

と叫びながら主任を怒鳴りつけたが、

「はははははははは……!」

「俺は……広域指導員だ」

「そうですね……残念なことに」

「つまり……俺が麻帆良での正義だ!!」

「あなたに関しては首肯しかねます」

「しろよてめ？ ぶつとばすぞ？」

若干そんな感じにもめつつも、ジョニーは主張をやめない。

「つまり……俺の弾丸は正義の弾丸!! 悪人にしか当たらない正義の弾丸だ!! つまり……当たった奴はすべて悪人だ!!」

「はああああああああ……」

ジョニーの主張に、レイジーは大きくため息をつきながら一言、

「なわきやないでしょうがあああああああ!!」

「ごもつとも……」。

まあ、ジョニーの主張もあながち間違っではないのだが……。確かに、ジョニーの拳銃にはジョニー我流の魔法が組み込まれており標的をホーミングする機能はついている。まあ、あくまで我流なので精密さにはやや欠けるうえに、悪人限定で飛んでいくなんて高度な機能は組み込まれてはいないが……。

「大体出てんじゃないですか被害者!! 無実の一般人に重軽傷者

が20名!!」

「発覚していないだけで無実とは限らん。つーか直撃はしてなかっただろうが」

「巻き添え食らわせたらそんなこと関係ないでしょう!! 車両火災だって先輩が打った球がタンクに引火して、ごぼっ!? げぼっ!!」

どうやら興奮しすぎたらしい。むせかえってしまうレイジーに、温かいお茶が差し出される。

「レイジーさん。落ち着いてください。まずお茶を飲んで。ジヨニーさんに挑むなら体制を整えてからでない」と

「ああ、ありがとうございます。ももさん」

そこに立っていたのは金髪おさげの新任教師。レイジーが一目ぼれをし現在猛烈アタック中の可愛い系の女教師・ももだった。

「ああ……お茶おいしい。おちつく」

「いちいちじじむさいわね」

「リリイさん……。お茶ぐらいスキに飲ませてあげましょっよ」

「ありがとうももちゃん!! 僕の味方は君だけだ!! というわけ、週末あいてる?」

「うん。あいてない?」

しかし、意外と言うことははっきりと言う性質たちのようで、レイジ
ーのお誘いはあえなく玉砕する。

「だせつ。ふられてやんの。『あいてる？』『開いてない？』。ぷ
ぷっ………かわいちょっ」

「ちょ、だまっってください!!」

そんなレイジーにジョニーは明らかな嘲笑を浮かべ、

「記録更新22連敗（継続中）。状況と勢いに乗せてさりげなさを
装ってみたものの、あえなく玉砕したことをここに記す」

「記さないでくださいよそんなこと!!」

リリイはノートを取出しレイジーの敗北記録に追記を加える。何
とも性質の悪い先輩たちだった。

「しゅにゅん。また怪盗スパルタン？から挑戦状だぞっ」

そんな風に仲良く(?)職員室の面々がもめていたときだった。

特徴的なアフロ部屋をした小太りの男……初等部数学教師・ボブ
が『S6』と角ばった字で書かれた手紙を持ってきたのは……。

その言葉を聞くのと同時に、職員室に緊張が……

「えっまじでっ。めんどうな。学園長に丸投げしておけ」

具体的(?)な強さ　↳ラカン表に準拠します

「前から思っていたんですけど……犬神さんってどの程度強いんですか？」

「ん？　いきなりどうした野菜？」

この物語は、ネギのちょっとした疑問から始まった。

時刻は日曜の夕刻。黄昏時。夕日に染まった麻帆良の整った街並みの中、犬神アンダーグラウンドサーチの面々……犬神、マリー、ネギ、ヒメが猫が入ったケースをそれぞれ一個ずつ持ちながら家路についていた。

いつものように大富豪の家から逃げ出した猫を捕獲し、犬神が黒い笑顔で今日の報酬の時を考えている時、マリー・ヒメと協力し、猫の捕獲に尽力したネギがそうつぶやいたのだ。

「犬神君のつよさ……めちやくちや強いよ？　犬神君」

「いや、それはよくわかってるけど……でも僕犬神さんが戦っているところ見たことないし……やっぱり強さの実感が少ないというか……」

ネギ自身犬神がめちやくちや強いのは十二分に承知している。案だけ滅茶苦茶なことをやっつけていても、あのエヴァンジェリンが、魔力復活まで手を出すことはないと言明し、麻帆良の優秀な魔法先生たちが手をこまねいているのだ。

つまり、それだけの実力者であっても不用意に手を出すことは憚れる相手ということなのだろう。

だが、ネギ自身その犬神の強さを見たことがないのだ。明日菜はいちど犬神とオカマ組長の戦闘を見ているが、ネギはその場になかった。しかも、あの時ですら犬神は本気を出していない。

本気の犬神の強さはいまのところ誰も知らないのだ……。

そう、犬神とスパルタン？の戦闘を見ている本家犬神アンダーグラウンドサーチ以外の面々は。

「ふむ……お前の疑問に答えるのははなはだ面倒だな野菜。正直答える気すら失せる」

「え？ どうしてですか？」

「だってそうだろう？」

犬神はそういってメガネを光らせながら、諭すようにネギにいった。

「強さなんてものはいろいろある。賢さ、暴力、耐久力、魔力、気力、筋力、戦闘力、過負荷……。千差万別十人十色だ」

「犬神君……原作的にも雑誌的にも入ってたらアカンもんが入ってたような気がすんねんけど」

ジャンプとガンガンに怒られんで？

マリーのツツコミはきれいに無視して、犬神は話を続ける。

「そんな中であるいつて飲んの強さを計ろうだなんておこがましいことだとは思わんか？ くだらないことだとは思わんか？ 強さなんてものはその時の状況によって変動するものだ」

「犬神君は金がらみやと界王拳使えるさかいな」

「まあつまりはそういうことだ。ということでお前みたいの僕の恒久的実力を聞こうとすることはひどく無意味ということだ。それに……」

犬神はそこで言葉を切ると、メガネをきらりと輝かせて一言

「僕は……お金さえ稼げればそれでいい！！ 強さなんて知ったことか……！！」

「「力強い名言！？」」

くわっ！？ つと、雰囲気爆発させながらそう言い切る犬神のある意味名言（迷）にマリーとネギは同時にツツコミを入れた。何気に息の合ってきた二人。犬神のネギツツコミ化計画は着実に進行しているようだ。

「でも……」

「まあ、どうしてもというのなら僕の強さを図ったなどとぬかしていたバカの言を借りて教えてやるが……」

あくまで食い下がろうとするネギに、犬神はめんどくさそうにた

「いやわからんて」

「ネギ君。関西弁になつとんで？」

その翌日。授業が終わりお昼休みとなった教室でマリーと明日菜、ネギとエヴァンジェリンが屋上でシートを引きながら昼食をとっていた。

話題は、昨日の犬神の強さについてである。

「た、確かにゲルが強いのは知っているけど……イージス艦7隻は信じがたいわね」

「そうか？ ムンドゥス・マギクス 魔法世界のそこそこの猛者なら確かにイージス艦を単騎で複数沈めることぐらいはできるぞ？」

「マジですか!?!?」

エヴァの信じられない発言にスワット驚くネギと明日菜。マリーは実際に父親がイージス艦を沈めるところを見たことがあるのでそれほど驚くことはなかった。

「でも確かに気になるっちゃ気になるわな。私も犬神君が強いのはしつとるけど、全力全快は見たことないし……。でも犬神君がそれなりの力を出して戦うことなんてそうあらへんし……」

「何を言っているマリー。今日あいつの強さの片鱗を見ることがで

きるかもしれないぞ？」

ネギの質問に答えてやりたいと思いつながら、それがどれだけ難しいか知っているマリーは《うん》と腕を組んでうめき声を上げるが、エヴァはニヤツと笑いながらそれが存外簡単に解決することを教える。

「え？　なんでよ？」

「昨日麻帆良に送りつけられたんだよ……」

エヴァはそういいながら、一枚の封筒を取り出した。そこには角ばった文字で『S6』とかかれた特徴的なマークが刻み込まれており……。

この麻帆良で　連敗中とはいえ　高畑やエヴァを除くイレギ
ユラー以外で唯一犬神とガチンコ勝負ができる男、

「スパルタン？　からの予告状が」

今宵の麻帆良は……嵐の到来が予想される。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

後日談

「ところでエヴァちゃん。魔法先生しか持ってへんはずの？の予告状をなんでエヴァちゃんが持つとるん？」

「……」

「エヴァちゃん？」

「マスターは学園長室からこれをパクってきたのです」

「ちょ、茶々丸!?! 言っなど言ったるっが!! はっ!?!」

「エゝヴァゝチャゝン?」

ちなみに?の強さは?

「え? イージス艦6・5隻ぐらいやけど?」

……だからなんでイージス艦?

「きさまの強さなど12000Kコンで十分だ」

「銀魂!? それもただのコンブやんけ!?!」

レッツ・パーティー！！

『犬神君……キャラクター言わせたるさかいな！！ PS・今日図書館の魔導書一冊適当にパクらさせてもらいます』

何とも力強い文字で書かれたその予告状を読んだあと、ネギは大きく息をすいこんで、

「PSと本文、逆これ！！」

「いまさらやん」

「ね〜」

絶叫するネギの隣ではマリーと姫がのんびりとお茶を飲んでいた。

場所は犬神アンダーグラウンドサーチ。久しぶりに届けられた？からの予告状をネギが見聞していたところである。

「それにしても今回はえらい間が開いたな〜」

「ふん……おおかた野菜の教育に夢中すぎて忘れていたんだろう」

「い、いくら師匠でもそんなことはないと思うんですけど……」

鼻を鳴らしながら、興味がないといわんばかりに冷蔵庫に向かう犬神にひきつった笑みを浮かべてネギがフォローを入れるが、

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「ふえっくしー!!」

「うわ、どうしたんだい六重!!
汚いな!!」

「いや……今誰かに凶星つかれた気がしてん……」

……
……
……
……
……
……

そんな会話を帰宅途中の男子中学生たちが交わしているとはつゆ知らず、ネギはこの予告状どうしますといわんばかりに犬神に掲げて、

「まあ、犬神さんのことでしょうか……こんなただ働きはしないとは思いますが」

ここ数か月ですっかりと犬神の性格になれたネギ。答えは聞くまでもないですね。といわんばかりの表情になりながら、その予告状をシュレッダーにかけようとした。

そのとき――！

「何を言っている野菜？」

「え？」

瞬間。冷蔵庫の前から瞬間移動したとしか思えないような速さで移動したゲルが、いつの間にかネギの真横に立っていた――！

その手には、二本の指に挟まれひらひらとはためく予告状。

「この僕を名指しにした挑戦状……」

そして、犬神はいつになくクールな笑みを浮かべながら、ぎゅつと予告状を握りつぶしながら、不敵な笑みを浮かべて言い切った！

「受けなければ……失礼にあたるだろう――！」

「!?!」

久しぶりにかっこいい犬神の言葉。しかし、ネギはもう感動したりはしない!!

だってありえないから。ゲルがただ働きとかありえないから!!
いじめっ子に人形を取られて泣いていた女の子に、なけなしのお金を渡されて「人形を取り返して?」と涙目で依頼されても「断る貧乏人」とか言っちゃうクサレ外道なのだから!!

そんなゲルが……いくら挑戦状といってもただで動くことなんてないのだから!!

「きよ……今日は地球最後の日だったり……へブヒ!?!」

顔に縦線をいっぱい入れながら覚悟を決めた雰囲気、恐れ戦くネギ。その脳天を拳骨で変形させたあと、犬神は平然とした表情で、

「依頼を受諾した。安川……野菜と助手の助手を連れていつものポイントで用意をしておけ」

「あいあいさ」

そういつて部屋を出ていく、犬神を横目に見ながら、まるでどこかの怪獣映画に出てきそうな形に変形したネギの頭を元に戻しつつ、マリーはひきつった笑みを浮かべるのだった。

…
十…
十…
…
…
十…
十…
…

時刻は午後1時。

草木も眠る丑三つ時……というわけではないが、一般人なら大抵寝てんじゃねーの？ といえるそれなりに遅い時間である。

そんななか、やたらと派手にライトアップされている建物が一つ。

麻帆良学園都市名物……図書館島。

今夜スパルタン？が魔導書を盗みに来るということで、現在図書館島には魔法生徒・先生による厳戒態勢が敷かれているのだ。

しかし、ネギやマリーはそこにはいない。

彼らがいる場所は図書館島からはるか離れた、いつぞやの時計塔。

彼らはその屋根に座りながら、厳戒態勢になっている図書館島を見下ろしているのだ。

「犬神さん……こんな離れたところにいて大丈夫なんですか？ 師匠との決闘はうけられたんでしょう？」

ネギは？からの予告状をポイッとその辺に捨てながら、マリーたちを背を向けるように立っていた犬神にそう問いかける。

「問題ない」

「いや……でも」

「奴の目的は僕との決闘だ。魔導書の窃盗を防ぐのは学園の魔法使いたちの仕事。が、奴らは確実に逃げられるだろう。僕は魔法先生や生徒たちから逃げてきた？を捕まえるだけでいい」

「逃げられるのは確定なんですな」

「基本バカの集まりだからな」

「きよ、教師をしている方もいるんですからそんなことはないと思
い……」

と、そこでネギの頭をよぎったのは初等部教師をしているという
あのダイナマイトな危ない刑事^{デカ}。もとい、教師^{バカ}。

慌てて双眼鏡で図書館島のほうを見てみると、そこには安全装置
を外した大口径銃を片手にうるつく、眼帯をつけた危ない男が立っ
ていて……。

「ああ……納得しました」

「ネギ君。それ小学生がする顔とちゃうで？」

色々と達観してしまった表情で、目を細めるネギにマリーは冷や
汗をかきながらツツコミを入れた。

「でも……？がこつちにくる確率はかなり低い。私がパツと見ただ
けでも魔法先生たちから逃げきれぬ経路は738浮かぶよ？」

「うん？ 姫ちゃんが？と犬神君との戦いみんなのはじめてやった？」

「まともに戦っているのは見たことがない」

姫の言葉に、そうやったか？とうなづきながら、マリーは犬神の
代わりに説明を開始した。

「あのな……？は犬神君のことを意識しすぎとるやんか？」

「はい」

それは自他ともに認めるところだったのか、姫とネギは迷うことなく首肯する。それを見て『六重君ホンマわかりやすいもんな』とちよつとだけつつろな笑みを浮かべながら、マリーは説明を続けた。

「せやから？は必ず私たちところに来る」

「どうしてですか？ 来たら負ける可能性があるのに……」

「そんな危ない橋を渡るの？ 理解に苦しむ」

「そら」

マリーが二人の質問に答えようとした時だった。

「俺が怪盗やからにきまつとるやろ？」

瞬間、何かがあともない勢いで時計塔前の広場に直撃した！！

まるで大砲の直撃を受けたかのように、ひび割れ土煙を上げる石畳。その中央に立つのは登場は本当にお久しぶりだった、

流線型に逆立った金髪に、風もないのになびくマフラー。そして、素顔を隠す紅い仮面。

明らかに悪目立ちしまくりな、悪趣味な格好をした麻帆良裏名物……怪盗スパルタン?!?!

「そこに壁あらば……あえて、挑まねばなるまい！」

「ふん……。下らん。再び僕の糧となれ」

麻帆良体術最強の化け物と、化け物に育てられた次代の英雄の資質を持つ怪盗が、今……激突する！！

犬神ゲルが強い理由……問題提起編

「いや……というかさあ少年探偵」

そして、加齢に激しく登場を決めたスパルタン？は、額に手を当てた後一言、

「こいや現場に！！ 教師と三つ巴とかこう……なんかそういう口マンみたいなんがあるやろうが！！」

おっしやる通りで……と、？の言葉にネギとマリーは顔を引きつらせる。

怪盗本人がそういうこと言うのはなんだが、セオリーを破ったのは犬神なので何も言い返せないのだ。

「ところでわが弟子は何度こんなところにおるんや？ 単騎で俺と遣り合おうやなんて百年早いぞ？」

「いえ……今回は師匠と犬神さんの戦いを見学しようかなって」

「ほっ……」

ネギのその言葉に、？は少しだけ目を細めて犬神に視線を戻す。

「こら……ええ加減な戦いはできひんな犬神君。チヨイ今夜はガチデいくぞ？」

「かまわん。どちらにしる結果は変わらんからな」

「はっは〜ん。ゆうてくれるやんか？　せやけど今夜の俺様は一味違うんやで犬神君。今夜勝つんはこの俺や」

瞬間、？とゲルの姿がその場から幻のように掻き消えた！！

「え！？　師匠とゲルさんはどこに」

「どこを見ているボーヤ。むこうだ」

突然二人が消えてしまったのを見て、慌てふためくネギに突然声がかけられる。

「あれ？　エヴァちゃんも見に来たん？」

突如として聞き覚えのある声が聞こえてきてさらに慌てるネギとちがい、はマリーはその声の出どころを瞬時に聞き当て、空に目を向ける。

そこにはよそいう通り黒いマントを羽織った金髪エターナルロリ吸血鬼……エヴァンジェリンが茶々丸を伴って浮遊していた。

「私だけではないぞ？」

エヴァンジェリンが指差した先には、長大な野太刀を伴った少女とライフルのスコープを除き？とゲルの戦いを観戦している少女の二人組が近くの建物に立っついていて、

「あ、あれ！！　うちのクラスの出席番号15番と18番の桜咲きさんと龍宮さん！？」

「もとよりあいつらは裏の関係者兼実力者だからな。おおかたゲルと?という好カードの戦いの解析をして自分の血肉にしたいんだろ」

「あの二人が来たってことは古菲と楓も嗅ぎ付けとるんちゃうん？」

「古菲は何となく悟っているようだったが、あいつは一般人だからな。認識阻害の結界は越えられまいよ。楓は半分こつちに首を突っ込んでいるが、麻帆良の結界を抜くにはまだ至っていないからこつちに来るのは無理だろうな」

マリーとエヴァンジェリンの口からポンポン明かされてしまう自分のクラスの重大機密に、『あわわわわわ……』恐れ戦きながら、ネギはエヴァンジェリンがさした方向を見つめてみる。

「あー!!」

「いた……」

そして、ネギが驚きの声を上げると同時に同じタイミングで二人を補足した姫がポツリとつぶやく。

彼らが見た先では、さまざまな建物の屋根に出現と消失を繰り返しながらとんでもない勢いで移動をしているゲルと?。

「瞬動術の連続使用……。あんなに近くにいたのに入りも抜きもまったくわからないなんて……」

「まあ、あの二人は近接戦闘のエキスパートだからな。たかだか数

日前に瞬動を完成させたボーヤでは捕捉は困難だろう」

私が解説をしてやる。

そういつてエヴァンジェリンはマリーたちの隣に降りてきて、小さな魔法円を作り出した。

そこには犬神と？の姿が鮮明に写しだされているが、速さだけは現実と全く同じという奇妙な映像が映っていて、

「ボーヤの足りない動体視力を補うようにせつていした遠視魔法だ。これで奴らの戦いを詳細に見ることができるようだろう」

「あ、ありがとうございます！ あれ、でもマリーさんと姫ちゃんは見えないんですか？」

「ああ……わたしいつつもあの二人の戦闘みとるから慣れとんねん。克蘭レスさんとの訓練もあのくらいでやるし、氣い使わんでええで？」

「帝国の模擬戦はあれの三倍で行う。暗殺者たるもの速さが命だから」

二人が地味に自分よりも優秀であることを悟ったネギは、ちょっとだけへこみながら二人の戦いの観戦に戻るのだった。

かもしれないが、実際は違う。実は？のほづが若干遅い。

その理由は彼の背中にあつて……、

『荷物重つ……。調子に乗って盗みすぎた』

もう『サンタクロースもびっくり』といわんばかりに膨れ上がった袋が、背中でピョンピョンとび跳ねるせいで、？がいつものスピードを出せていないのだ。当然その中は麻帆良学園図書館島からパクってきた分厚い魔導書の数々。

その重さも伴っているせいか、現在？右派大幅に速度を減少。正直逃げ切るにはかなり厳しい速度にまで自身の速度を落ち込ませているのだ。

「返すか？ 土産が重そうだが？」

「!?!？」

その時、？の内心を読み取りでもしたのか、？の横に並ぶまでに追いついた犬神がそんなことを囁く。

「あほか!! 獲物はゲットかつ君から逃げきつてこそその怪盗や!! この程度ハンデのうちやで!!」

カソクソーチ!! えらく古い名前の技名を叫びながらさらなる加速をし、すぐに減速する?。無理しまくっているのがスケスケだった。

「ふむ……。貴様に足りないもの、それは……」

その時、犬神が信じられない言葉を呟いた！！

まさかあれを言うつもりか！？ と、？が愕然としてふりむくと、

「情熱思想理念頭脳……」

一息に言い切りながら微瞬動で距離を少し詰める犬神。

「気品優雅さ勤勉さ……」

さらに微瞬動を繰り返し、？との距離をじりじりと詰める犬神。
完全に遊んでいる。

「そしてなによりも……速さが足りない」

「えらいテンション低いなこら！！」

まあ、そんな軽口をたたいたところで？がゲルに追いつかれそんな事実は変わらず、？は泣く泣く荷物を捨てることを選択した。

もとより負けが込んでくせにハンデをつけようという考え自体が片腹痛いのだが、？にそれをツッコむ人間はこの場にはいない。

だが、彼はスパルタン？！！ ただでは転ばない怪盗である！！

「シャーないわ！！ 喰らえ！！」

そして、突如として立ち止まり完璧に勢いを殺した？は自分に向かってツッコんでくる犬神に、持っていた袋をフルスイング！！

？ほどの実力者が重いと思ってしまふような重量を持った袋は、もはやそれ単体で凶悪な鈍器。ゲルの命を刈り取らんとする書籍のハンマーは、？の筋力補正も加わりとんでもない速さで振るわれた！！

「いま必殺！！ 涙の……盗難文化財アタック！！」

とんでもない轟音を伴い、振るわれた袋！！

しかし、犬神はマトリックスでもできねーんじゃねーの？ とおもわれるほどほけぞりそれを回避する！！

なんとひざをカクツと後ろ向きに曲げ地面すれすれのところで倒れかけた上体を止めたのだ！！

尋常ではない筋力と、圧倒的な精密さをもって統御された気を使わないとできない所業。それを見ていたある神鳴流剣士が感嘆の息を漏らしたとか漏らしてないとか、

「にゃああああああああ！！？」

そして、？のほうも悲惨な目に合っていた。

？のバカ力+とんでもない速さで振るわれた本たちの遠心力に本が入った袋が耐えきれなかったのだ。

つまり何が言いたいのかというと、

袋が見事に裂けてしまい、中に入っていた魔導書たちが流星のよ

うに夜空を飛行し麻帆良中に飛び散ってしまったのだ。

「？は獲物が根こそぎ消えてしまったことに勿論涙したが、『泣きたいのはこつちじゃ！』とその光景を見ていた近右衛門が、叫んだことを彼らは知らない（後日大規模な認識障害結界を張って魔導書を泣きながら回収する魔法先生たちが見られたらしい）。

しかし、戦いはまだ終わっていない！！

「終わりだ」

「!?!」

泣きながら『さようなら……俺の獲物たち』と黄昏している？に向かつて、両手をポケットに入れたゲルから何かが飛来してくる！！

「っと！！ デス眼鏡の技かいな！！ 相変わらずやばいくらいの天才やな、犬神君！！」

「？はそう叫びながら全身に気を張り巡らせ、アツサリと犬神の見えない攻撃を受け止める！！」

「師匠直伝！！ 気合防御！！」

吹き荒れる衝撃波！！ 粉碎される屋根瓦！！ ナミダを流す近右衛門（修理費は麻帆良の年間予算から出されました）！！

「はっ！！ どうや！！」

攻撃を完全に防ぎ切り、自慢げに胸をそらす？。いつの間にか天

高く跳躍をしていた犬神は、そんな？の様子などお構いなしに、再び見えない攻撃を放出する！！

「豪殺・居合拳。気ONLYver」
バージョン

「やば！？」

瞬間！！ 麻帆良に激震が走った！！

犬神ゲルが強い理由……解答編

麻帆良の市街地に迸った激震と衝撃波。ふきとぶ建築物たち。

それを見ていたネギはカクンと口を開けて固まった。

あまりに威力がデカすぎる一撃に……。そしてもう魔法の隠匿とかどこ行っちゃったのと言わんばかりのあまりに桁外れな被害に！！

「ちょ、だいじょうぶなんですかあれええええええええええ！？ 今夜中に直るんですか！？」

「無理だろうな」

「隕石が落ちたとかそんな偽情報が流されるんやろ……」

「いつものこと」

「そんなこと言っている場合じゃないでしょう！？ ハリウッド映画でもあり得ないくらいダイナミックな感じになっていますよ！？」

錯乱しているのかネギの言葉に若干の不具合が見られるが、まあ仕方ないかとマリーとエヴァはそれを流し、ヒメは落ち着けと言わんばかりにネギの頭をポンポンと叩く。

「ドウドウ……」

「あのヒメちゃん……僕動物じゃないんだけど」

若干恥ずかしそうに頬を赤く染めながらそう反論するネギ。それでも少しは落ち着いたのか、先ほどよりだいぶテンションが下がった声で、エヴァたちに質問をぶつけた。

「それで……いったいなんなんですかあれ？　ただの衝撃波ってわけじゃないんでしょう？」

「ほう……気づいたか」

「ええ……まあ。龍宮さんたちの反応を見ていれば……」

ネギがそう言って視線を動かす。その先にはしんじられないといった様子でゲルを見つめる二人の少女の姿が見て取れて……

「まあ、あいつら自身ゲルが本気で戦っているところを見るのは初めてだからな。あいつがあれを見せるのは本当に限られた相手だけだし……」

「だからあれはいつたいなんなんですか？」

『へへへへ。それは俺っちが説明しますぜ、兄貴』

そんな風にひきつった顔で黄昏れるエヴァにネギは『そんなにやばいものなの？』と言いたそうな顔で再び聞いたが、その答えは別のところからやってきた。

「え？」

「あ……」

「んあ？」

「なんだ？」

ネギ、ヒメ、マリー、エヴァがそれぞれ今気づいたといわんばかりの表情でその声の方を振り向くとそこにはニタニタとへんな笑みを浮かべた小動物が一匹座っていて……。

「……………」

『へへへ。兄貴ようやく帰ってきましたぜ……………』

得意満面といった顔でそう言った小動物に対して、ネギはさわやかな笑みを浮かべて一言、

「えっと……………だれ？」

『ちょ！？ 兄貴！！ 出番久しぶりだからってその反応はひどくないっすか！？』

以前登場したときはマリーによってメキメキ折りたたまれてしましすぐに退場してしまっただ、ネギの使い魔（？）。アルベール・カモミールがようやく再登場したのだった！！

…†…†……………†…†…

『うっ……ひどいやひどいや……。俺っちマリーの姐さんにたたまれちまった後、ごみ箱に捨てられたから、必死こいて動物病院行って今まで療養してようやくここに戻ってきたっていうのに……兄貴俺っちのこと忘れてるなんて』

「う、ゴメン！ カモくん！！ いや、いまのは軽い冗談で！！」

ダラダラ冷や汗を流しながら小動物に言い訳するネギを呆れた目で見ながら、エヴァはカモの話の続きを促す。

「どうでもいいから早く話を進めろ小動物。煮てくうぞ？」

『イエス・アイマム！！ 誠心誠意説明させていただきますから食べないで！？』

泣きながら懇願してくるカモに満足したのか、エヴァは無言で頷き二人の戦いの観戦に戻った。

向こうではゲルが先ほど打った豪殺居合コブシと？の気合いパンチがぶつかっておりとんでもない衝撃波がまき散らされ麻帆良の街並みを粉碎しまくっていた。

「あれ……だれが修理費払うんやろ？」

「それはしらんが……もう？逃がした方が安くつく気がしてきたな」

そのあまりに悲惨すぎる戦いの様子に、マリーとエヴァは思わず顔をひきつらせた。

『あれは赤き翼アラルブラのメンバーの一人が使っていたといわれる居合コブ

シの強化版《豪殺・居合コブシ》でさあ！ 今はその英雄は死んじまって、使える人間はこの麻帆良にいる高畠・T・タカミチっておっさんだけで、これを使えたら魔法使いで言うところのAAランクは堅いとのこと……』

「そんなに！？」

「まあ、あれはもとより究極技法と呼ばれる咸卦法というドーピングを使って筋力気力魔力をはね上げないと使えないものだからな。咸卦法が使えるだけでもAAは堅いという代物だ。そのランク付けもあながち間違っではない」

カモの説明に補足を入れながら、エヴァはにやりと凶悪な笑みを浮かべる。

「だが、奴の異常さはそこではない」

「さようぞ」

その時だった！！ 突如彼らの後ろから声が聞こえてきたかと思つと、特徴的なひげをもつ紳士が忽然と彼らの前に姿を現したではないか！！

「……………！？」「……………」

声の方向に振り向いたエヴァたちは見事に肩透かしを食らった状態になり、意地の悪い声で『ホホホホ』と笑うひげ紳士に若干三白眼になった瞳を向ける。

「克蘭レスさん……からかわんとしてーや」

「いやはや申し訳ありません。魔がさすとはまさしくこのこと」

マリーの取りあえずといった様子 of ツツコミに美しく頭を下げながら、再び説明を再開するクランレス。

「ゲルさまは魔力が全くありませんので『本来反発してしまう気と魔力を融合しそれを身の内と外にまとうこと』によって驚異的な身体能力を得る』咸卦法は一切使えません」

「え？ でも強殺居合コブシはそれがないと使えないんじゃないか」

「別にそれがないと使えないわけではないのです。圧倒的な燃費の悪さ、汎用性に低さを無視すれば身体能力を活性化させる『気』によって代用することも可能なのです。もっとも、それをしようとするれば咸卦法で使用する気の10倍の気力は必要です」

「まあ、奴はそれを無視しても問題ないくらいの気を持っているということだ。その気になれば本気で某野菜人になれるんじゃないかあいつ？」

エヴァの冗談交じりの言葉に、犬神たちの戦いを見ていたマリーは思わず顔を引きつらせる。

「いや……エヴァちゃん。それシャレにならんわ」

「なにを……」

その時……！

「？」

「思いつきりしつとるやる！？ カメハメ波やる？ サイヤ人やる！？ あとあいつの名前確かにそれっぽいけど死にかけるとびに強くなったりとかせーへんからあいつ！？」

珍しく？がツツコミに回った会話のさなか、犬神はいつの間にか取り出した木刀を片手に？に向かって突っ込む。

「！？」

「もうそろそろいいだろう。決めるぞ」

瞬間、犬神が振るった木刀からは雷が飛び出し、？に向かって襲い掛かる！！

「これは……神鳴流の雷鳴剣！？」

「刀子女史の物を見て真似たのだ。習得するのに一週間かかった」

「それでもたった一週間やろうが天才がああああああ！！」

…十…十………十…十…

「だが、奴の異常なところはそこではない」

『そうですぞ兄貴。問題なのはゲルの旦那が「どうして威卦法を使わずに強殺居合コブシを打てるのか」ではなく、「どうしてゲルの旦那が居合コブシをうてるのか」でさあ』

「!?!」

そこまで言われて、ネギはようやく犬神の異常性を理解した。

使えばまず間違いなく英雄と肩を並べることができるほどの技術。通常なら習得には血反吐を吐くような努力を伴うであろうそれを、犬神はいとも簡単に使って見せた。それも彼の教え子と同じ中学生なのに……だ。

「いつたい……なんで？」

「刀語……というライトノベルをご存知ですか？　ネギ殿」

克蘭レスの言葉に、ネギは首を振る。克蘭レスはその反応を見て予想通りといわんばかりに頷き、説明を開始した。

「そこのある特殊固有スキルに《見稽古》というものがあるのですがこれはありとあらゆる戦闘技術を見ただけで体得してしまうという化物スキルなのです。ゲルさまのあれはまさしくその劣化版といったところなのです。ゲルさまは一度相手の技を見ただけでそれを体得するまでに必要な努力と方法を見抜かれます。そして圧倒的な集中力によってそれらの努力を通常の1000倍という短時間で終わらせ自分の技にしてしまわれるのです」

文字通りの天才。その名にたがわぬ圧倒的な学習能力と、その学習能力に対応できるほどの化物じみた体。これが、犬神ゲルの強さ

の秘密。

「ゆえに……ゲルさまの本気を知っておられる方は、ゲルさまの才能をこう呼ばれます。《天才すぎた秀才》と」

…†…†……………†…†…

犬神ゲルは昔から強かったわけではなかった。当たり前である。誰であるうと無力な子供時代というものはあるし、なければそれは人間ではない。

しかし、彼が生まれた家はそれなりの金持ちのうえに、あくどい商売でもやっていたのか、それなり以上に人に恨まれており危険が多かった。

そんな家に生まれた彼が強くないまま生き残れるわけもなく、仕方なく彼の両親は紛争地帯から帰ってきた腕利きの傭兵　マリーの父親である　をやといゲルの戦闘面での教育係にしたのだ。

そして、一週間後のゲルをみた彼の両親は気づいた。

あ、こいつ俺たちの手に負えないわ〜。と

この時……10歳にも満たなかった犬神ゲルは、

た！！

神速を謳う気力使いがまず最初にたどり着く音速縮地……縮地・
无彊！！

しかし、それは今までの高等すぎる戦闘からは考えられない下策
だった！！

その速さは尋常ではないが、思いつきり直線的な軌道を描きながら
移動をするしかないこの縮地。本来長距離移動に使われるこれは、
戦闘ではかなり不向きなのだ。

とうぜん？がそんなあからさまな失敗を見逃すわけがない！！

「はあっ！！ 油断したな犬神君！！ その技使ったんは初めて見
るから、新しく覚えた技見せたくてはしゃいでもうたんか！？」

にやつと笑う？に、ゲルは少しだけ表情を動かし、気を足に貯め
車輪状に変換しようとした。だが、そんな隙を見逃す？ではない！！

「?!?! 千烈拳！！」

無数に飛ぶ気弾！ 千もの弾幕！！

一発一発が砲弾級の威力を持つ？の気弾に、犬神の体は殴打され
あっけなく墜落する！！

「あれ？ 今メツチャええの入りませんでしたか？」

あっけなく落ちていく犬神を見て、ちょっと拍子抜けしながら驚

く？。

だが、そんな中でも彼の体は動く！！ 当たり前だ！！ 今まで
どれだけ犬神に負けてきたと思っっている！！ 犬神が落ちた程度で
油断はしない！！

？は落ちていく犬神を追うようにダイブし、高笑いを上げる。

「来た。ついにこの時が来てもうたらしいで犬神君！！ テンショ
ンあがってきた〜！！ 今日こそ俺様勝たせてもらうで！！ ワハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

落下中に二、三度居合コブシと気弾を交わしながら、？とゲルは
落ちていく。

そして、気力を足に貯め落下速度を若干犬神よりも早くしていた
？は先に地面へと着地し、適当に右パンチ（残念なことに一応技名
認定）をぶっ放す！！

「ちっ」

それを見て始終一貫して無表情だった犬神は、初めて面倒くさそ
うな顔になり舌打ちをした後、虚空瞬動を発動。大陸弾道弾のよう
な威力を持った怪物気弾をあっさりとよけ、くるくる回転しながら
地面へと着地する。

場所は、狭いどこかのバルコニー。その下には用水路が流れてお
り、小さな橋がいくつか架かっている。

「ふっ……流石は俺のライバル。俺とここまで互角に戦ったんはお

前だけや」

「今まで全敗しているくせに？」

「そんな過去の話は忘れました」

都合のいい記憶力を披露しつつ、？はにやりと笑う。

「なぜならいまおれは……勝ちつつあるからです！！」

？はそう言いながら、不意を打つように瞬動をつかって攻撃してきたゲルをあつさりおよび、バルコニーから飛び降り、用水路にかかった小さな橋に降り立った！！

(やつぱり……。さっきの気弾がきいとるみたいやな。動きにいつものキレがないで犬神君！！)

それは長年戦ってきた？だからこそ気づいた違和感。犬神の瞬動の入りかほんのわずかだが雑になっているし、コブシに振り方が0.001秒ほど遅い。

普通なら気づかないであろうその差違に、達人である？は気づいた。

そしてその遅れが……達人同士の戦いでは致命傷であることも、彼は知っている！！

「どないしたん犬神君？ こーへんのやったら逃げさせてもらうで！！」

そして、？は犬神を自分のそばに招きよせるために安い挑発で犬神をからかう。

より確実に、よりの確に……犬神の攻撃をよけ、カウンターを当てるために！！

万全の状態の犬神だったら、それは不可能だったのかもしれない。だが、今の犬神ならそれは十分可能だと彼は踏んでいた。

そして、

「今回は俺の勝ちみたいやな！！　ハッハッハッハッ！！　どんなもんや」

やたらとうつとうしい笑い声をあげる？を無視して、犬神はバルコニーから飛び降り橋の欄干に着地！！　鋼鉄製のそれをゆがませながら、『フーツ』と残心を行い、

「はっ」

「……」

最後の攻撃を？と交わす！！

普段より若干遅い犬神の裏拳を？はやすやすとかわし、

「もろたで！！」

技後硬直に陥っている、犬神に向かって、渾身の右ハイキックを叩き込んだ！！

「アカンよタツミー！！ 魔法隠匿はどないしたん！？」

「銃士というのは金がかかるものなんだよマリー。弾薬代とか、弾丸代とか、新しい銃とか、甘いものとか、中学生なのに大人料金とられるとか……あとタツミーゆうな」

「最後の二つは明らかに不要やったよな、タツミー？」

あくまで呼び方を変えないマリーにため息をつきつつ、龍宮は至って平然とした様子で水筒を取り出し紅茶をみんなに配っているクランレスを見つめた。

「それで？ 宜しいのかな克蘭レス殿。あなたの主がやられてしまいましたか」

「問題ありません」

「ああ……そうやな」

しかし、そんなことを聞かれてもいたって普通の様子で返事を返す克蘭レスとマリーに、周りの人々は首をかしげた。

「なんだ？ ずいぶんと落ち着いているなマリー」

エヴァの疑問の声に、マリーは苦笑いを浮かべ、

「やって、犬神君が……」

ただで負けるわけあらへんやん。

マリーのその言葉は？には届かず、浮かれきった彼は何も知らないままに倒れた犬神に近づいていくのだった。

…十…十……………十…十…

「ふふっ……。ついに……。ついに勝ってしまったですよ。あの犬神君に」

にやけきった顔でそうつぶやきながら、？は倒れ伏した犬神を見下ろす。

そして、

「やられ続けて幾星霜……。っ！！ 初勝利！！ 長かった！！ だがようやく呪縛はとかれ、ここから新たな怪盗スパルタン？伝説の幕が……」

そんな風に？が調子に乗っているときだった、

「だが、盗みは失敗しているがな」

「へっ？」

さっき倒したはずの音が聞こえ、思わず？が固まる。と同時に……

なんかもう哀れなくらい目を白黒させる？がさすがにかわいそうになったのか、レイジーが苦笑交じりに開設を開始した。

「君が来る前に犬神君から連絡があつてね。君をここにおびき寄せから適当に人員ここに配置しておけつて言われてね。まあ、さすがに犬神君が吹っ飛んできたときは驚いたけど」

「お前とまともになると無制限一本勝負でなかなか決着がつかんかな。わざとやられてみたんだが案の定逃げなかつたな。スキ丸出しだ」

「くう〜っ!!」

悔しそうに口をへらの字に曲げる？を、犬神は『フンっ』と鼻で笑う。

「ま……泥棒のくせに自己顕示欲が強い怪盗の性が敗因サガと言え敗因だな」

「はっ」

「ここまで言われてはもはや悔しがることもできないのか、？はいつもの不敵な表情に戻り、肩をすくめた。

「ホンで？ どないすんねん犬神君。できれば逃がしてほしいんやけど？」

「御免こうむる。いちおうそいつらからも依頼をもらっていてな。おとなしくお前を引き渡す」

「そういうこと。じゃ、ついてきてほしいかな？ 六重君」

犬神とレイジーの言葉に、？は思わず顔を引きつらせる。

「それはやめてほしーわ。レイジー……お前の相棒のおっさんバイオレンスすぎるし、刀子女史からかいすぎとるから、必ずシバかれると思うねん。せやからまあ……」

？は最後にそう言うと、ただの身体能力で両足を跳ね上げ、

「へっ？」

後ろに立っていたレイジーをカニばさみすると、そのまま体を大きく前回転させレイジーの体をひっこ抜くように宙に跳ね上げた！！

「ぎゃあああああああ！？」

そして、そのまま？の体を支点に大きく回転したレイジーは、そのまま顔面から地面にたたきつけられ悲惨な悲鳴を上げる。

「今日はこの辺で勘弁したるわ！！ 覚えとけ！！」

そして典型的な捨て台詞を残し、気が使えないはずなのにとんでもない速さで逃げ去っていく？を見送る犬神たち。

「……あの……犬神君。彼を追ってくれたりしないかな？」

顔面から地面に思いつき叩きつけられてしまい、鼻血やら何やらで悲惨な状況になったレイジーは顔を上げ、犬神に頼んでみるが、

「御免ごうむる。僕への依頼は？の捕獲だ。捕獲の後逃げられたのはそちらの落ち度。僕の依頼はお前が？に手錠をかけたことで完遂されている」

「ですよね」

もういつそすがすがしいほど、犬神らしい理論によって叩き潰された自分の願いに、レイジーはうつろな笑みを浮かべながら意識を失うのだった。

……

そのあんまりと言えばあんまりな終わり方に、遠視魔法を見ていた面々はしばらく固まった後……。

「ふうーっ。今日は遅いし……もう寝るか茶々丸」

「はい、マスター」

吸血鬼らしからぬことをつぶやきながらエヴァたちは消え。

「ほな、事務所かえるか。ネギ君ヒメちゃん」

「はい」

なんかもういろいろ疲れた、といわんばかりの表情で呆然として

いた二人の少年少女をうながし、マリーはさっさと帰っていく。

「では、また次回」

クランレスはそう言って空中に溶け込むように消えていき、残った桜咲と龍宮の二人は、

「龍宮」

「なんだ？ 刹那」

「わたしは……犬神さんみたいに強い人になって、お嬢様を守りたい。と思ってこの戦いの観戦に来たのだが……」

桜咲はそこで一拍おき、

「ああいう人には……なりたくないな」

「それはとてもいいことだと思うよ」

そんな風に若干黄昏ている彼女たちは、しばらくその場を動けなかったという。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

後日談というか今回のオチ。

「おかしい……何度考えてもおかしい」

「どうしたの、ネギ？」

？との激闘が終わった翌日。事務所の応接室で一枚の依頼書を見つめながらウンウンなるネギに、ヒメと遊びに来ていた明日菜が話しかけた。

「あ！ 明日菜さんにヒメちゃん。いや……実は昨日師匠と犬神さんが対決したんでその観戦をしてきたんですけどね？」

ネギはカクカクシカジカと明日菜に説明をした後に、麻帆良からの？捕獲以来の書類を指差した。

「犬神さんがこの依頼を受けたときは師匠の挑戦状を受けとった後だったんですよ。でも、犬神さんはやたらと師匠の捕獲に乗り気でした。金の亡者の犬神さんがどうしてあんなに乗り気だったんだろうと思つて……」

「金の亡者つてあんた……」

「ネギもだいぶ口が悪くなった……」

やっぱり私たちのところで預かるべきかしら？ ネギのあんまりな言い方に、若干顔をひきつらせて再びネギの身元保護を思案する明日菜を横に、ヒメとネギは首をかしげていた。そんなとき、

「なんや……そんなことかいな？」

そう言ってマリーが巨大な箱を持って応接室に入ってきた。

「あ、マリーさん」

「そういつたら説明してへんかったな。克蘭レスさんよろしゅう」

「かしこまりましたマリー様」

「「うわっ!?!」」

まるで空間からにじみ出るように現れた克蘭レスに驚く明日菜とネギをしり目に、克蘭レスはいつものように説明を開始する。

「スパルタン?からの挑戦状ですが、実はあれは仕事の依頼状なのですよ」

「「はあっ!?!」」

克蘭レスから聞かされたとんでもない事実にも、なにも知らなかった明日菜とネギは思わず固まる。

ちなみにヒメはそんなこともうどうでもいいといわんばかりに、マリーの背中に飛びつきおぶさられていた。

「?様がゲルさまに挑戦をされた当初、ゲルさまがあまりに?様からの挑戦を無視しまくられたため、ついには『自分を捕まえてくれ……』と依頼料入りに挑戦状が送られてくるようになったのです。」

実は今回も封筒の中に報酬の入ったコインロッカーの鍵が同封さ

れており『もはや本末転倒やん!!』と突っ込むことこそ愚の骨頂といった感じで、にんともかんともやれやれな状況なのですよ」

「あいつほんとにバカだったのね……」

「師匠……」

あんまりといえばあんまりな事実には、顔に縦線入れまくりにネギたちにマリーが担いだ箱の陰から出てきた犬神が、箱を指差しながら声をかけてくる。

「おい、喜べ野菜。今回の報酬はやけにレアな魔法宝具類だ。風の結界で覆われて姿が見えない剣まであるぞ」

「いやそれって、麻帆良から盗まれた宝具じゃないですか!？」

「というかその剣、絶対にこの世界にあっちゃいけないものでしょう!？」

ネギと明日菜のツッコミを無視しつつ、報酬をもらった犬神はひとこと、

「労働の汗というのは……素晴らしいな。克蘭レス」

「御意に」

克蘭レスの右手にはいつの間にかつけられていた、やけに高級な装飾を施された指輪型の宝具が輝いており……

「」「いや……おかしいやろうがああああああああああ!」

？
「「「

マリー、明日菜、ネギのツッコミが、犬神アンダーグラウンドサーチの事務所に響き渡るのだった。

犬神ゲルが強い理由……解答編（後書き）

はい、というわけで犬神君が強い理由は見稽古劣化版のおかげと
いうことでした。

刀語とかほかの作品をたえてバンバン出してしまっって申し訳な
いと思います。が許してください……。

原作での犬神君は元傭兵だったマリーのお父さんの自信を一カ月
（あってます？）でへし折ったといわれています。

つまり、犬神君は一カ月でマリーのお父さんの軍隊格闘技を根こ
そぎ体得したということなのでしょう。と作者は勝手に自己解釈して
この能力を作らせてもらいました。

まあ、ぶっちゃけチートとしてはかなり微妙なものなので、そこ
までチートというわけではないですけどね。

何かご意見ご感想がある方はどうぞお聞きください。

次回はようやく修学旅行編です。

どうぞご期待！！

修学旅行の行き先は？

「ふふ〜ふふ〜」

「なんやネギ君？ えらいご機嫌やな？」

「あ、わかります〜？」

「そんだけ浮かれきっていたら誰だつてわかるわよ……」

ある麻帆良の昼下がり……。

？と犬神の激闘を見届けた日の次の週。麻帆良の街並みをスキップせんばかりの勢いで歩いているネギに、一緒に昼食をとろうとついでにきていた明日菜とマリーはそう尋ねた。

彼女たちが訪れているのは女子中等部内部にあるとある喫茶店。ここはマンモス校である女子中等部の学食がパンクしてしまった時に使えるように設置されたもので、ちょっとおしゃれな気分で昼食をとりたい生徒たちがたむろする、オープン喫茶である。

今日のように雲一つない快晴だと、ここで優雅に昼食をしゃべらむ生徒たちも少なくはない。

たとえば……

「あ」

「あ……」

エヴァンジェリンのようなプライドが高めで、やたらと優雅さを重視するような生徒たちがよく来ていたりする。

…十…十………十…十…

「こんなところで会うなんて奇遇ですねエヴァさん!!」

「エヴァンジェリンだ、ボーヤ」

「マリー様にはエヴァでいいとおっしゃられていたではないですか」

「黙れ、ポケロボ……」

久しぶりに出会ったエヴァに、にこにこ笑いながら同席の許可を求めるネギを一睨みしたエヴァだったが、後ろにマリーがいることを確認するとあっさりと許可をくれた。

そんなエヴァにネギはにこにこ笑いかけて、マリーがよく使う愛称で呼んでみたが、エヴァからはすげなく断られる。まあ、エヴァはそのあとすぐにお供のごとく連れていた茶々丸に茶化され顔を真っ赤にしていたが。

「あ、そういえばエヴァちゃん。今思い出したんだけど」

「な、なんだ？」

そんな風にあいさつを済ませた後、コーヒを傍らに（ネギはミルクティーだったが）昼食をとっていた時だった。

ほかのメンツより早めに昼食を取り終えた明日菜がにやにや笑いながらエヴァに話しかけたのは。

「エヴァちゃん……ネギのお父さんのことが好きだったんでしょ？
どこに惚れたの？」

「ぶふうっ!？」

明日菜のとんでもない言葉に、エヴァは飲んでいたコーヒー（角砂糖大量混入物）を盛大に吐き出した後、ひきつった顔をするマリィを睨みつけ、『僕も聞きたいです!』と言わんばかりの表情で目を輝かせるネギの襟首をつかみ締め上げた。

「だいたい……お前たちがあそこであんな魔道具を使わなければ!
!」

「マスター落ち着いて!!」

「ちょ!？ ネギ!？ 大丈夫!？」

顔を真っ赤にしてそんなことを叫ぶエヴァと、青い顔で泡をブクブクと吐き始めるネギに茶々丸と明日菜があわてて止めに入った。

「はあ……。だが、奴は死んだ。十年前にな」

そして、ひとしきり騒いだ後、落ち着いたエヴァは何やら黄昏た

表情になりながらため息をつく。

会いたいと待ち望み、呪いをかけられてなお心のどこかで慕っていた男が死んだと言われているのだ。彼女の気持ちをまだ十数年しか生きていないマリーや明日菜は推し量ることはできなかった。

だが、

「まあ……そんなへこむことないって。よーあることやん」

「そうよ。男なんて星の数ほどいるんだから」

「お前たち……本当に中学生か？」

とりあえずは励まさなければならぬということとは敏感に察知したようで、マリーと明日菜は口々にとんでもない言葉を発した。どこぞの昼ドラにできそうなセリフで、エヴァが若干ひいていたが、

そんな風に女子勢が雑談に興じる中、ネギだけが首をかしげてひとこと、

「え？ 父さんならまだ生きていますよ？」

「」「へ？」「」

とんでもない爆弾を投下した！！

「お、おい！？ それは本当かボーヤ！！」

「ちょ、生きているんならなんでもっと早くにエヴァちゃんに教え

てあげなかったのよ!!」

そんな風にあっさりと落された爆弾に、明日菜とエヴァが泡を食ってネギに掴みかかる。マリーもその言葉には若干驚きを示しており、目を丸くしていた。

サウザンドマスター
千の呪文死亡説は十年前から根強く流れており、あの克蘭レスですら死んだことを疑っていなかったのだから。

「い、今も生きている確証はないんですけど……少なくとも十年前には死んでいないはずです!? だって、僕は……サウザンドマスター 父さんに会ったことがあるんですから!!」

「!?!」

ネギのトンでも発言に、エヴァは少しのあいだ固まり、

「そ、そうか……生きていたか」

マリーですら見たことがない、泣き笑いのような美しい笑みを浮かべた。

…+…+…+…+…+…+…

その数分後。学園への帰り道、

「わはははははは！　そうかそうか！　奴が生きていたか！　まあ、殺しても死なんような奴だとは思っていたよ！　！」

「エヴァちゃん……その笑い方はちょっと」

まるでどこかの霸王のような笑い方をする（もしくは魔王）エヴァに『女の子なんやから』と、マリーは一応の注意を促す。

そんな彼女たちの後ろを歩いている明日菜と茶々丸は、ニヤニヤ笑いながら、

「うれしそうね」

「はい。あのようなマスターを見るのは久しぶりです」

エヴァのことを指差して、茶々丸のハードに映像を保存していたりする。むろんうれしさの境地にいるエヴァはそのことに気付いていない。

「すくなくとも僕は生きていますと信じています。だから僕は立派な魔法使いになって父さんを探し出したんですけど……なにぶん手がかりがこの杖だけでして」

そんな風に笑うエヴァに、ネギも苦笑を浮かべながら自分の杖を示してみた。それを見てエヴァはようやくそれがサウザンドマスターの形見だと気づき、目元の涙をぬぐう。それは笑いによって出たものか、うれし泣きの物なのかはネギにはわからなかったが、少なくともマイナスなものではないので特に何も言うことはなかった。

「まあ、だとするなら今回の修学旅行はまさしく渡りに船だろう。

ボーヤ」

「え？　なんでです？」

「うちのクラスの修学旅行先は十中八九京都だろう？」

委員長がお前に気を遣うだろうから……。エヴァのその言葉を無視して、ネギはキラッと目を輝かせた！！

「はいっ！！　そうなんです！！　正確な行き先は次の時間のクラス会議で決めますけど、目的地はハワイか京都だけですから半分の確率で京都！！　いいですよ、京都！！　日本最大の古美術・歴史建造物の宝庫！！　古都京都！！　一度でいいから行って見たかったんですよ！！」

目を輝かせながらどこから取り出したのかも不明な大量のパンフレットを空中に広げ、京都に対する熱い思いを語りだすネギ。

マリーや明日菜はその光景に若干ひくが、エヴァだけは違ったように、

「バカか貴様は！！　確かに京都は日本の和の精神の本家であり建築物の美麗さみやびやかさは他国の歴史的建築物にも引けを取らなから、それだけではない！！　まず挙げられるのはそこ特有のみやびやかさを重視する文化だ！！　舞妓や伝統芸能も根強く残っており、そついったやつらには気品がある。そのほかにも京都独特の食文化や、宝石のような和菓子たち！！　それを語れぬよう京都好きを名乗るうなど片腹痛いわ！！」

「むっ！！　え、エヴァさんやりますね！！」

一息にそう語り『どや〜』とばかりに胸を張ってくるエヴァに何やら戦慄するネギ。正直、ツッコミをいれようかどうしようか迷ってハリセンを待機させているマリーが後ろにるのが印象的だ。

「ふっ！　だてに十年間麻帆良に閉じ込められていないわ！　」

京都は、私の『いつか行きたい場所ランキング！』の、堂々の第一位だぞ！　！　」

「ゆーててさびしくならへんの？　エヴァちゃん」

「ちょっと……」

マリーの半眼のツッコミに、エヴァは若干顔を赤く染めて目をそらした後、逆切れ気味にネギを怒鳴った。

「い、今はそんな話はしていないだろうボーヤ！　！　京都にはサウザンドマスターとは縁が深いある男が住んでいるからそいつを尋ねたらいいだろう！　！　しかもそいつが管理している建物の中にはあいつの隠れ家があるからな！　！　」

「え！　？　父さんの知り合いに、隠れ家！　？　そんなものまであるんですか！　？　」

「京都は日本有数の霊地やかからなく。そこの居を構える魔法使いも多いらしいで？」

まあ、あそこは関西……陰陽師の管轄やから、西洋魔法使いはめったに入れへんねんけど……。

マリーの不穏なつぶやきは聞こえなかったのか、ネギはさらに意味合いを増した京都観光に思いをさせ、一人空を見上げるのだった。

そのご、やっぱり修学旅行の行き先は京都に決まったり、近右衛門から『京都いきたいんだったら親書もって行ってね。』ついでに組織間の関係も円滑にしておいて、『なんて無茶ブリをされたりしたのだが、割愛!!』

なぜなら、それ以上の問題がネギたちの帰った事務所で起こっていたからだ。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「はあゝ。親書どうしましょう……」

『大丈夫!! 兄貴ならきつとやれますって!!』

そんなこんなで、帰宅したマリーとネギ。ネギの肩には最近ようやく出番が出てきたカモがのっており、勢いに任せて学園長からの依頼を受けてしまっへこんでいるネギを元気づけていた。

「でも僕が使われるのって正直『英雄の息子』っていうネームバリ

ユーが使えるからなんだよ？ 西洋魔法使いの父さんの栄光が一体どこまで通じるものなのか……」

「ネギ君……最近シビアになったな」

そんな風に落ち込むネギにひきつった顔でツッコミを入れながら、マリーは犬神アンダーグラウンドサーチの玄関のドアを開ける。

「おかえりなさいませ。マリー様、ネギ様」

「おかえり……マリー。ネギ」

「ただいま克蘭レスさん、ヒメちゃん!!」

「あははは……ただいま」

「ネギなにかあったの？」

「うん……。口は災いのもとっていつのを実感しているところ」

「？」

そんな風へへこむネギを不思議そうに見るヒメ。そんな彼女たちをほほえましそうに見つめながらマリーは克蘭レスに重要案件を尋ねてみる。

「犬神君の修学旅行ってどこなん？ いや、まず間違いなくネギ君と同じ京都行くんやろうけど」

近右衛門の親書配達の依頼もそれを見越して出された可能性が高

い。なにせ犬神はネギが一人前になるまで身の安全を保障する義務があるのだ。ネギが京都に行くなら必ずついていくだろうし、ついて行かなければならない。そこまで勘定に入れると、ネギを親書の配達人にするのはあながち間違った判断ともいえないのだ。

なにせ護衛についていくのがAAA越えの化物なのだから……。

直接犬神に依頼せずにネギに依頼したのは、その制約を使っただで犬神を動かそうという近右衛門の姑息な策だろう。最近麻帆良はスパルタン？やら、彼と犬神の激闘やらで金が羽をつけてとんでいつているらしいから……。

だが、

「何を言っている安川」

そんなマリーや近右衛門の予想を裏切り、リビングから出てきた犬神はとんでもない爆弾を投下した！！

「僕はワイハーに行くに決まっているだろう？」

「「え？」」

その瞬間、マリーたちが一瞬で凍りつきその場に沈黙が降り立った。

ワイハー

「何を言っている安川。僕はワイハーに行くに決まっているだろう？」

「「え？」」

相変わらずの無表情のまま、ゲルはとんでもない事実を暴露した。瞬間的に氷結し動きを止めるマリーとネギ。

そして、数秒後、先に復活したのはマリーだった。

「ちょ！？ ハワイって………どういことなん犬神君！？」

「安川………僕はな………ワイハーでワイハーまんじゅうを食べてみたのだ」

「ないで！？ ハワイ饅頭なんてないで、犬神君！？」

「では、フラダンスを習いに行きたいのだ？」

「『では』ゆーた！？ しかも語尾が疑問形！？」

「ふっ………正直に言おう。僕はキラウエアを爆発させに行きたいのだ！！」

「犬神君やったらできそうで怖いわ！？」

「リア充………爆発しろ！！」

現在のネギの戦力は……瞬動術をはじめ、戦いの歌による身体強化によつてのクラスがB B。魔法の射手の威力がA。中級呪文保有数33。大呪文保有数3。そのすべてが？に、戦闘に必要と言われネギが取りあえず習得したすべてだ。

実際戦闘で使えるかどうかと聞かれれば否。だが、その実力はすでに一般魔法生徒を大きく上回っているといつても過言ではないはずだ。

「犬神君……六重君……猫谷君……ぎりぎりで高音先輩かいな？」

「僕の評価も大体そんな感じだ。連合の評価に換算すると魔法生徒としては破格のB B Bといったところだろう。もう野菜の実力は一人前と言つても差し支えない」

「せ、せやけど……ネギ君は英雄の息子なんやから、それなりに危険な敵と戦うときも来るんちゃうん？ それに、お父さん探すんやったらせめて戦時中の《千の呪文》くらいまで育てるんが筋ちゃうの？」

「それこそ『知ったことか』だな」

ゲルは所長席に座りながら、某補完計画の首謀者のような腕の組み方をしてマリーとネギを見つめる。

「碇ゲ ドウかいな!？」

「僕への依頼はあくまで野菜を一人前にすること。一人前の実力が付いたのなら、あとはどうなるうと知ったことではない」

犬神の底冷えするような冷たい言葉に、ネギは思わず顔を引きつらせる。まさかこんなところで切り離されるとは……予想外も甚だしい。

「え………ということは、僕ここから出て行かないといけないんですか？」

「一人前になったらな。幸い神楽坂が面倒を見るといつてきているから、衣食住は困らんだろう？」

「ちょ、犬神君！！　いくらなんでもそれは冷たすぎるやんか！！」

その言葉には、さすがのマリーも表情を変え、犬神を睨みつけた。

いくら鬼畜外道の犬神であっても、さすがに依頼を途中で放棄するようなまねをするとは思わなかった。

そう言わんばかりのマリーの表情に、犬神は少しだけため息をつきながら、組んでいた腕を解いた。

「何も今すぐには言わん。それに………そのことはまだ決定していない。それを決めるための修学旅行だ」

「ふえ？」

「どういうことですか？」

首をかしげるマリーとネギに、

「わたくしが説明しましょうー！！」

「「!？」」

突如空間からにじみ出てきた克蘭レスが声を上げた。

「つて、こわっ!？」

「克蘭レスさん!! 登場のしかたが心臓に悪いです!!」

抱き合ってガタガタと震えるマリーとネギの言葉はオールスルーし、克蘭レスは懐から巨大なホワイトボードを取り出し手早く図を描いていく。

「いや……明らかにおかしい描写があつたやん!？」

「克蘭レスの懐は四次元ポケット……私はいったことある」

「マジで、ヒメちゃん!？」

ネコ型ロボットもびっくりな事実が明らかになったところで、図を書き終わった克蘭レスは説明を開始した。

「今回の修学旅行は、ネギ様が一人前になられたか確かめるためのテストの役割を兼ねております。試験官は魔法先生二名を用意しております。無論ネギ様が知らない魔法先生ですので、協力を求めることはできません。本人たちにも決して正体を明かさないように近右衛門様から厳重注意が行われています」

「!?!」

突然言われたとんでもない事実にも、ネギは目を見開く。

「マリーもその話を聞いてようやく事態が呑み込めたのか、『いつから計画しとったんよ?』という雰囲気を含んだ視線をゲルに飛ばした。」

「合格条件は、ネギ様が『クラスのメンバーに魔法ばれしないこと』『関西からの妨害をはねのけること』『無事に親書を送り届けること』でございます。なお、試験官に含まれていない関係者の方から救援を求めることは可能です」

「つまり……私、明日菜、タツミー、桜咲さんやつたら救援を求めてもオツケーユーこと?」

「さようで」

その言葉を聞いて、ネギは思わず安堵の息をついた。さすがに一人でやれと言われたらネギは完全に白旗を上げるしかなかっただろう。

「でも、試験が親書渡しって結構厳しい? 仮にも仲の悪い組織同士の仲取り持つんやし……」

「勘違いするなよ、安川。この親書渡しは、本来は『初めてのお使い』程度の難易度しかもたん」

「へっ!?!?」

犬神から発せられた信じられない事実にも、マリーとネギの目が点になった。

「現在の関西呪術教会の長は近右衛門殿の娘様の婿……つまりは義理の息子殿である近衛詠春殿でございます。婿養子である彼は元魔^{ムン}法世界の英雄……赤き翼^{アラルフラ}に所属しておりネギ様の父上であらせられる《千の呪文》ナギ・スプリングフィールド殿と旧知の仲にございます。よほどのことがない限り、ネギ様は手厚く歓迎されることでしょう。事前に連絡も言っていますし」

「そうなんですか!？」

「何より関西呪術教会は現在詠春殿を中心にまとまっております。反抗勢力などもはやスズメの涙。ゲリラやテロといったまねができるチームは皆無とっていいでしょう。つまり、関西呪術教会の反抗勢力の妨害があつたとしても、せいぜい悪質な悪戯程度が関の山でしょう」

クランレスの冷静な分析に、ネギは思わずため息をつきながら、膝をついた。

さっきまでの気苦労はいつたいたんだっただんですか？

ネギの脳裏に、今までへこみまくっていた自分が浮かび上がり、ちよつとだけうつろな笑みを浮かべる。

「まあ、一人前と認められるにはやや軽めな試験だが、麻帆良の連中もお前がエターナルロリと戦っているところを見ているからな。実力面からみれば申し分ないことは周知の事実だ。だからこそのこのタイミングでの試験の実施が決定された」

「ゲル様がわざわざ遠くへと修学旅行に行かれるのは、いざという

ときにゲル様を頼らないようにするためにございます」

「そうやったんか……」

克蘭レスの説明が終了し、マリーとネギは納得した風に頷く。
そして、

だったら初めからそう言ってよ……。とばかりに、恨めしげな視線を犬神に向けた。

「まあ、ワイハーに行きたかったというのは本当だがな」

「……火山の話は冗談やんな」

「さて……」

「話そらさんにとって!?!?」

そんないつも通りに犬神とマリーの掛け合いに、ネギは少し笑みを浮かべた。そんなネギをしり目に、所長席のデスクの引き出しの中から何かを取り出した犬神は、それをネギに向かって投げつける。

「ほれ、野菜。餞別だ」

「はい?」

キラキラと光り何かが放物線を描いて飛び、ネギが広げた手のひらに収まる。

その物体を掴み取ったネギは、自分の手に収まった物体 銀製

のペンダントで、三つの五芒星が書かれている　を見つめて首を
かしげた。

「なんですか？　これ？」

「お守りみたいなものだ。持っておけ」

犬神がそう言うと同時に、マリーが恐れおののいた様子でそのお
守りを見つめた。

「い、犬神君がタダで物を……しかも、神を信じてへんくせにお守
りやって!？」

「安川……僕が神を信じていないといついった」

「いや、言っへんけど普段の言動からしてそうやんか？　神をも
恐れぬ所業しとるやん？」

「安川……ここで僕の座右の銘を教えてやろう。『神の沙汰も金次
第』」

「神すら金で動かす気かいな自分!？」

そんな風にいつもの漫才モードに戻った二人をしり目に、ネギは
ゲルから渡されたお守りを握り締め、目を閉じる。

右も左もわからなかった自分に、自分を利用しようとしている大
きな力があることや、それに対抗できるように力をつけること、社
会の厳しさを教えてくれた犬神アンダーグラウンドでの生活を思い
出しながら。

「……」

ああ、思い出せば……

「……」

……ろくなことがなかったな。

反面教師にであつわ、三十代モラトリアムを捕獲しなければいけないわ、見たくもない浮気現場の調査に向かわされるわ、たきつけられて怒り狂った最強の吸血鬼と戦わされるわ……。

でも、まあ……。

「楽しい生活だったんですけどね」

「ネギ？」

そんなネギの様子を不審に思ったのか、心配そうな声でヒメが話しかけてきてくれた。

「どうしたの？」

「……べつに」

そんなヒメの頭にポンと手を置き、ネギはにっこりとほほ笑んだ後、

「犬神さん!!」

大きな声で、マリーのハリセンを食らっている犬神に話しかけた。

「……なんだ？ 野菜？」

マリーの一撃によって吹き飛んだ眼鏡を拾いながら、犬神はそう返す。その目には鋭い光が宿っており、ネギの一挙手一投足をじっと見つめていた。

「今までありがとうございました！！ 試験……絶対合格して見せますー！！」

ネギはそう言って、元気良く頭を下げた。

ほぼ直角。最大級の礼。

それを送ってくるネギを、犬神はしばらく無感動な目で見た後、

「ああ……がんばっていい」

いつものようにそっけなく、そう言葉を返すのだった。

ある空港での一幕と、ネギが持つお守り……

「ホンマにいつてええんやろか？」

「何がだ？」

とある国際空港にて、金髪をエアバンドでまとめた少年と、メガネをかけた鋭い瞳を持つ少年がキャリアバックを傍らに置きだべっていた。

彼らの周りにはいかにも「これからハワイ行きます!!」浮かれきった雰囲気垂れ流す男子中学生たちがたむろしており、ハワイでの予定を立てている。

そう。このメンバーは麻帆良の男子中等部の修学旅行メンバー。女子中等部がまだに旅行の準備をしているのに対して、彼らは行き先がハワイということもあり、女子中学校よりも早めの出発となっている。

「いや……京都って色々不穏なうわさがある所やん？ そんなところにもネギ一人で行かせてえーもんかいなとおもて……」

金髪ヘアバンドの少年……スパルタン？こと六重は、少し心配そうな表情をしながら、自分のことを師匠としたってくれる少年のことを思い出す。

彼としては、いくら近衛詠春の守りがあるといつても、10歳の弟子を一人敵地に放り込むのは忍びないと思っていたりするのだが

……

「何をくだらないことを……。それにやつは一人じゃない。安川も神楽坂もいるし、何よりあの桜咲刹那もいる……。いざとなれば封印状態とはいえエターナルロリも参戦できるのだ。これ以上の盤石な夫人はないだろうが」

ネギの家主であるメガネをかけた鋭い目をした少年……。犬神はいたつて平然とした様子で、そう吐き捨て視線を手に持っていたハワイのパンフレットから一切外すことはなかった。

「なにより……」

「なにより？」

「ぶつちやけ、そろそろあいつの生活費が学園長からもらえる報酬に届きそうだからな。いい加減ほかのところに移ってもらわないと困ると思ったのだ……」

「きみゆーやつは……」

そんな犬神のあんまりな態度に、ドン引きする六重。そして彼の隣に座っていた毛先が遊んだ髪を持つ、蝶ネクタイをつけた少年探偵然とした恰好をする少年も、思わず顔を引きつらせる。

「君はホントに相変わらずだね……」

「何か言ったかイエダ二君？」

「僕の名前は猫谷だがね！！　といか、君の口癖師匠にまで移ってしまったじゃないか！？　どうしてくれるー！！」

犬神の呼びかけにクワツと怒声を上げながら立ち上がったのは、麻帆良の魔法生徒一の実力を持つといわれる猫谷コースケ。原作者が猫田一にしようと思っただけで猫田一金五郎がもったいたのでやめてしまっただけのキャラクタである。

「なんか勝手にいわくつきにされた気がするが……」

「何を言っているんだネコダニ君」

「ダニじゃなくて谷!!」

「些細な違いだ」

「その些細の違いが僕が人間かどうかの分水嶺なのだが!？」

犬神との会話の間は顔に縦線入れまくりの彼だが、実は本当に実力があり、炎属性魔法最強の《燃える天空》の完全制御をこの年ではたしていたり、図書館島の地下に住むある変態を師事して重力魔術を覚えていたりするのだが……。

「くそっ!! ハワイでほえ面書かせてやるからな!! じつちゃん……猫田一家始まって以来の天才と呼ばれながら謎の失踪をとげたじつちゃんの・息子なのにパツとしなくてコンプレックスの塊で、でも乗り越えようとしてじつちゃんを探しに行っただけ音信不通の父さんを・心配しつつも僕を見守ってくれてそれでもやっぱり心労で倒れてしまい、現在入院中の……母さんの名にかけてえええええええええええ!!」

泣きながら空港のどこかへ走り去っていくネコダニを、犬神は見

そして、男子中学生たちが空港で集まっているところの麻帆良では……。

「あわわわわわわわわ……」

「おい……マリィ。ボーヤはいったいどうしたんだ？」

「いや……チヨイ犬神君に危険物持たされてもーてな」

「？」

犬神アンダーグラウンドサーチ事務所内部にて、犬神がいなくなったと聞き嬉々として遊びに来たエヴァと、顔に縦線を入れたマリィが、布団をかぶったままぶるぶる震えるネギを見つめていた。

「危険物？」

「あれあれ……」

マリィが指差した先にエヴァが視線を向けると、そこには、なん

か見ただけで人をムカつかせるかを持った太陽とその下に三つも五芒星が刻まれたペンダントがかけてあった。

「なんだあれは？」

「エヴァちゃんもしらんの？ なんや魔法使いのお守りらしいけど

……」

「知らんな……」

首をかしげてその不審物を見つめるマリーとエヴァをしり目に、布団にこもって出てこないネギはそのお守りを犬神から渡された時のことを思い出していた。

………

「いいか、野菜？ これは僕がある依頼主から無償で巻き上げた高価なお守りだ。命の危機に陥った時にこれを使え」

「あ、ありがとうございます……」

「ふむ。あと、修学旅行から帰ったら7万6500円払えよ」

「お金とられるんですか!？」

「あたりまだ。この僕が無償で誰かに品物を送るわけがないだろう
!?!」

「そんな力強く言われなくても!？」

いつもの犬神アンダーグラウンドサーチでの光景。しかし、犬神はいつもと違い片手にキャリアケースと、アロハシャツを着ていた……。

この格好を見たら十人中十人が「あ、この人ハワイ行くんだな……」と、わかる恰好をした犬神は出かける前にネギにお守りを渡さんとしてこうして会話をしている。

ネギは手渡されたお守りを見て首をかしげる。

そのお守りにはきつちりと魔力が通っており、それなりに強力な魔法の品だということはわかった。だが、犬神が渡してくれたム力つく半笑い顔がついた太陽の下に三つの五芒星がついているお守りなど、ネギは聞いたことも見たこともなかった。

「後野菜……これはちょっとした忠告だが……」

「はい？」

犬神はそういうと、お守りをひっくり返したり回してみたり、光にかざしてみたり、拳句の果てには火であぶってみたりして正体を割り出そうとしているネギに向かって、鋭い眼光を飛ばした。

「もし命の危険でもないのにそのお守りを使ったら……お前は世にも恐ろしい目に合うことになる……」

「よ、世にも恐ろしい目……」

こ、怖いものなしの犬神さんがそんなこと言うなんて……。

ネギはそう思いながら恐れおののく。

「い、いったいどんな目に合うんですか？」

「しゅ、修学旅行まで絶対にあれにふれないようにしないと……。もし間違えて発動してしまったら……。僕は、つぼくはあああああああああああ！！」

「なあ、マリー」

「なんやエヴァちゃん……」

そんな風にガタガタ震えるネギを見て、エヴァは三白眼で壁に刺さったくぎに掛けられたペンダント型のお守りを見つめた。

「あれ……もうお守りっていうか、呪いの品じゃないか？」

「エヴァちゃん……私も思ってたんやけど、それはゆーたらアカン……」

何とも言えない空気のもと、二人はとりあえず修学旅行の準備のために明日菜や木乃香も誘ってショッピングへ行く相談をするのだった。

ある空港での一幕と、ネギが持つお守り……（後書き）

ようやく更新……遅れてすみません。次からは週一に戻します！

…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

「はあゝ。このお守り捨てちゃダメかな。ダメなんだろうな」

新幹線が走っている麻帆良近郊の駅に向かいながら、ネギはそうつぶやきながらため息を漏らす。その肩には珍しいことにカモが乗っており、

『あ、安心しなよ兄貴！　それが魔法の品なら魔力さえ通さなきゃ問題なしだぜ！』

と行って、ネギを慰めていた。

「ううう……そうだけどさあ……」

本当に京都へ行けることは楽しみなのだ……。楽しみなんだけど……。

「はあ……いつたいなんなんだろこのお守り？　犬神さんのことだからただの飾りってことはないんだろうけど……」

まったく面倒なものを渡されたものだよ……。

ぶちぶち文句を言いながらも、ネギは特に何の問題もないまま駅へと到着。まだ教師たちが集まるにも若干早い時間だったが、新人のネギが最後だったらまずいよね。という、あからさまに一般社会人のような思考でネギはこの時間につくように目覚ましを設定していた。

犬神と暮らすうちにすっかりと社会人の常識が板についてしまったネギだった。

だが、

「遅いぞボーヤ！」

ネギよりも早くにやってきていた強者が一人……。

「え、えつと……おはようございますエヴァさん」

「おはようボーヤ！ 今日はいいい修学旅行日和だな！ まあ、修学旅行にやってきそつな停滞前線やら雨雲は私が魔法で蹴散らしたんだが！！」

何かとんでもないことをさらつと吐いて『フハハハハハハ！』と笑うのは、みなさんご存知の吸血鬼真祖エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。京都へ行くことを誰よりも楽しみにしていた、年齢600の最強の魔法使いの一人……。

「やはり初めに行くところは清水寺か！ わかっている……わかっているな今回の修学旅行委員は！！ 京都語るに当たってまず最初は清水寺といつても過言ではないからなあ！！」

目をキラキラさせながらタガが外れたかのように笑いまくるエヴァンジェリンに、いろいろと楽しみにしてて人のことは言えないネギだったが、若干引いてしまった。

「な、なんかテンション高いですね……エヴァさん」

「久しぶりのご旅行ですから……。おまけにお友達としてマリー様たちも一緒ですし」

「ああ……それで」

600歳の吸血鬼もかわいいところがあるんですね。何やらほのぼのとした空気ですものように着かず離れずついてきた茶々丸とネギがエヴァを見つめていることなどつゆ知らず、エヴァはひとしきり修学旅行のしおりを絶賛した後、

「で？ ボーヤはいつたい何を持っているんだ？ やたらと濃い魔力反応を感じるが」

「え！？」

若干胡乱気な瞳で、ネギを見つめた。

その視線はネギのカバンをしっかりとロックオンしており、そこにつけられたキーホルダーに見せかけたお守りをネギ越しに見つめているかのようだった。

「よ、よくわかりましたね……」

「ふん。だてに長年魔法使いをやっていない。で、何のだそれは？ 私ですら見たことがない魔法具だが？」

「あ、やっぱりエヴァさんも知らないんですか……。犬神さんに渡されたもので、『お守り』だそうなんですが……」

「おまもり？ あいつが？」

神も仏も信じない守銭奴の黒い笑みを思い出し、エヴァは信じられないといった様子でお守りをネギのカバンからむしり取った。

「あ、ちょー！？ 何するんですか！？」

「うるさい。せつかくの修学旅行にそんな胡散臭いものを持つてくるな」

「いくら何でもひどすぎ……」

ネギはそこまで言いかけて思い出す。

犬神がやってきた数々の所業を……。

「……とは思いませんが」

「だろ？」

「で、でも犬神さんがくれたものを捨てたなんて知れたらあとでどうなるかわかったものじゃないですよ!!」

「むう……」

ネギの言葉に一理ありと思ってしまったのか、エヴァンジェリンはしばらくお守りを見つめた後。

「さわらぬ神にたたりなしだな……」

「はい。まったくもってその通りです。触らなければ全くの無害の
はずですから!!」

微妙な表情を浮かべながら渋々とネギにそのお守りを返すのだった。

「うわ、ネギ君早いね！？ エヴァちゃんは……楽しみで眠れなかったの？」

「だ、黙れ！！ 瀬流彦そんなじゃないわ！！」

よしよしと言わんばかりに頭を撫でてくる魔法先生・瀬流彦先生に、顔を真っ赤にしながら彼のすねをゲシゲシと蹴りつけるエヴァを見ながら、ネギは集まってきた生徒たちの点呼を取っていた。

そして……

「あ、明日菜さん！！ それにマリーさんも！！」

「おはようネギ！ マリーに聞いたんだけどあんたまた厄介ごと頼まれたんだって？ ピンチになったら呼びなさいよ？」

「あ、はい！ でも、一番心配なのは敵のほうではなく味方の気遣いなんですけどね……」

「？」

「犬神君がお守り渡してきてん……」

「ああ……。頑張りなさい。ネギ」

「はい……。ありがとうございます明日菜さん」

同情するようなまなざしを向けてくる明日菜やマリーの視線で、ちよつと泣きそうになったのはネギだけの秘密だったりする。

とにかく、これでネギのクラスは全員の人間がそろったことになる。

「はい。それではみなさん乗ってください。席は栞に乗っている通りでお願いします。車両を間違えないように!!」

「ああ……。ネギ先生今日も凜々しいですわ!!」

「委員長はホント犯罪者臭いよね」

「あらあら、あやかったら。在学中はつかまらないでね?」

「那波は意外と黒いことを言うな……」

「はあ……。ネギ先生大丈夫だろうか?」

「肉まんひとつもらつてあげるよ」

「まいどありアル」

「これからも御ひいきにネ」

「あ、オネーちゃんそつちは違うクラスの車両です!!」

「ほら、きょう一緒に回りにませんかぐらい行つてきなさいよ。」

「む、むりだよ。今日は自由行動でもないし……。」

「まったく。では明日が勝負ということになりますね……。」

騒々しい会話を繰り返しながら続々と新幹線に乗っていく生徒たちを一人一人確認しながら、ネギは名簿にチェックを入れていく。

そして、

「よし……。相坂さん以外は全員集合つと。しずなせんせい！
3-Aそろいました。」

「はい。わかりましたネギ先生」

こうして……修学旅行が始まる……！！

修学旅行一日目 2

「なんやなんやこの騒ぎは？」

隣の車両から聞こえてくる賑やかな声たちに、新幹線の隣の車両で眠っていた帽子をかぶった金髪の男が目を覚ます。

無精ひげに鋭い瞳。どことなくただならぬ秀囲気を垂れ流す男ではあったが、その服装はなぜかボロボロでかなり情けない印象を受けた。

そんな男に、車内販売をしていた女性が申し訳なさそうに頭を下げ、苦笑を浮かべる。

「も、申し訳ありませんお客様……。現在隣の車両は麻帆良学園都市御一行様の貸切となっております……」

「ああ……修学旅行かいな。ホナ多少はしゃぐんはしゃーないな。ええでええできにせんで。さすがに修学旅行に水差すような無粋な真似はせーへんよ」

ニコニコ笑ってそういう男に、車内販売の女性はほっと息を漏らし今度は普通にほほ笑んだ。

「ありがとうございます、お客様」

そういって、先ほどから生徒たちの声が聞こえる車両に車内販売に向かう女性。車両に移った際にだれかにぶつかったのか、

『あぶっ』という悲鳴と『す、すいません!!』と勢いよく謝る声が聞こえてくることに目を細めながら、男は少しだけ笑みを浮かべて呟いた。

「まあ……あのねーちゃんは無粋なことする気満々みたいやけどなにして麻帆良か……。誰に聞かせるでもなく呟いた男は、新幹線の窓の外を見て思いをはせる。

「あのアホ娘は元気にしとるんやろか？」

男の呟きは誰に聞かれることもなくきえ、男の存在は京都につくまで誰にも知られることはなかった。

…†…†…†…†…†…†…†…†…†…

「ネギ君大変やったな」

「あう。なんかいきなりついてなかったです」

「何へこんでんのよネギ！ 修学旅行はこれからなんだからね」

「ん？ ネギ君なんかあつたん？」

「な、なんでもないわよ木乃香!!」

「まったくボーヤは！ 私の初めての修学旅行なのだぞ！ そんな

しみつたれた顔を私に見せるな!!」

「え、エヴァンジェリンさん……それはさすがにちよつと……」

車内販売の台車にぶつかられ、ますます今回の修学旅行に不安を感じるネギが泣きついたのは、五班と六班のメンバーがたむろしている席だった。

そこにいたのは、いつもの面々。

苦笑いを浮かべて頭を撫でてくれるマリィ。ネギを叱咤し励ましてくれる明日菜。ほけほけした笑みでネギをいやしてくれる木乃香へこむネギを鬱陶しそうに見つめて相変わらず辛辣な言葉を吐くエヴァンジェリンと、その後ろに影の様に待機している茶々丸（一礼してくれた）。そして、木乃香の隣に無理矢理座らせられ若干居心地が悪そうにしている刹那と、その刹那を強制的に座らせたのだと思われる一言も喋ろうとしないザジだった。

「あれ？ ほかの5班の皆さんは？」

そこでようやく三人ほど生徒が足りないことについたネギは、きよるきよるとあたりを見回し残り三人を探す。

修学旅行しよっぱなから行方不明とか真剣に笑えない。

「って、あんたはどこに目がついてんのよ。本屋ちゃんたちなら……あつちでカードゲームしてるわよ？」

「カードゲーム？」

ポーカーか何かでしょうか？

近代の遊びに若干疎いネギがそう首をかしげてそちらに向かうと、

「あ、ネギ先生！！ やっほ〜」

「あ、先生もやる？」

「最近はやりのカードゲームです」

「魔法使って戦うんだよ？」

「へ〜。魔法を……」

そこには色々な班のメンバーが入り乱れて可愛らしいキャラが描かれたカラフルなカードを使って戦いを繰り広げていた。

どうやら明石が出したきらきら光るカードがかなり強力なようで、相手の早乙女はただならぬ冷や汗を流している……。

「楽しそうですね。若干冷や汗をかいている人もいますけど……」

「あはははは……お菓子かけてバトっているからね……下手をしたら今日の分のお菓子が全部パーに……」

「ほ、程々に楽しんでくださいね」

どうやら先ほどの戦いで大量のお菓子を取られたらしい。早乙女の目が若干涙目だったことに気づいたネギは、苦笑交じりにそうついなながらほかの場所も見回りするために次の車両へと移る。

「まあ……賑やかで楽しいし、確かにそんなにへこんでても進まないか」

楽しげに修学旅行の時間を過ごす自分の生徒たちに励まされ、ネギは顔の笑みを取り戻しながらぐっと手を握りしめる。

「よーし!! 僕もめいいっぱい修学旅行を楽しむぞ!!」

『おいおい兄貴！ 楽しむのはいいけど、あんま油断しねー方がいいぜ』

「え？ なんでさ？」

どこそのエロゲの主人公みたいな聞き方をしてくるネギに、カモは煙草を片手にニヒルに笑う。（完全にオコジョのためそんなに恰好はついていなかったが……）

『ジジイもゲルの旦那も言ってただろう？ もしかしたら道中に妨害が入るかもしれないって！ もしかしたらもう西のスパイが入り込んでいるかもしれないぜ!!』

「え？ スパイ!？」

ネギがそう驚いた時、

「うわわわ!! トイレトイレ!!」

一人の男がそういいながら、麻帆良の車両に飛び込んできたのは。

「あ、ちょ！？ 今日はこの車両は貸し切りで」

「すまん坊主！！ 漏れそうなんや！！ あっちの車両のほうが近いし勘忍してや！！」

「あ、ちよつと！！」

短い金髪を帽子からのぞかせたぼろぼろの服を着たオッサンがそうつって麻帆良の車両内部に入り突っ切っていく。

それを見ていた生徒の何人かはぎょつとした表情になったが、マリーだけは大きく目を見開き固まった。

「なっ！？」

しかし、そんなマリーの様子に気づいた風もなく男はまるで瞬間移動したかのように向こう側の扉に出現した。

「「「「「え！？」「「「「」

「なんだと！？」

「瞬動術！？ 私達ですら入りも抜きもわからなかった！！」

まるで幻でも魅せられているかのようなその光景に、今度こそ麻帆良の女子たちの度肝を抜かれたが、エヴァンジェリンと刹那だけは違い、瞬時に懐に入れた触媒と、背中に背負った刀を手取る。

「お騒がせしましたあああああああ！！」

しかし、男はそんな二人を一切気にかげず即座に車両から出ていきトイレへと全力疾走を開始したのだった。

「……な、なんだっただんでしょうかいまの？」

「さ、さあ？」

「……」

男の様子に首を傾げるしずなとネギ。唯一何かを知ってそうなマリイは不機嫌そうに黙りこみリュックの中にツッコんであったポテチを取出し、そのうち数枚をまとめて口の中に放り込んで噛み砕いた。

…十…十…十…十…十…十…

「ふう〜。もれるかと思ったで……」

まさか、ビタミン剤と騙されて速効性の利尿剤されるとは……あの白髪依頼者何考えトンねん。

トイレから出てきた帽子金髪ポロポロオッサン……略してボッサンは、そんなことを言いながら舌打ちを漏らす。

これからあの麻帆良生徒ばかりの車両を通って自分の車両に帰らなければならぬことに鬱になったのだ。

いくら破天荒の彼であっても流石に二回もあの中に突っ込むのは気が引けるのだ。

それになんか見覚えのある少女……というか、であった瞬間即殺されそうな少女が中にいたし……。

「しゃーない。屋根に登って迂回しよか」

男がそう決意して、新幹線のドアを穩便にあけようと張り付いた時、

「までっつ!!」

「ん？」

先ほど車両ですれ違った赤毛の少年がどうしているのかわからないが、新幹線の車内を一直線に飛んでくるツバメを追いかけて走ってきた。

そのツバメは何やら上等な便箋を啜えており、どうやらそれが少年がツバメを追う理由らしかった。

「ぶん……」

そのツバメが何か普通のツバメではないことを長年の経験で悟った男は、無言でそれを見つめた後、

「ほいつ」

「!!」

そのツバメが彼の横を通り過ぎる瞬間に、気で強化された手を一閃。それなりの強度があるはずのツバメの体を一瞬で粉碎し、バラバラに砕いた。

啜っていた存在がなくなりひらひらと宙を舞う便箋。男はそれを器用にキャッチすると、息を切らしながら追いついてきた少年に、微笑みながら便箋を渡す。

「うっ……ありがとうございます……。って、あなたはさっきの変なおじさん!!」

「そうです……私が変なおじさんです！　って、ちゃっわボケ！　助けたったのになんやその態度!!」

何やら本場関西のノリツッコミを喰らった気がする……。

「あぶぶぶぶぶ!!　す、すみません!!　ちょ、ちょっと気を張ってうっかり本当のことを言ってしまった!!」

「フォローになってへんで?」

「ったく。最近のガキは……」。

ボッサン（確定）はそんなジジ臭い文句を言いながらも、ネギに便箋を返し首を横に振った。

「にしても少年……こんな上等な手紙すぐにとられたらアカンで俺なんかこんな便箋買う金すらないのに……」

そんなボツサンのセリフに、ネギはしゅんと落ち込んだ後、ため息をつく。

「わかつているんですけど……。これ、ちょっと重要な書類で……。これを渡されたくないって人たちに狙われちゃんでいるんです……」

思わずそんなことを漏らしてしまった後、ネギはしまった!! といわんばかりの表情で口をふさぎ、カモは必死に動物のふりをしながらだらだらと冷や汗を流す。

ゆ、油断していた!! 親書を取り戻せたからといって油断しすぎてしまった!! も、もしもこの人が関西のスパイだったら(金髪碧眼だから十中八九ありえないだろうが……)!!

ネギの頭の中に大量の後悔と、悔恨の言葉が飛び回る。

しかし、覆水盆に返らず。時すでに遅し。

ネギが思わずこぼしてしまった言葉に、男はスツと目を細めねぎを睨みつけると、

「重要書類って……金目のもん？」

「違います!!」

目を¥の形にして輝かせた。

しかし、親書は当然そんなものではないのでネギは即答してしまふ。何となく、ネギのツツコミの瞬発力が上がったように思える力

モ。しかし、優しい彼はネギのそのことを教えることはなかった。

いや、だってなんかいろいろ絶望しちやいそうだし……。

そんなことはともかく、ネギの力強いツッコミまじりの否定にボッサンは『チッ』と舌打ちを漏らしたあと、興味なさそうに立ち上がる。

「まあ、そんな大事なもんなんやったらしっかり守りや少年」

「ええ……。それはわかってはいるんですけど……僕まだ素人ですし……。そんな僕に多大な期待寄せられても困るっていうか……」

何とも気弱な発言をするネギ。

原作でなら彼はやる気いっぱいなのだが、何せ今の彼は下手に現実が見える分自分にたいする評価もシビアだ。

今の自分が一体どこまでできるのかをしっかりとわきまえて理解している。式神の存在を今まで知らなかった自分がどうして関西の魔法使いたちと渡っていけようか……。ネギの冷静な部分があったさりと親書を取られてしまったネギに、そう問いかけてしまっているのだ。

そんなネギを見て、ボッサンはしばらく黙りこんだ後……。

「あきらめたらそこで試合終了やぞ?」

「!?!」

そのオッサンの言葉に、ネギは目を見開き、うつむいていた顔を慌ててボッサンのほうへ向ける。

そこには、にやにや笑っているボッサンの顔があった。

「俺実は名言売りしとんねん。俺が考えた名言を一言ずつ人に教えて励ましたってんの。ちなみに一言2000円。ホンマはいまのものうんねんけど、ここであつたんも何かの縁。特別に無料で聞かせたるわ」

「ほ、本当ですか!! ありがとうございます!!」

目をキラキラさせながらお礼を言うてくるネギに、ボッサンはさらに笑みを深くしながら大きくなづく。

「ちなみにほかの言葉もあるんやけど……ききたい? 次からは有料やけど」

「き、聞きたいです!!」

コクコクと何度もうなづくネギに、男は次々と自称《俺が作った名言》を吹き込んでいく。もちろん一言につき2000円ずつむしり取って。

ちなみにカモは日本に来たばかりなので、日本の名言はよく知らなくこの詐欺まがいの商売の正体に気づかなかった。

こうしてネギは修学旅行一日目にして2万円の金をだまし取られることになるのだが、そのことに彼が気付くのはもうちょっと先の話。

後日談

…
十
…
十
…
…
…
…
…
十
…
十
…

ボツサンの場合。

「おのれ……俺に利尿剤飲ますとか何考えとんねん？」

ボツサンは額に青筋を浮かべながら、新幹線の屋根の上でお茶を飲んでいた白髪の少年に詰め寄った。

「まあ、そう怒らないでくれ安川。君が行ってくれたおかげで千草さんは首尾よく親書をとれたみたいだし……」

白髪の少年はそんなボツサンの様子にも眉一つ動かさず、悪びれた様子もないまま言い訳を始めようとする。その時！

「こつらあああああああああ！！ 安川何考えとんねん！！
あんたのせいで新書奪取がペアになってもうたやんけ！！」

「……詳しく聞かせてもらおうか安川？」

「あ、あれ？」

怒り心頭といった様子で、式鬼に守られながら屋根に上がってきた、車内販売の売り子に変装した千草の怒声を聞き、白髪の少年からとんでもない殺気が放出される。

今まで怒っていたはずのボツサンは、今度は逆にガラガラと冷や汗を流し始め、怒られる側へとジョブチェンジを果たしたのだった。

ネギの場合。

「敵を知り己をれば百戦あやうべからず」

キリつとした顔で名言を言ってくるネギに、突然何言いだすんだ？ という表情をしながら明日菜は首をかしげる。

「いきなりなにいつてんのネギ？」

「えへへへ！ 実はさつき親書を取り返してくれたおじさんに教えてもらったんです！！すごいんですよそのおじさん！！含蓄のある言葉やためになる言葉をいっぱい知っていて……。しかも、そのすべてが一言2000円という低価格で教えてもらえて……」

「へ〜。それ凄いわねネギ。名言売りなんていたんだ……」

明日菜はバカだったので、その名言の正体を知らなかった。

しかし、

「ネギくん？ ちょっとそのオッサンがどこに行ったか教えてもらえへん？」

「へ？ この車両通るのは絶対嫌だから屋根伝いに三号車に戻るっていつていましたけど……」

「あんの腐れオヤジがああああああああ！！ ネギ君になにさらしてくれとんねん！！」

「うわっ！？ ど、どうしたんですか！？ マリーさん！！ 落ち

着いて!!」

車内中に響き渡るマリーの怒声を聞き、屋根で正座させられながら千草と白髪少年のステレオ説教を喰らっていたボッサンが悲鳴を上げて逃げ出したかどうかは、定かではない……。

桜咲刹那の場合。

「……なんで来ない」

ボッサンがツバメを仕留めた車両の一つ先の車両で待ちぼうけを喰らっていたりする……。

修学旅行一日目 2 (後書き)

ボツサンの正体はいつたい誰なのか!!

はい……隠す気は全くありませんでした!!

修学旅行1日目 3

IN清水寺

「京都お〜!」

「これが噂の……飛び降りるあれ!」

「誰か飛び降りレッ!」

「では拙者が……」

「やめんかい。せつかくの修学旅行を惨劇に変えるつもりかいな……」

いつも通りテンション上げ上げなクラスのメンバーにとりあえずハリセンでの一撃を加え肅清するマリーに、明日菜は思わず苦笑をする。

新幹線ではちょっとおかしかったけど、この分だとマリーは平常運行できそうね……。

「いえいえ。必ずしもそうなると決まったわけではありませんよマリーさん」

「え? そうなん!」

そんな風に明日菜が安心している目の前で、京都産の正体不明なジュースを飲んでいた綾瀬夕映が唐突に口を開いた。

「はい、有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉通り実際江戸時代に234件の飛び降りが記録されていますが生存率は85%と意外に高く……」

「うわっ!! なんか変な人がいる!？」

「夕映は神社仏閣マニアだからね」

「「ほ」

一般女子生徒たちがぺらぺらと紡ぎだされる夕映の豆知識に若干引いている気がする……。まあ、知識欲旺盛な外国人二人組はかなり感心したようすで話を聞いているが。

ちなみに話しかけられたマリーは……。

「私のツッコミが的を射てへんかったやなんて……。鬱や。死のう……」

「落ち着きなさいマリー!! 生存率85%っていつても残り15%は死んでるから!!」

文字通り清水の舞台から飛び降りそうになっているところを明日菜に止められていたが……。

さらにエヴァンジェリンは……。

「わはははははははははははははははは!! ここが京都!! 夢にまでみた京都おおおおおおおおおおおおお!!」

「マスター……。落ち着いてください」

茶々丸がおろおろ慌てるほどテンションが上がってしまっており、お土産が陳列されている棚ごと買い取るうとしたり、境内の中を走り回ったりして……。なんかもう手が付けられなかった。

「ちなみにこの先には恋占いで女性に人気の地主神社があります」

「」「恋占い!?!」「」

「うむ!?!」

もっとも、その言葉を聞いて若干の鎮静化を見せたが。どうやらエヴァンジェリン……。いまだにナギに未練があるようだった……。

「さらにちなみに、その階段をくだると有名な音羽の滝に出ます。そこから流れる水を飲むと《学業》《健康》《縁結び》のご利益が……」

「縁結び!?!」

「」「それだあああああああ!?!」「」

「ふ、ふん。まあ興味はないがついて行ってやらんこともないぞ!」

「マスター……。顔が赤いですよ?」

「う、う、うるさい!?!」

先ほどと変わらないテンションでネギを拉致って下へと急ぐクラスメイト達に苦笑をうかべながら、明日菜は何とか復活したマリールと、いつも通りほけほけ笑っているながらも、何かを探している様子の木乃香に話しかける。

「縁結びね……マリールや木乃香は興味ないの？」

「いまんところは特におらんなあ……。強いてあげるならネギ君？」

「よくよく考えてみたら五歳年下って結構な数値やと思うんやけど……」

「マリールは？」

「私は……小学校の時は親父に付き合わされて借金取りと命がけの追いかけてこしとったし……。中学はいつてからは犬神君のところやしなあ……。そういったことはあんまり？」

「ああ……。あんたそういう人生歩んできたものね……。犬神は……言ってる思ったけどあれはないわね」

「まったくもってその通りや……。というかあれを恋愛対象の一つに数えること自体人として間違つとる気がする」

「もう二人とも言いすぎやで？ ええ人やんか犬神さん」

「木乃香……眼科に行つて」

そんな雑談を交わしながら三人が遅れて地主神社の境内にやって

「うわっ！？ 結構こんどるな……」

「ど、どれが縁結びの滝なんですか！？」

「右から健康・学業・縁結びです」

夕映からそう教わり一斉に左端の滝へと殺到する麻帆良生徒たち。それを見てマリーはアマゾン川に生息するあの凶悪な魚を思い出したとかいないとか……。

「ちなみにユエユエ……その水筒はなんなん？」

「音羽の滝の水を持ち帰ろうと思いましたが……」

「一杯いくら位で売るつもりなん？」

「大体コップ一杯300円くらいでしょうか？ 京都に行けなかったクラスの子の何人かにすでに予約をもらっています」

意外とちゃっかりしている夕映だった。

だが、

「ね、ねえ……マリー。これちょっとまずくないかしら？」

「ふえ！？」

明日菜の震えた声を聴き、がつつり水筒に水を回収していく夕映からマリーはクラスメイト達に視線を移す。

そして、

「なんで水でよっぱらっとんねん!？」

どこその駅で横になっている酔っぱらいのオッサンぽく倒れ伏す
クラスメイト達がいた。

「ま、マリーさん!! 屋根の上にお神酒が置いてあります!!
これが滝に流れ込むようになっていて……」

「神様の酒をなんやおもとんねん関西呪術協会!!」

「ちょ、どうすんのよ!？」

「チヨイ目立たん所に押しこんどこ!! こんなんほかの先生には
れたら修学旅行中止の上に停学やで!？」

「わかったわ!!」

「了解しました」

「手伝いますよ!!!」

キユポ。

「とか言いつつ酒入りの水をしっかりと確保するユエユエに脱帽し
た!!!」

酔っぱらっていないメンバーが、若干困惑気味に総出で酔っぱら
ってしまったメンツを音羽の滝から引き離そうとした時だった。

「ああん？　なんか酒くせえな？　まさか酒飲んでんじゃないだろうな！！」

「ちよ、先輩！？　何嬉々として銃抜いてんですか！？　麻帆良以外じゃ使っちゃダメですって！！　でもあれ？　ホントになんかお酒臭い……」

「「「あわわわわわわわわわわ………」」」

なんとというかもう停学の危機を乗り越えて命の危機だった。

さすが麻帆良随一の不祥事教師……。京都に来てモエンジン全開だった。

（ちよ！？　どないすんねん！？　新田やったらまだしも、ジョーニ―先生なんて話聞かずに発砲してくんで！？）

（それがシャレで済まないのがほんとシャレにならないわ！！）

（僕遺書書いてきます……）

（（諦めんな！！））

いろいろ絶望した顔でそんなことを言ってどこかへ行こうとするネギを、マリーと明日菜は慌てて押しとどめる。

三人がそんな風に混乱の極みに至った時だった！

「ギャース力騒ぐな酒がまずくなるだろうが」

「え!？」

「あ!!!」

三人に救いの手が差し伸べられた!!

ジョニーとレイジーが見上げた先にいたのは、音羽の滝の屋根に上ったエヴァンジェリン。そこに胡坐をかきながら、先ほどネギが見つけた滝にお酒を流し込んでいたお神酒のタルを肘掛けにして座っているのだ。

「エヴァンジェリン!! テメエか酒飲んでんのは!!」

「別に問題ないだろう? 私の実年齢を知らんわけではあるまい。よって私は酒を飲んでもセーフ!! こんなお神酒の聖地に来たんだ。飲まんの叛逆に無礼だろう!!」

「おう。まったくだなロリババア。あとで俺にも一杯よこせ!!」

「お前にやるのはエターナルフォースブリザードしかないな……」

「ああん!? ンだところ!! やんのかこら!!」

「ちょ、先輩!? 生徒にケンカ売らないでください!! はあ……僕はもう何も言わないけど一応君は学生ってことになっているんだ。あんまり派手なことはしないでよ……」

「安心しろ。認識阻害くらいはかけてあるぞ」

「ならいいけど……」

そういつてギヤーギヤーわめくジョニーをひずりながらレイジーは去っていく。幸いなことにそこらじゅうで寝転んでいる生徒たちには一切触れなかった。おそらくエヴァが丸ごと認識阻害をかけてくれたのだろう。

魔法先生すらだまし切る認識阻害。吸血鬼真祖の面目躍如といったところだろう。

「た、たすかった……」

「オオキニ、エヴァちゃん!! 助かったわ!!」

「ふん。こんなことで修学旅行がふいになってしまっただけでは困るからな。べ、別にお前たちのためとかじゃないからな!!」

エヴァに抱き付くことによって感謝を示してくるマリーに顔を赤くしながら、エヴァはそっぽを向く。

「あれがツンデレというやつですね!! 犬神さんに聞きました!!」

「あ、あれがツンデレ……。高畑先生にも通じるかしら?」

「マスター。ツンデレ乙」

「凍りつけええええええええええええええええええ!!」

がっつりその光景を見られて、あとで散々いじられることをエヴ
アンジェリンはまだ知らない……。

修学旅行1日目 3 (後書き)

話がなかなか進まない……。

いや、学園祭編で終わる予定なのでこのくらいでちょうどいいの
でしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2220s/>

ネギま!! とある外道の少年探偵

2011年12月23日01時52分発行